バースデイ・イヴ

～天使はキミを利用し、
そして愛した～

たなかひまわり

バースデイ・イヴ～天使はキミを利用し、そして愛した～

http://p.booklog.jp/book/90561

速達
メッセージ
白い服の男
誕生日
障害
固執
事件
待っていたはずの言葉
背中を押すもの
夢への階段

著者：たなかひまわり
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/90561

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/90561

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

速達１

　今日は月曜日。樋口涼子の勤める書店の定休日だ。そんな朝、涼子は油断した。

「お母さん！　起きないの？　七時半だよ！」

　部屋との温度差が十五度はありそうな温かい布団の中で、涼子は小学三年の娘、七海に叩き起こされた。七海は涼子が二十歳の時に産んだ子だ。

「え？」

　布団の中で体をくるりと反転させ、涼子は枕元に置いてある目覚ましを見た。スヌーズにしてあるはずの時計がオフになっている。

「あたし、止めてないからね」

　責められる前に七海は予防線を張った。

　涼子はうつ伏せのまま、生意気な娘を横目で見上げた。そして、時間を遡った。

　就寝前、自分で時計をセットしたのは覚えている。七海には、何回鳴ろうが、うるさかろうが、絶対に止めるなと言ってある。七海はふざけたことを滅多にしない。だから、スイッチを止めたのは自分なのだ。今朝の事は全く記憶にないが、それしか考えられない。

　昨夜、涼子は肉体的に疲労しているもののなかなか寝付けずにいた。涼子は時々そのような状態に陥る。

　両 親を早くに亡くし、一人っ子で身寄りのない涼子は、母子家庭で気を張る毎日の中、謂れのない不安と心細さに襲われる事があった。大きな一戸建ての窓から洩 れる灯りを見ると尚更だ。その家々の主婦達はそれぞれに悩みを抱えていたとしても、頼もしい力に守られて生活している。病で倒れても食べる事にはきっと困 らない。

　涼子にも頼ろうと思えば頼れる相手はいるのだが、これといった用事でもない限り、自分からの連絡は極力避けている。

　その相手は仕事や家族、友人に対して、自分を犠牲にしてまでも尽力する人なので、自由な時間をほとんど持たない。涼子に対しても同じだ。涼子がＳＯＳを出すと、無理をしてでも時間を

割こうとする。

　それを身近に見て知っている涼子は、自分が甘えるわけにはいかないと凍えそうな心を自分で温める。

　涼子が人に甘えないのはその相手のせいだけではない。今の涼子は過去に受けた傷や離婚の際に出来た鎧のような自立心を身に纏っている。

　一人で生きる……頑ななまでに貫こうとしている決意が根底にある。弱い自分を一度でも出したら、ボロボロと崩れ落ちそうで怖いのだ。

　もう一人、決意を揺るがないものにさせている存在がいる。七海だ。彼女の中には涼子の元夫、つまり七海の父親が今でも変わらず心の中に強く根付いている。

　まだ三人家族だった頃、「家族は宝」と口癖のように言っている彼女から、両親の揃った家庭というものを奪ってはいけないと何度も離婚を思い留まった。それでもある事をきっかけに結婚生活を維持していく事が限界だと感じ、涼子の決断で家族という形を解消した。

離婚に対して後悔は全くないと言い切れるが、その傍らで七海の宝物を壊してしまった罪悪感がずっと消えずにいる。テレビなどに父親と母親の笑顔に包まれた子ども達が映し出され、その子が描いた絵……家族が横一列に並び、手を繋いで微笑んでいる絵を見たりすると、日頃封印していた感情が湧き上がり、胸が張り裂けそうになる。

涼子も本当は温かい家庭を作りたかった。疲れて帰ってくるお父さんを娘と一緒に出迎え、温かい食卓を家族三人で囲み、休みの日にはドライブしたりキャンプしたり……。誕生日やバレンタインには、お父さんをどうやって喜ばせようかと娘とサプライズを考える。毎日、会話と笑顔の耐えない家庭を作りたかったのだ。

でも、出来なかった。涼子は家庭を修復することに疲れてしまい、あれ以上自分を犠牲にすることが出来なかった。

周囲に我慢が足りないと言われようと、自分を押し殺すことに途方もない無理を感じた。だからあの日、心の中で七海に謝りながら、理想の家庭像からそっと手を放した。

まだ二十代の涼子には、結婚に抱いていた夢に向けて一からやり直すことが可能かもしれない。だが、七海にとって父親は一人しかいない。彼女は涼子の再婚を望んではいない。

娘に両親の別離という悲しい結末を味合わせてしまった以上、涼子は母親としての自分が最優先だった。自分が幸せになったとしても、七海に空虚感が残るのでは意味がない。

それでも昨夜のような心持ちの日は、ついつい携帯を開く回数が増える。

声が聞きたい。

そう思って着信履歴に残った相手の名前を表示させる。同時に０時を過ぎた携帯の時計を見る。躊躇う気持ちが心を占め、発信ボタンが押せなくなる。

せめてメールをしようかとも思うのだが、返信を期待する自分に疲れてしまうのがわかっている。ため息と共に携帯を閉じる。でも、こんな時くらい甘えてもいいのではないか。涼子は再び携帯を開く。でも……。その繰り返しだった。

呼吸しているのか、ため息をついているのかわからないくらい落ち込むと、涼子は本を読み、気持ちの安定を図る。

涼子にとって読書は精神安定剤だった。主人公に自分を投影させ、現実逃避をする。どっぷりと物語の中に入り込むと、読後、現実に戻って来た時にすっかり切り替えの出来ている自分がいた。

昨日読んだ本は大学生の女の子が主人公で、好きだと意識し始めた幼馴染みを事故で亡くしてしまうところから物語が始まっている。

いろいろな後悔に苛まされている彼女を、死んだ彼はネットを通じて交信し、自分の得意な油絵を描かせる。彼女の親友、親、彼の恩師など、温かい人物達にも支えられ、彼女がようやく立ち直れそうになった時、最期のお別れに彼が姿を現す……というお話だ。

伝えたい言葉は、躊躇っているうちに伝えられなくなる。

それを痛感させられながら、涼子は最後のページまで一気に読まずにはいられなかった。ようやく瞼が重くなって寝入ってからの三時間、涼子は熟睡したらしい。毎日のように見る夢すら見なかった。

速達３

　寝坊した涼子が寝室から出ていくと、七海は既に着替えていて、自分で焼いた食パンを居間で食べていた。寝室と居間は壁一枚で隔たれた隣同士の部屋だ。

「ごめんねぇ……」

　居間の入り口に立ち、涼子は情けない声を出した。

　本来やるべきことはしっかりやらないと気が済まない性格だ。特に母親としての自覚を欠く行為には必要以上に自分を叩く癖がある。故に、朝からやらかした失敗に酷く落ち込んだ。

「いいよ。それより今日、お母さん仕事休みだよね？　私が学校から帰ってくるまで買い物行くの待っててくれる？　買いたいものがあるから」

　最後の一欠けらの食パンをコーヒー牛乳で流し込みながら七海が言った。

「買いたいものって？」

　涼子に嫌な予感が過ぎる。

「算数のノートと消しゴムとシール」

　そう言うと七海は、歯と歯茎を剥き出しにしてニヤッと笑った。

　涼子は娘の不敵な笑みを斜に構えた姿勢で睨みつけながら考えた。ノートがなくなりそうなのは二、三日前に見て知っている。消しゴムも小さくなって使いづらそうにしていたので新しいのが欲しいのだろう。しかし、だ。

「シールって何よ」

　いい気になっている娘に対し、涼子は腕を組んで応戦する体制を取った。

「今日のご褒美。自分で起きてパン焼いたんだからね」

　七海は立ち上がると、涼しい顔で空になったパン皿とカップを流しに運んだ。完全に自分が優位であることを悟っている。

　ますます気分を害しながら、涼子もコーヒーを入れる為に娘の後に付いた。流しのすぐ横にある食器棚からインスタントの瓶を取り出す。蓋を開け、コーヒーの粉をスプーンで一杯。砂糖を入れるか迷う。

「いいでしょ？　どうしても欲しいのがあるんだ」

　七海はトイレに移動しながら交渉を続ける。

「この前、買ってあげたばかりじゃない」

　結局砂糖は入れずに、涼子はカップに電気ポットのお湯を注いだ。七海の発言にはちょっと渋ってみる。形勢不利だが安易に物を買い与えるのは持論に反している。

「そういうこと言っていいの？　今度、仕事の日でも起こさないよ？」

　七海はトイレのドアの隙間から顔を覗かせ、涼子の弱みを突いてきた。どちらが母親だかわからない。

「もう寝坊しないし」

　涼子は口先でぼそぼそと反論する。

「わかんないじゃん。一学期に一回は必ず寝坊するくせに」

　トイレから出てきた七海は涼子に強く指摘した。

　その通りだった。疲れが溜まってくる月末の定休日に、今回のような無茶をすると寝過ごしてしまう。前回は七海も起きなかった為、彼女を遅刻させてしまった。連絡なしに登校していないことを心配した担任からの電話で飛び起きたのだ。

「今回だけだからね」

　涼子は負けを認めた。決して、起こしてもらえないことを懸念したわけではない。心の中で断固、抵抗する。口に出しては言えないが。

「やったぁ」

　七海はそう叫ぶと再び居間に戻り、勉強机にかけてあるランドセルを大きく半回転させて背負った。

「忘れ物ない？　給食の白衣は持った？」

　涼子は母親としての威厳を保とうと語気を荒げて聞いた。が、七海は我関せずだ。ランドセルをカタカタ鳴らしながら玄関まで歩いてきて、ニタニタ笑いながら靴を履いた。

「いってきまーす！」

　七海は勢い勇んで出て行った。その背中は勝利の喜びに満ちている。

　涼子は玄関の扉を開けたまま娘がアパートの角を曲がるまで見送り、扉を閉めながら大きく息を吐いた。朝からテンションが下がる。

　シールの値段などたかが知れているが、それでも余計な出費には変わらない。いや、出費よりこの気の弛みが問題だ。気を引き締めなければ……。そんなことを考えながら、涼子は鬱々としたものを解消する為に家中のカバーを洗う事にした。

　ツイていないと感じた日、涼子は部屋中を磨く。今日のように寝坊はするわ、娘には言われっぱなしになるわで自分のペースが乱れまくりの時、掃除せずにはいられなくなる。部屋の乱れや汚

れは心の乱れや汚れに通じると信じているからだ。

　調理台に置いたままだったコーヒーを一気に飲み干すと、涼子は布団やクッション、便座カバーに至るまで、カバーというカバーすべてを引き剥がした。家中とはいっても、２Ｋのアパートで七海と二人暮しでのことなので、量はたかが知れている。

　夫とは七海が二歳の時に別れた。

　夫は金遣いが荒く、毎晩飲み歩いたり、パチンコや競馬に異常なほどの執着を見せていた。

　結婚前、週に一回会い、良いところだけを見て過ごしていただけの頃には気付かなかった事実だ。涼子は同棲の必然性を切に感じたのだが、時は既に遅し、現実に失望しながらも七海を片親にしたくない一心で家庭を守っていた。

通帳を自分で管理している夫が給料をいくらもらっているのか、貯蓄はいくらあるのか、涼子は知らされることがなかった。ただ、最低限の生活費は渡されるので小遣いの範疇で遊んでいるのだと思っていた。

でも、どうしても臨時の出費が立て込む事もある。夫の親戚の冠婚葬祭や家電の修理費など、大きな出費は突然やってくる。そんな時、どんなに正当な理由を訴えてお金を出してもらおうとしても夫には通じない。家計管理も出来ないのかと、夫は涼子に向かって怒鳴り散らした。

二度三度そのようなことが繰り返された為、涼子は幼い七海を保育所に預けて働きに出た。自分の稼ぎを貯金することでいざという時に備え、夫に頼るのを止めた。夫に隠し事をされていると受け止められなくもなかったが、事を荒立たせることによって七海の精神状態が不安定になるのを一番に恐れた。

ある日、涼子の不安は的中した。夫はサラ金から多額の借金をしていたのだ。結婚前からのものが積もり積もっていて、督促状が何通も来た事でそれが判明した。脅迫めいた電話も掛かってきた。

それを知った当初、涼子はかなりのショックを受けた。同時に、ギャンブルに依存しなければならないほど、ストレスが溜まっていたのかと夫の気持ちを察した。

夫は孤独だった。不器用故、人に心を開く事が出来ず、上っ面だけ取り繕う人間関係に疲れ切っていた。涼子はそれを薄々感づいていたものの、子どもを守ることに精一杯で、唯一の理解者であるはずの自分も夫から距離を置こうしていた。

涼子は反省した。本音で夫と向かい合おうと決意し、子どもがいるのだから父親としての自覚だけは持ってと懇願した。すると、元々子ども好きな夫は反省したのか、早く帰宅する日が増え、七海の相手をするようになった。

だから涼子は夫を責めなかった。生涯を共に過ごすと誓った伴侶のしたことなら、二人で働いて返していけばなんとかなると覚悟を決めたのだ。

だが、ある女性から家に電話が掛かってきたことで事態は一変した。

一 年前まで夫と付き合っていたというその女性は、夫に数百万のお金を貸していた。事情を詳しく聞くと、返してもらないまま行方がわからなくなったので興信所 で調べてもらい居所を突き止めたのだという。夫が既婚者だという事もその時にわかったらしい。そればかりか夫の子ども

を身ごもり、夫が帰ってくる事を信じ て産んだので認知して欲しいと言ったのだ。

受話器から聞こえてくる信じ難い話に、涼子の頭から血の気が引いた。

翌日、事実を確認するために涼子は女性に会いに行った。

彼女は、夫と二人で肩を寄せ合っている写真を涼子に見せた。写真の中の夫が着ているシャツは、ちょうどその頃に涼子が夫の誕生日に贈ったものだった。写真を涼子に見せながら、その女性は懐かしさからなのか、薄笑いさえ浮かべている。

涼子は女性に対し、怒りを通り越して憐さを感じた。夫も彼女も異常だと思った。自分は夫と別れるので二人でよく話し合うようにと告げ、その日のうちに娘を連れて実家に戻った。この二人とはこれ以上関わりたくないと思った。

　あれから六年。

　今のアパートを借り、受けた傷を少しずつ癒しながら、涼子は七海と二人で親友のような親子関係を築き、慌しいながらも充実した日々を送っていた。夫の借金と縁が切れたせいで、苦しいながらも気持ちは晴れ晴れとしていた。

　そんな中、頼ろうと思えば頼れる相手、つまり恋人である瀬川道之と出逢った。

　三年前、職場の飲み会でのことだった。涼子は店長の友人として顔を出した道之と意気投合した。ずっと前から知っていたような、懐かしいような、そんな空気が二人の間にあった。そして数日後、道之から涼子に連絡が来て、二人で食事をしたことから自然と交際へと発展していった。

　明るくて物知りな道之に、涼子は心から笑う事を思い出させてもらった。

　だが、男性に対する不信感を拭い切れない涼子は、道之にも必要以上に甘えようとはしなかった。強くありたい自分に近づくためなのだが、裏切られることを前提とした自分への防御でもあった。

　離婚してからの数年間、すっきりした気持ちで前を向いているつもりが、女一人で子どもを育てていくことへの不安が時々頭をもたげ、市販の風邪薬を安定剤代わりに飲み、ありとあらゆるサプリメントを試し、自分に鞭打たないと体を動かせなくなることがよくあった。

　道之と出逢ってからだいぶ軽減されたのだが、頑なな警戒心はそう簡単にはなくならない。本当の自分を見せられない涼子は道之といても一人ぼっちだった。

　それでも時々、昨夜のような精神状態に陥る。本来甘えたがりの自分がひょっこり顔を出すのだ。今すぐに会いたい。寂しい。そう言えたならどんなにいいだろうと思った。叶わなくても、口に出せるだけでどんなに楽になれるだろうと思っていた。

　涼子は洗濯機を回してから、窓や床、棚の上の埃を拭い、トイレと玄関は特に念入りに雑巾掛けをした。良い運気を呼び込むにはトイレと玄関を綺麗に保つことが重要と、何かの本で読んだからだ。

　占いなど信じない涼子だったが、風水だけは気になったことだけ取り入れる。観葉植物も悪い運気を跳ね返すらしいので置きたいところだが、何せ予算がない。

自分で納得する程度に掃除をすると、涼子は居間に座ってテーブルに置いてあった新聞を広げた。これも涼子が寝ている間に七海がドアポストから出してきたものだ。

新聞を取る経済的余裕などないのだが、この一ヶ月だけ契約していた。七海が何かと学校で新聞を使うからだ。これまで新聞が必要となると七海の友達の家からもらっていた。

だが、ある時、七海はそのことでからかわれた。七海は泣きながら帰宅し、「悪いことしてないのに悔しい」と何度も叫んだ。

低学年くらいの子ども達は、家の特殊な事情を平気で笑いの種にする。その度に七海はグチグチ言いながらも、「からかう方が悪い」と気丈に振舞っていた。それなのに泣いたというのは、新聞のことに限らず、積もり積もったものがあったに違いない。

涼子はその姿を見ながら、お金に固執するあまり、子どもの心を傷つける原因を自分が作ってはならないと省みた。

一ヶ月だけ配達される新聞を、涼子はテレビ欄、社会面、地域面とページを遡って読んでいく。気になった見出しの記事のみを拾い読みし、社会面まで来ると無意識に目を向ける欄がある。その面の下部にある広告欄だ。そこには、各出版社の新刊案内が出ている。

ここに自分の名前を並ばせたかったな……。

涼子には子どもの頃から追い続けていた夢があった。今でも時折その夢が心を過ぎる。
だが、生活に追われ、自分と七海の健康を維持しながら食べていくだけで精一杯になったことで、夢を追いかけている時間と体力がないと諦めていた。

洗濯終了の電子音が鳴った。

涼子は洗濯物をカゴに入れ、サッシの前に運んだ。ベランダに通じるサッシだ。

カーテンレールに掛けてある二つのピンチハンガーに、小さめのカバーを干していく。風通しを良くするために隙間を開けて干してからベランダにある物干し竿に引っ掛ける。

布団カバーを直接竿に掛けたら、それまで部屋を明るくしていた陽の光が遮られた。暗くなった部屋を見て、久しぶりに顔を出した太陽なのにと口を尖らせながら、涼子は竿の端ぎりぎりまでカバーをずらした。

涼子のアパートは南西向きなので、ただでさえ午後の数時間しか陽が入らない。普段、昼間は誰もいないので対した問題ではないのだが、休日くらい太陽の恩恵を受けられるだけ受けたいと思った。

部屋に戻り、サッシを閉めた。申し訳ない程度に入るようになった陽の光を涼子は体の中心、顔の幅のみで受けながら、両手を上げて思い切り伸びをした。肩の筋肉が緊張し切ったところで両腕をすとんと下げる。滞っていた肩の血がじわっと流れる。

その心地良さに首を回しながら浸っていると、インターフォンが鳴った。

セールスだと面倒なので涼子は足音を立てないようにそっと玄関に近づいた。

ドアを開けたら最後、断るのに多大な労力を要する。やっとのことで断ったとしても、セールスマンによっては露骨に嫌な顔を見せる者がいる。断られてなんぼの商売なのに営業のノウハウも知らないのかと憤慨する涼子だが、声に出せる訳でもなく、やり場のない怒りを持て余す。

涼子が覗き窓に片目を押し当てると、何かの制服を着た男性が立っていた。郵便局員に見えなくもないが、ここからでは確認できない。

以前、宅配便のユニフォームだと思い込んで玄関を開けたところ、生協の勧誘だったことがあった。開けたが最後、カタログを広げて商品のアピールに入り、試供品のドレッシングをちらつかせ、営業の内部事情など涼子の興味のある話を始めた。

裏 話の好きな涼子は、つい身を乗り出して話を聞いてしまい、契約せざるを得ない状況に陥った。お試し期間が終わったらすぐに解約していいということだったの で損はなかったのだが、

[illegible]余計な手続きに時間を取られたことには変わらない。せっかくの休日にそんな無駄な時間を過ごしたくはない。

「はーい、どなたですか？」

　涼子はドアを閉めたまま、外の様子を伺った。

「速達です」

　制服の男は張りのある声を出した。

「速達？」

　涼子は訝しく思った。速達など、銀行のカードを作って以来受け取った事がない。

「誰からですか？」

　涼子は更に用心した。

「差出人不明です」

　制服の男は事実をありのままに、特に問題がないというように答えた。

「は？」

　涼子は意味がわからず聞き返した。

「印鑑いただきたいんですけど」

　制服の男は涼子の疑問には答えず、仕事を遂行しようとする。

「誰からかわからないんですか？」

　涼子も聞き直す。

「そうですけど、受け取り拒否なさいます？　持ち帰りますよ？」

涼子の再三に渡るドア越しの質問に、制服の男も苛立ち始めた。

速達８

「あ、いや、今開けます」

　本当に速達なら、差出人不明とはいえ気になる。そもそも差出人不明の速達を郵便局は扱うのだろうか。涼子は疑問に思いながら渋々ドアを開けると、制服の男は眉間にかなり深い皺を寄せながら郵便物を差し出した。

「ここに印鑑、お願いします」

　完全に機嫌を損ねている。

「はい」

　怒りを露にしている人間と向き合うのは気持ちのいいものではない。部屋中を綺麗にして運気を変えたつもりなのに、まだ不穏な空気に身を晒されている。涼子も制服の男と同じように眉間に皺を寄せる。

　やっぱり玄関に観葉植物を置いて邪悪なものを寄せ付けないようにしないとダメかと真剣に悩みながら、涼子は靴箱の上のキーボックスの中からシャチハタを出した。指を差されたところに押印すると、制服の男は「ありがとうございます」と言い放ち、足早に去っていった。

「ごくろうさまです……」

　とっくにいなくなってしまった制服の男の残像に向かって呟くと、涼子は意識を速達に向けた。

　白というより半透明に近いその封筒は、太陽の光を反射させてキラキラと光っている。ラメが塗料に混ざっていると言う感じではない。

　左右に傾けるとその都度光沢の模様が替わる。紙そのものが特殊な材料で作られているのだろうか。涼子はそう思いながら封筒を指で擦った。つるつるしているというか、すべすべしているというか、生き物の肌に触れているような手触りだ。

　不思議な感覚に浸りながら改めて裏に返すと、制服の男の言う通り、差出人の名前がなかった。

　涼子は居間に戻り、封筒の上部を指で摘んで乱雑に切ろうとした。

「あれ？　切れない」

思わず声が出る。いくら力を入れても紙が折れ曲がるだけで切れ目が入らない。逆から切ろうとしても、摘まむ位置を数ミリ単位でずらしても同じことだった。

仕方がないと思いハサミを出してきたが、まるで金属を切ろうとしているかのように全く歯が立たない。

「なんで……？」

完全にお手上げ状態だった。ふと目に付いたアロマキャンドルに火をつけてあぶってみようかと思ったが、灰になったら元も子もないのでやめた。

涼子はひとまず諦めて封筒を炬燵に置き、もう一杯コーヒーを飲もうと台所に立った。

レンジ台の引き出しを開け、そこからドリップバッグを一つ取り出す。書店の店長にもらったコロンビアだ。十個ある。コーヒーの直売所で大量に買ったらしく、「安く手に入れたから」と言って分けてくれた。

先程は七海の一件で気持ちに余裕がなくインスタントにしたが、普通に目覚めた朝はドリップバッグでコーヒーを入れる。店長のおかげでこの数日間だけ贅沢な気分を味わっている。

ドリップバッグの袋の切り口を摘まみ、涼子は一瞬躊躇った。

これも切れないかも……。

涼子は指先にちょっとずつ力を加え、切り口を捻る。当たり前なのだが袋は呆気なく切れた。同時にコーヒーの香りがふんわりと漂う。拍子抜けしながらも涼子は鼻から息を吸い込み、香りを堪能してからバッグをカップにセットした。

湯を注いで蒸らす間、トーストも食べようと冷凍庫から食パンを取り出した。

涼子は昔、食パンを室温で保存していて、丸々一斤カビさせたことがあった。梅雨の時期だったこともあったが、それほど長く放置していた訳でもない。あまりにもショックだったので、それ以来食パンを買ってくるとすぐに冷凍庫に入れるようになった。

凍ったままの食パンにピザソースとハムとチーズを載せる。普段はマーガリンしか塗らない涼子だったが、休日の贅沢なコーヒーには贅沢なトッピングを……と自己満足のこだわりを見せる。

オーブンに入れ、タイマーを五分にセット。焼き上がるのを待つ間、蒸らし終えたドリップバッグに湯を足し、シンクに寄りかかりながらコーヒーを啜った。やはり、本格コーヒーは美味しい。コーヒーの味などわからない涼子だが、インスタントではないというだけで美味しく感じる。

カップに口をつけたまま、涼子は上目遣いで居間を見た。炬燵の上で開かずの封筒が相も変わらずキラキラと輝いている。自身の存在を強くアピールしているかのようだ。だが、アピールされたところで封が切れない。

どうしたらいいのよ……。

心の中で呼びかけてみたが封筒が反応するはずもない。

オーブンがチンと鳴った。パンの焼けた匂いが漂う。

オーブンの扉を開ける前に匂う時は焼き過ぎの傾向がある。涼子はそれを懸念しながらカップを一旦調理台に置き、オーブンの扉を開けた。チーズがとろりと溶けた熱々のトーストが鎮座している。思った通り、パンの耳がこげ茶をやや通り越した色になっていた。五分は二枚焼く場合の時間だった。

それを今更思い出しながら、涼子はピザトーストを皿に載せ、コーヒーと一緒に居間に運んだ。

腰を下ろしてピザトーストに噛り付く。焦げた部分がやはり苦い。そこ以外はマーガリンのみの時とは違う、思惑通りの贅沢な味がする。

苦味は今朝の自分、旨味はこれからの自分と無理やりこじつけ、涼子は自分の中に取り込み消化する。これでチャラ。

何か音が欲しかったのでテレビのスイッチをつける。画面に映し出されたのは、涼子が数年前に夢中になって見ていたドラマの再放送だった。

懐かしい……。

涼子はあっという間にドラマの中に入り込んでいった。

仕事に人間関係にと壁にぶつかりながらも懸命に這い上がっていく、涼子と同世代の女性が主人公。明朗快活、男勝りな彼女の影響で周りの人間の内面が少しずつ変わっていくのが見どころのドラマだ。

特に男性達が彼女に触発されて行動的になっていく様は涼子を爽快な気分にさせた。

涼子はいつもその手のドラマを選んで観る。嫉妬や憎しみ、略奪などドロドロした恋愛物は、例え前評判のいいものでも決して見ることはない。嫌な記憶が蘇ってくるからだ。

逆に、夫婦円満、家族との絆を描いたドラマも見る事が出来なかった。心温まるとどんなに評判のいいものでも、見ているうちに体が強張り、卑屈な自分が顔を出す。だから、心の中が靄で覆い尽くされる前にチャンネルを変える。

ドラマが終わった。ピザトーストをいつ食べたのかわからないくらい物語に集中していた。

涼子は心地良いため息を吐きながらテレビを消し、目の前に放置したままの封筒を改めて見遣る。気のせいか、先程よりも輝きが増している。

速達１０

　涼子は封筒を手に取り、サッシから入る陽の光にかざしてみた。折り畳んであるのかどうかはわからないが、封筒よりひと回り小さな何かが入っている。

　何だろう、これ……。

　透かしたまま、裏返したり表にしたりしてみる。

　何か書いてあるのなら見てみたい……。

　涼子が見つめれば見つめるほど、封筒は見えない力で彼女を魅了する。

　涼子は小さく三回、吐息にも似た呼吸をした。直後、半透明の封筒が更に薄く透き通ってきた。

　涼子は自分の目がおかしくなったのかと思った。封筒から目を離さずに何度か瞬きをしてみる。コマ送りに見る封筒は徐々に感触をなくしながら、涼子の手の中で静かに消えて中身だけになった。

「な、なに？　これ！」

　思わず叫びながら、涼子は手の中に残ったものを放り投げた。すると、ダイヤモンドダストのようなキラキラとした粉を振り撒きながら、スローモーションで空を舞った。

　しばらく空中を漂った後、空気と戯れることに飽きたかのようにストンと足元に落ちた。封筒と同様、光を反射しながら艶めきを放っている。

　キレイ……。

　涼子は床に落ちたそれから目が離せなくなり、完全に心が奪われた。

　読まなくちゃ。

　催眠術にでもかけられたようだった。涼子は操られるように腕を伸ばし、それを拾い上げた。二つ折りにされていたそれを広げると、タイプライターで印字されたような、所々かすれた文字で何やら書いてあった。

『12・24　13:08pm　kimi　no　tokoro　ni　iku』

　英文字と数字で横に一行。涼子は一字一字、字を覚えたての幼い子どものように拾い読みした。

　キミ　ノ　トコロ　ニ　イク。

　短い文面、特にローマ字の部分を涼子は何度も読み返した。そして、その意味をぼんやりする頭で考えた。

　キミ……は、私？
　私のところに……来る？
　……誰が……？

　涼子は警戒した……はずが、胸をほろ甘く痛ませていた。

　……この手紙の差出人は、いつもそばにいて自分を包み込む大きな存在。恋人のような、少し意識しだしただけの異性の友人のような……そんな人物。

　そんなことを感覚で捉えていた。道之という恋人がいながら、正体不明の相手に心を浮き立たせている。普段の涼子では考えられないことだった。

　涼子がふわふわとした心地良さに浸っていると、再び玄関のチャイムがなった。その瞬間、催眠が解けたように意識がクリアになった。

「はーい」

　この速達の一件で、涼子はセールスを用心するのをすっかり忘れていた。覗き窓で外を確認する事すら怠り、即座にドアを開けた。

　すると、セールスより質の悪そうな人相で、グレーの背広を着た男が二人立っていた。

　一人は初老で白髪混じり、背が涼子くらいなのに横幅は二倍くらいありそうな男。もう一人は若くて中肉中背、オールバックにした髪がやけに浮いている童顔の男だった。

「どちらさまですか？」

　涼子は怪訝な顔をもろに男達に向けた。

「警察です」

　手前に立っていた初老の男性が手帳を見せた。縦に二つ折りになった手帳の下半分に、金色をした警視庁のマークが大きく貼り付いている。涼子が前のめりに覗き込んだ途端、男性は手帳をぱたりと閉じた。

「警察……？」

　手帳から刑事と名乗る男性に視線を移し、涼子は目を大きく見開いた。警察手帳などドラマでしか見た事がない。まして本物の刑事と面と向かうのも初めてだ。涼子は瞬時に身構え、想像した。

　刑事は逮捕状を持っていて、罪状を読み上げた後、涼子に手錠をかけて連行を強要する……。

　そんな情景が涼子の頭の中を駆け巡った。もちろん罪を犯した記憶など無い。

「少し、お話を伺いたいのですが」

　初老の刑事は犯人を目の前にした時のような鋭い眼光を涼子に向けた。ドラマに洗脳されている涼子にはそう思えてならない。

「何かあったんですか？」

　涼子は語気を強め、毅然とした態度で初老の刑事に尋ねた。本当はびくびくしているのだが、それを知られない為だ。

「樋口、涼子さんですね」

　刑事は苗字で一度区切ってから名前を確認した。しかも、ですか？　ではなく、ですねと断定している。

「そう……ですけど」

涼子は、初対面の刑事がどうして顔を見ただけで本人だと決めつけたのか不思議に思い、何かあったのかという涼子の質問には答えないことに腹を立てた。

「最近、おかしな通知をお受け取りにならなかったですか？」

驚いたり立腹したりして表情をコロコロ変える涼子を刑事は凝視しながら質問した。

「通知ですか？」

涼子は、いついつの何時頃にどこにいたかとか、誰々と行動を共にしなかったかとか、本人確認の後はアリバイを質問されると思っていた。

「ええ、通知です」

刑事が繰り返す。

「通知なんて受け取ってないです」

容疑者に対して真っ先にする質問ではないだろう。そう思いながら、涼子はぼそぼそと口先で答えた。

「何も届いてないですか？」

届いていないはずはないとでも言いたげに、刑事は語尾を強めた。

「不思議な手紙ならさっき届きましたけど」

刑事のしつこさにうんざりしながら、涼子は手紙の存在を告げた。全く関係ないだろうと踏んだ上でだ。

だが、刑事は呆れた顔をした。なぜ呆れられたのか涼子にはわからない。通知は事務的な書類、手紙は個人的なメッセージのやり取りというように、涼子にとってこの二つは別物だからだ。

「それです。見せてもらえます？」

　両者が別物だとは思っていない刑事は吐き捨てるように言った。

「え？　これですか？」

　涼子は手に持ったままの紙を刑事に差し出した。

　刑事は仰々しく白い手袋をはめてから手紙を受け取った。内容に目を通すと、後ろに立っていた若手の刑事に黙って手渡した。そちらの刑事も手袋をしている。指紋をつけないようにということか。

　私の指紋はしっかり付いているんですけど……。

　涼子がはすに構えて二人の刑事を睨むと、初老の刑事が唐突に彼女の二の腕を掴んだ。

「ちょっと来てもらえますか？」

　初老の刑事は涼子の腕を引っ張り、強引に外へ連れ出そうとした。その動きに便乗し、若手の刑事は涼子が逃げないように一歩前に出て隙間を塞いだ。結果、初老の刑事の行く手まで塞いでいることには気付かない。「どけ！」と初老の刑事に一喝され、慌てて脇に寄った。

「ちょっと待ってください。何なんですか？」

　涼子が想像していた展開と若干の違いがあるものの、刑事はやはり容疑者を捕まえに来たのだ。涼子は握られた腕を振り解こうと、ありったけの力で抵抗した。

「行った先で詳しい事をお話します」

　腕力のある刑事は涼しい顔で涼子の抵抗を食い止める。

「私、何も悪い事してませんよ？」

　お決まりのセリフだが、それは確かだ。

「それについてもお聞きしたい事がありますので」

　刑事の太い指が涼子の腕に食い込む。

「腕を離してもらえませんか？　私、逃げませんから」

　血流が遮断され、指先が痺れ始めた。

「そう言って逃げる人、多いんですよ」

　刑事は鼻で笑って涼子の言い分を退けた。完全に犯人扱いだ。

「逃げません！　逃げたところですぐに捕まえられるじゃないですか、刑事さんの方が足が速いだろうし。それとも走るのがすっごく遅いんですか？　わかった、私に負けるのが恥ずかしいんでしょ。だから力づくなんだ」

　笑われたら笑い返す。勝気な涼子は嫌味を交えて言い放った。

「鼻っ柱の……」

　強いお嬢さんですな。初老の刑事がおそらくそう言って軽く流そうとした時、後ろから素っ頓狂な声がした。

「自分、陸上部の選手でした！」

　若手の刑事だ。涼子の嫌味を嫌味と捉えず、まともに答えている。涼子と初老の刑事はほぼ同時に若手の刑事の方を振り返った。若手の刑事は二人に注目されたことで認められたと勘違いしたのか、ニコニコと笑っている。

　相棒のピントのずれ方に脱力した初老の刑事が涼子の腕を掴む手を緩めた。涼子は刑事の手から逃れ、軽くなった腕を肩からぐるぐると回す。

　タイミング良くボケてくれた若手の刑事に、「刑事に速い足は必須ですよね」と、満面の作り笑顔を送った。若手の刑事は頭をぽりぽり掻きながら、ますますご機嫌になった。

　その傍らで大きくため息をつく初老の刑事の顔が可笑しくて、涼子は吹き出しそうになった。

「頼もしい相棒をお持ちで心強いですね」

　涼子は初老の刑事に鼻を突きつけながら囁いた。初老の刑事は苦々しい表情を浮かべ、若手の刑事の頭を平手で一発叩いた。若手の刑事はなぜ叩かれたのかわからず、びくっと肩を竦ませ戸惑っている。

「とにかく、ご同行願います」

　わざとらしい咳払いをしてから、初老の刑事が仕切り直した。

「これって任意ですよね？」

　涼子も抵抗し直す。真顔に戻った涼子に、初老の刑事は「そうです」と太く張った声で肯定した。

「何かそうしなくちゃいけない理由があるんですか？　根拠は何ですか？」

　涼子が噛み付く。やはり、納得いかないうちは動けない。

「お教えしたいのですが今は出来ません」

　初老の刑事も頑として詳細を明かさない。

「じゃあ、お断りします。任意だから可能ですよね？」

　訳もわからず付いて行く馬鹿がどこにいる。涼子は心の中で悪態を付いた。

「そういうわけにはいかないんですよ。国が……あ、いや」

　初老の刑事が何かを言いかけ、手で口を覆った。

「国？　国がどうしたんですか？」

　涼子が語気を荒げてすかさず突付く。

「いや、なんでも……」

「なんでもないとは言わせませんよ？」

「と、とにかく御同行を」

　初老の刑事に先程までのキレがなくなった。酷く動揺している。

　すると、後ろで大人しくしていた若手の刑事が何を思ったか、「言っちゃっていいんじゃないですか？　世界的に影響を及ぼす恐れがあるって」と口走った。

「はぁ？」

　涼子は聞き逃さなかった。

「どういうことですか？」

　再度詰め寄ったが、初老の刑事は「あとで説明しますので」の一点張りだ。

　涼子は混乱した。刑事もそう言ったきり黙ってしまった。若手の刑事は腕時計を何度も見て、やたらと時間を気にしている。

　いったい何が起こっているんだろう……。

　沈 黙は思考する時間を余儀なく与える。一方的に指図されると意地でも抵抗したくなる涼子だが、一瞬でも自分の意志に委ねられれば話は違う。自分が行動しない ことで世界に影響を及ぼすのは心外だという気持ちが芽生えてきた。自分が関係しているか否かに関わらず、状況を確かめたいという気持ちもある。奇妙な手紙 にしても刑事と同行することで何かがわかるかもしれない。わからず仕舞いでも支障はないが、やはり引っ掛かる。

「行けば教えていただけるんですよね？　その、世界的に影響を及ぼす何かについて」

　涼子は若手の刑事の言葉をわざと強調した。初老の刑事は開き直りながら、「ええ」とだけ発した。

「子どもが帰って来るまで待ってもらえませんか？　今、学校なんで」

　どちらにせよ、子どもを放っておくわけにはいかない。

「おいくつですか？」

　初老の刑事が訊いた。

「八歳です」

　だから何？　と涼子は心の中で反論する。

「鍵は持っていないんですか？」

　刑事が更に訊く。

「持ってますけど」

　刑事の言いたい事が見えてきた涼子は吐き捨てるように答えた。

「小学生なら留守番くらい出来るでしょう。さあ、早く……」

　思った通りだ。結婚していそうもない若手の刑事に言われるならまだしも、自分よりも人生経験を積んできたはずの刑事に子どもを持つ親の立場を理解してもらえないなんて……。涼子はみぞおちの辺りから怒りがこみ上げてきた。

「ちょっとだけ待ってって言ってるんです。弱者を守る立場の癖に、子どもの気持ちも考えられないんですか？　今日は仕事が休みだから家にいるって言ってあるのに、予告なしにいなくなったら子どもだって不安になります。せめて置き手紙くらい書かせてください。私はどこへいくんですか？　何時頃、帰って来られるんですか？」

　涼子は憤慨しながら言葉を吐いた。母親としての涼子に怖いものはない。

　初老の刑事は数秒間黙ったまま、表情を変えずにじっと涼子の目を見据えた。

「申し訳なかった。手紙書いてください。ご同行していただく場所はすぐ近くの市営球場です。特別な事がない限り、時間はそう掛からないと思います」

　刑事は横柄な態度を改めた。

　素直に謝られると思っていなかった涼子は少しだけ拍子抜けした。だが、これも刑事の心理作戦かもしれないと、涼子は勘ぐる事だけは忘れなかった。

メッセージ１

　涼子のアパートから、歩いておよそ八分の所に市営球場がある。正式名称は『稲木中央公園』。

　季節を彩る樹木が植えられ、球場をぐるりと囲んだジョギングコースや丸太で作ったアスレチックが併設されている。だが、整備されている割に昼間は閑散としていて、夕方に犬を連れた主婦達が集うくらいだ。

　でも、今日は違う。どこからやってきたのかと思うくらいの人がグラウンドのフェンス周辺を埋め尽くしている。上空にはヘリコプターが何機も飛び交い、球場全体が異様な空気に包まれている。

　涼子は公園の入り口で刑事の半歩後ろから中を見渡し、その物々しさに圧倒された。

「ちょっとすみません」

　初老の刑事は騒ぎを物ともせず、淡々と人をかき分けながら涼子をグラウンド内に連れて行った。若手の刑事も「はいはい、すみませーん」と両手を頭上でひらひらさせながら道を作ろうとしている。が、涼子の後ろから付いてきているので、あまり意味を成さない。

　グラウンドには、大勢の制服警官達が中央付近を向いて円陣を組んでいた。軽く百人は超えている。初老の刑事は警官達の間も通り抜け、涼子を問題の場所に案内した。

「これなんですけどね」

　初老の刑事がホームベースに立ち、斜め前方の地面を指差した。指示されるまでもなく、それは涼子の目にも映っている。

『12・24　09:17am
　Higuchi
　Ryoko
　ni
　renrakuzumi』

ヒグチリョウコニレンラクズミ。

　くっきりとしたゴシック体の文字がグラウンドのダイヤモンドいっぱいに、四行に分けて彫り込

まれていた。

メッセージ２

「何だと思います？　今朝、発見されたんですよ。昨夜にはなかったらしいんですけど」

　初老の刑事が涼子に質問しながら顔をじっと見た。表情の変化を注視している。

「さぁ、私にわかる訳ないじゃないですか」

　涼子は大袈裟に首を傾げてみせた。

「何か知ってるでしょう？　あなたの名前が書いてあるんですよ」

　刑事は決めてかかる。

「知らないものは知らないです。第一、私とは限らないじゃないですか。同姓同名の別人に宛ててるのかもしれないし」

　涼子も譲らない。

「手紙があなたのところに届いています。文体も同じのようですが」

　初老の刑事の言葉に反応し、若手の刑事が涼子に手紙を突きつける。

「たまたま文体が似てるだけで、出所が同じっていう確かな根拠にはならないと思いますけど？」

　若手の刑事の事は無視して反論。

「隠すといいことないですよ。これだけの人数巻き込んでるんだから」

　刑事は嫌味を交えながら、グラウンドにいる関係者を指差した。

「勝手に集まっといて人のせいにしないでくださいよ」

　涼子は怒りを露にしながら吐き捨てた。

　初老の刑事は「そうですか」と含みを持たせ、ゆっくりと腕を組んだ。大きくため息をついた後、涼子への問い詰めをしなくなった代わりに、口に手を当てて唸り始めた。

　耳障りな唸り声に涼子は顔をしかめる。

「もう帰っていいですか？　話は終わりですよね？」

　涼子は一刻も早く、気分を害するだけのここから抜け出したかった。

「いや、もうちょっとお願いします」

　何を話すわけでもないのに刑事は引き止める。

「もうちょっとって……」

　涼子は無駄な時間を過ごすのが大嫌いだった。特別なことがなければすぐに帰れるという刑事の言葉に騙されたと思った。

メッセージ３

　面倒くささが頂点に達した涼子は、何かを伝えて捜査に協力している振りでもしないと解放されないだろうと思い、今朝のことを口にした。

「無理矢理こじつけて言えば、郵便屋さんが来た時間が九時ちょっと過ぎだったかもしれない。でも、配達はいつもその時間だし、関係ないと思いますけど？」

　涼子が投げやりに言うと、初老の刑事が目の色を変えた。

「本当ですか！」

　食いついてきた刑事の顔を見て涼子は、しまった、と思った。単なる偶然ですねという答えを想像していただけに、余計なことを言ったかもしれないと咄嗟に言い訳した。

「だからって、何も知らないですからね！」

　初老の刑事は慌てる涼子を無視し、ずっと現場にいた他の刑事に耳打ちに行った。時折ちらりと涼子を見遣っては、口元を手で隠し、こそこそと話している。

　不愉快さ極まりないと思いながら、涼子は若手の刑事を見る。涼子と目が合った若手の刑事は所在無くうろたえた後、フェンスを乗り越えようとしている野次馬のところに慌てて駆けていった。

　一人にされた涼子は、今度は何を疑われるのかと気が重くなった。が、何も言わなくても進展のない状況だったのだから仕方がない。どうにでもなれ、と諦めた。

　自分から一番近くに彫られた文字に視線を下ろす。文字一つ分の大きさが一メートル四方もある。初老の刑事の様子を伺うと、話し合いが深刻化したのか、涼子の方に振り向かなくなった。

　涼子は文字に触れてみたくなった。そばにいる警官達に悟られないように、涼子はミリ単位で文字に近寄る。一番近くにあるのは、renrakuzumiのiの文字だ。線の幅、深さ共に五十センチくらいで掘り込まれている。涼子は横目で警官達の動きを警戒してから、その場にゆっくりと腰を下ろした。

　文字に触れてみる。初めは軽く撫でる程度。二度目は少し指先に力を入れる。だが、全く崩れない。釜で焼かれた陶器のように固められているので、爪でかりかり引っかいても傷すら付か

ない。

　グラウンドの土じゃないみたい……。

　好奇心の膨れ上がった涼子は文字の中に足を踏み入れた。冷たいはずの地面から、温かなオーラのようなものが足を伝わる。実際に温かいのではなく、感覚として温かさを感じるのだ。

メッセージ４

　なに？　これ……。

　オーラが徐々に頭の方まで浸透してくる。体全体が軽く痺れ、涼子は手紙に触れた時のような催眠状態に陥った。ふわふわと雲の上にいるような、虹の上を歩いているような、地上にいるとは思えない夢見心地だ。

「樋口さん！　やたらに立ち入らないでください」

　いつの間にか戻ってきた初老の刑事が怒鳴り声を上げた。涼子に注意した後、周りの警官達にも雷を落としている。

　夢から引き戻された涼子は溝から出ながら「すみません」と、形だけ陳謝した。再び刑事の横に並んで立ち、文字を眺める。

「今、確かめてきたのですが、早朝にはこの文字がなかったという証言と、第一発見者の通報が九時半頃だったということで、樋口さんのところに速達が届けられたと同時に文字が現れたと考えられますな」

　初老の刑事が正面を向いたまま説明した。

「は？　なんだか単純ですね」

　涼子は拍子抜けした。自分が咄嗟に思いついた事が、検証の結果として伝えられるとは思わなかった。素人でも考えられる短絡的な予想を出すのにどれだけ時間を掛けるのかと、涼子は思わず失笑した。

「何がですかな？」

　初老の刑事は腑に落ちない顔で涼子を見た。

「何が……って、配達時刻と文字の出現がほぼ同時刻だったというだけで因果関係を結びつけることが、です」

　涼子は呆れながら、初老の刑事の説明を要約する。

メッセージ５

「いやぁ、重要な証言です。これだけ時間がぴたりと当てはまれば、人為的操作はまずあり得ないでしょう。世界的規模で研究するに値する事件を……」

　初老の刑事は自信たっぷりに弁舌をふるった。心なしか生き生きとしている。

「はぁ、そうなんですか」

　涼子は、話の途中で軽く受け流した。いい大人が滑稽に見える。

「それにしても厳重な警備体制ですね」

　涼子は話を逸らした。延々と先の見えない自慢話をされるのが鬱陶しかった。

「これまでのミステリーサークルとは全く異質なものなんですよ。なので、厳重にする必要があるのです」

　初老の刑事は地質調査をしている調査班を指差した。

「この短時間でそんなことがわかるんですか？」

　涼子が視線を移した先の調査班は、小さな放射能測定器のようなものを当てているだけにしか見えない。

「最先端の高性能機械を採用していますから。通常は宇宙空間を漂う地球以外の星や隕石の性質を調べるための機械なのです」

「ここ、地球ですけど」

「地球外生命体が関係していると踏んでいます。事実、地球上にはない物質反応が出ていますし」

「宇宙人ですか？」

「ええ。それとの接触ともなりかねないので厳重に警戒しているというわけです」

「歴史的な事件になりそうですね。大変だわ」

[illegible]」

　涼子は気持ちを込めずに共感した。話が大袈裟過ぎて、現実の事として捉えられない。

「『12・24』、おそらく今日の日付を指しているのだと思われますが、何か心当たりがありますか？」

　初老の刑事が再度、涼子に質問を投げ掛けた。

「今日ですか？　今日はクリスマス・イヴですよね。ついでに言ってしまえば私のバースディ・イヴでもあるんですけど」

　涼子がバースディ・イブという言葉を使ったのには訳がある。涼子は誕生日当日よりも前日の方が好きだった。

　十数年前、『明日の誕生日の約束　僕は君をさらいに行く』という詩を歌にした曲がテレビから流れてきた。それを聴いた幼い頃の涼子は、純粋に心を浮き立たせた。本当に誰かがさらいに来てくれるのではないかと、さらうの意味さえ考えずに夢見ていた。

　そのことを、誕生日前日となると思い出す。普段は現実に期待することほど空しいとさえ思っている涼子だが、明日は今日と違うかもしれないと、根拠のない希望を持てる唯一の日だった。現実逃避なのだが、潜在意識の表面化なのではないかと涼子は思っている。

メッセージ６

「誕生日の前日ですか？　フッ、あまり関係なさそうですね」

　刑事は一笑した。涼子は自分自身を否定されたような気がして憤然とした。

「何か心当たりがあるかっておっしゃるから言ったんじゃないですか。笑うってどういうことですか？」

　涼子は、何か思いついても二度と何も話すまいと思った。

「申し訳ない」

　初老の刑事は謝りながらも目元を緩ませている。涼子はこれまでの苛立ちも含め、目の前の半笑いしている男を殴りたい衝動に駆られた。

　その時、手紙を持っていた若手の刑事が血相を変えてやって来た。

「竹下刑事！　これ、見て下さい！　文字が……」

　初老の刑事は竹下という名前らしい。

「ん？　なんだこれは」

　竹下は首を傾げた。

「樋口さんのところに届いた手紙です」

「文字が違うじゃないか」

　会話する二人の刑事の間を割って、涼子は手紙を覗き込んだ。

『ryoko 's birthday eve』

　リョウコ　ズ　バースデイイヴ。

　最初に書いてあった文章はなく、先程の会話をリアルタイムで聞いていたかのような言葉に摩り

替わっている。

「でも、確かにあの手紙です。ずっと内ポケットにしまっておいたんですから」

　若手の刑事は左胸を必死にで叩く。

「大事な証拠をそんな落としやすいところに入れておくな、バカタレが」

　若手の刑事の弁解もむなしく、竹下は彼を一喝した。とはいえ、手紙の材質からして簡単に手に入るものではないことから、最初の手紙と同一であると認めた。

　手紙の変化を刑事と同じように驚いていた涼子だったが、すぐに笑いがこみ上げてきた。

「やっぱり、私の誕生日が関係してるみたいですね」

　竹下は返事をしなかった。冷静を装おうとしているが、動揺しているのは明らかだ。手紙を平らにしたり、裏返したりしながらひたすら眺めている。

メッセージ７

「あぶり出し……でしょうか？」

　手紙に注視している竹下に、若手の刑事が恐る恐る訊いた。

「火も使っとらんのにあぶりだしの訳はないだろう。思いつきで物を言うな。小田、まさかこの手紙にまた何かしたんじゃないだろうな」

　竹下が小田に手紙を突き返しながら言った。若手の刑事は小田というらしい。

「またって何ですか。自分は何もしてません！　今さっき、ポケットから出して手紙を見たらこうなっていたんです。それまで全く手に触れていません！」

　竹下は、小田の必死な様子を小馬鹿にした目つきで見遣った後、「いったい、何が起きてるんだ……」と、困惑した。

　涼子は二人の様子を冷ややかに見る。

「別に騒ぐ程のことじゃないんじゃないですか？」

　涼子の一言が、呆然としていた竹下の癇に障る。

「樋口さん、やっぱり何かご存知なんじゃないですか？」

　火の粉が涼子に降りかかった。

「知りませんって」

　涼子にとっても紛れもなく不可思議なことなのだ。でも、騒ぎ立てるほど特別なことではないと、何かが時々涼子の思考を操作する。

「竹下さん！　こっちも見てください！」

　突然、グラウンドのダイヤモンドを囲んでいた警官の一人が叫んだ。手紙に気を取られていた涼子達が一斉に振り返る。

「うわぁ、危険だ！　離れろ！」

ダイヤモンドを見るや否や、竹下も大声を上げた。彫られていた部分がみるみるうちに隆起し、元のグラウンドに戻った直後、今度は凸の形で浮き上がったのだ。

騒然としている中、竹下が携帯している無線機から、その文字についての情報が流れる。上空を飛ぶヘリコプターからの無線だ。

『すべて小文字で、アール　ワイ　オー　ケイ　オー　スペース開けて　ダブリュー　オー　スペース　ケイ　エイ　アイ　エイチ　オー　ユー　スペース　エス　イー　ワイ　オーです』

小田が聞き取った英文字を地面に書き留める。

ryoko wo kaihou seyo

「リョウコ　ヲ　カイホウ　セヨ。なんか、私を解放しないと大変なことになりそうですよ」

涼子は笑みを浮かべながら静かに告げた。自分は守られている。何の根拠もないまま確信した。

そんな涼子を小田が後ろから羽交い絞めにする。指示もされていないのにまた勝手な行動に出ている。もう怖いものなど何もなくなった涼子は、よろけた振りをして小田のつま先を踏んづけた。

メッセージ８

　この異常事態に緊急車両がぞくぞくと集まってくる。パトカーに消防車、救急車や装甲車まで公園の周りを取り囲んだ。制服の警官や私服の刑事も数を増し、防護服に身を固めた集団があっという間に球場を埋め尽くした。爆発の恐れあり、という事で爆弾処理班まで来ている。

　それを見ていた涼子は、自分の腕をがっちり掴んだままの小田に低い声で問い掛けた。

「ねえ小田さん、あなたは防弾チョッキなんか着ていないでしょうね。一般市民が普段着のまま危険にさらされてるっていうのに」

　すると、小田は生真面目な顔をしてバカ正直にこう答えた。

「いえ、第一機動隊から特科車両隊までの全隊編成をもって警備配置していますので、防弾チョッキの着用命令が出ています」

「あ、そう」

　涼子は小田に心底失望した。

　その時、雨雲が空を覆ったかのように暗くなった。

　周囲がざわめき始める。涼子の視野の上部にも、既に異質なものが映っている。

　涼子はゆっくり空を見上げた。そこには球場をすっぽり覆い被さる程の、真珠のような光沢を放つ楕円形の円盤が浮かんでいた。

「伏せろ！」

　竹下を始め、機動隊が一斉に姿勢を低くした。涼子一人が突っ立った状態で取り残された。

「ＵＦＯ？」

　円盤を見ても、涼子は相変わらず恐怖を感じない。

「樋口さん！　危ないから伏せてください！」

　竹下が機動隊の盾に隠れながら涼子に叫んだ。

「あれが落ちてきたら、ひとたまりもないんじゃないですか？」

　涼子は動じることなく竹下に言った。

　涼子が再び上空を見つめると、円盤は彼女に合図を送るかのように前後左右に移動した。音は全くしない。まるで映像のようだ。でも太陽の光を遮っているのだから、間違いなく物体はそこにある。

「綺麗……」

　涼子は円盤に魅入っていた。何かテレパシーのようなものを感じるのだが、解読するまでに至らない。

　メッセージが涼子に伝わらないことを諦めたのか、円盤は一度動きを止めた後、流れるように消えていった。

　辺りはしんと静まり返った。盾をしっかりと構えたまま誰も動かない。

　数秒、間を置き、静寂を打ち破るように小田が素っ頓狂な声を張り上げた。

「竹下さん！　字が消えてます！　ってかありません！　手紙が！　あ、グラウンドはあります！」

　小田は完全にパニックに陥っていた。

メッセージ９

　全員が一斉にグラウンドに注目すると、小田の言う通りダイヤモンドに書かれた文字は跡形もなく消えていた。元通りの土に戻っている。それと同時に、小田が手に持っていた手紙そのものが消滅したらしい。

「何もなかったってことですよね。もう帰っていいですか？」

　服のポケットを弄ったり、両手を何度も引っくり返して慌てふためいている小田に涼子は言った。今の小田に涼子を気にする余裕など毛頭ない。涼子はきびすを返し、警官の合間をぬって帰宅しようとした。

「ちょっと待ってください！　あなたの家の方に飛行物体が消えたんです。あなたの家で何かがあるかもしれない。家にお邪魔させてもらえませんか？」

　竹下が涼子の肩を掴み、しつこく攻め寄ってきた。

「あなたの家の方って、うちって断定しないでくださいよ。あっち方面には家がいっぱいあるんですから」

　涼子は振り返ったものの断固として頷かなかった。

「これは樋口さん個人の問題じゃないんです。地球規模の問題に発展する可能性のある事件なんです」

　竹下も引き下がらない。

「だからって、家に上がりこんで何をするつもりですか？　あれだけの物体が突っ込んでたら外からでもわかるじゃないですか？」

「でも、また手紙が送られてくるかもしれないし」

「かも、って話で人のプライバシー侵害しないでいただけます？　何かあったらご連絡しますので」

　涼子はいい加減うんざりしていた。自分がいなくなった後、警察の上に円盤が落ちてくればいいのにとさえ思った。

「必ずお願いしますよ。世界が注目すべきことかもしれなくて……」

「わかりました！　失礼します」

　涼子は延々と続きそうな竹下の世界論を途中で遮り、この場を後にした。

白い服の男１

　涼子のアパートはいつもと変わらずそこに建っていた。

　自宅玄関の前に立った涼子は、鍵穴に鍵を差し込むのを少し躊躇った。円盤が涼子の家に何かするのを懸念しているのではない。竹下が既成事実を作る為に何かやらかすかもしれないと思ったからだ。

　辺りを見渡してから涼子は鍵を差す。そのまま手首をひねると、鍵穴から小さな音が鳴った。鍵が開いた時のありきたりな音だ。ゆっくりドアノブを回す。これもクリア。衝撃を与えないようにドアを開ける。

　爆発するとしたら、この瞬間だ！

　涼子はそう考え、ドアを盾にして素早く身を隠した。

　何も起こらない。

　当たり前か……。

　涼子は自分の妄想に苦笑し、身構えるのを止めた。

　玄関に入って靴を脱いだ時、七海が帰ってきた。

「ただいま！　お母さんのこと呼んだのに無視しないでよ」

　涼子が玄関の前に立っていた時、外から何度も叫んでいたらしい。

「ホント？　ごめんごめん」

　涼子は一点集中すると周りの事が見えなくなる。「年なんじゃない？」という、どこで仕入れてきたかわからない七海の嫌味には聞こえない振りをする。

「ずいぶん早いね」

　壁の電波時計は十一時五十分を指していた。四時間で短縮授業だったにしても早過ぎる。

「お母さん知らないの？　さっき、すっごく大きなユーフォーが飛んできたんだよ。だから集団

[illegible]下校」

　七海が興奮気味に説明した。

「へぇ、学校からも見えたの」

　涼子は自分が現場にいたということはあえて伏せる。七海を心配させまいとしたのだが、正直に話すことで七海に詮索され、いろいろ説明するのも面倒だった。

「見えるよー、目の前じゃん」

　小学校は野球場から道路を挟んで反対側にある。

「そっか、そうだね」

　涼子は焦りながら愛想笑いをした。あれだけのものが空を覆ったのだから学校から見えないわけがない。

「パトカーがいっぱい来てたよ！」

　七海は無邪気に報告を続ける。

「ふーん、すごいね」

　涼子は心の中で、消防車に救急車、装甲車っていうのも来てたんだよと付け足す。それから、「先生、何か言ってた？」と、ちょっとだけ探りを入れてみた。

白い服の男２

「今日は野球場に行っちゃダメだって」

　七海はつまらなそうに答えた。

「どうして？」

「これからユーフォーの破片が落ちてないか調べるから立ち入り禁止なんだって」

　まだ警察は粘っているのか……。

　涼子は刑事が再び家に押しかけてこないか心配になった。

「どしたの？」

　涼子が憂鬱そうにしたので、今度ばかりは母親の心境の変化に気が付いたらしい。

「ん？　ううん、何でもないよ。給食は食べてきたの？」

　ハッとした涼子は話題を変えた。

「ううん、食べてない。緊急事態だからって」

　七海はそう言ってから、思い出したように空腹を訴えた。

「スパゲッティでも食べる？」

　聞くまでもない。七海の昼食は、余程の事がない限りスパゲッティと決まっている。

「うん、たらこ！」

　七海にとってスパゲッティと言ったらたらこだった。しかも、クリーミーでなければいけない。半年前にファミレスで食べたたらこスパゲッティが忘れられないらしく、以来拘っている。

　涼子はキッチンでパスタを茹でる鍋に火をかけた。七海は炬燵に入り、テレビのスイッチをつける。見たいテレビがなくてもつける。黒い画面は何かが出てきそうで怖いらしい。

「まだぁ？」

　七海が居間から叫んだ。

「今、火をつけたばかりだよー」

　涼子はキッチンから叫ぶ。

「あと何分？」

「あと十五分！」

　そんなには掛からないが、涼子はあえて長めに伝える。短く言うと後で文句を言われるからだ。

　お湯が沸き、パスタを茹でる。その間にたらこソースを作る。生クリームを使わず、牛乳とたらこと醤油で作るあっさりソースだ。

　ボールで混ぜ合わせておく。たらこによってしょっぱさが微妙に異なるので、その日によって醤油の量に気をつける。過去、醤油を入れ過ぎたことで七海にそっぽを向かれ、捨てるには忍びなく、涼子は大量の醤油スパゲティを食べるハメに陥った。

　パスタが茹で上がったので、バターを溶かしたフライパンで炒め、ソースをあえる。

「出来たよー」

　皿に盛り付けながら声を掛けたが返事がない。涼子が居間を覗き込むと、七海は昨日録画しておいたバラエティー番組を見ていた。ゲラゲラと声を上げ、何がそんなに可笑しいのかと思うほど笑っている。

「ほら、食べよう」

　ちっとも返事をしない七海の前に、涼子は二人分のたらこスパゲティを運んだ。

「あ、もう、出来たの？　いただきまーす」

　七海はようやく画面から目を離し、フォークを手に取った。

急かしていたくせにこれだ……。

涼子は毎度の事ながら呆れた。七海は相当お腹が空いていたらしく、涼子が半分食べる間に全部平らげた。涼子の冷ややかな視線にもお構いなしだ。

白い服の男３

「これから美咲と遊ぶんだ」

　空になった皿を流しに運んだ七海が言った。

「どこで？　外は危ないよ」

　野球場には行かないにしても、すぐ近くを装甲車がうろうろしている。

「美咲んちだよ。外には行かないから」

　彼女の家は野球場とは反対方向にある向かいのマンションだ。

「それならいいけど……気をつけてね」

　涼子は七海が円盤よりも警察に拉致されないか心配だった。

「うん。じゃあ、行ってくるね！」

　七海はパンパンに膨れたシール帳を持って出掛けていった。

　涼子は七海を見送った後、居間に戻って残りのスパゲッティに手をつけた。付けっぱなしのテレビからは、不自然に付け足された笑い声が流れてくる。

　興味をそそられない番組に夢中になれるはずもなく、八分目に満たされた腹も手伝って瞼が重くなる。涼子は座ったまま、少しだけうたた寝をした。

　あの子、シールを買いに行くのを忘れてる……。

　夢か現実か曖昧な意識の中で、涼子は今朝のことを思い出した。

　うっすらと目を開け、部屋の中を見渡す。床に七海のランドセルが無造作に転がっている。持ち主は何時に帰ってくるかわからない。夕方のチャイムが鳴るまで帰ってこないことも有り得る。
現在、午後一時。最悪四時間、待つ事になる。

せっかくの休日を非効率に使うのはもったいないと思いつつ、涼子は一人で買い物に出掛けていいものか迷っていた。普段から七海には、約束は守れと厳しく言っているからだ。

どうしようかと思案した挙句、とりあえず一時間だけ待ってみる事にした。

コーヒーでも飲みながらゆっくりしていようと腰を上げた時、ふと、ローボードに目が行った。埃が積もっている。濃い木目なのでかなり目立つ。気になってはいたのだ。いつも忙しさにかまけて後回しにしていた。だが、今日は時間に余裕がある。見過ごす理由がない。

仕方がない。やるか。

涼子はコーヒーを飲むために立ち上がった足で雑巾を取りに行った。

洗面台で雑巾を絞る。すぐに黒くなる雑巾を何度も洗いながら、棚という棚をすべて拭く。完璧とまではいかないまでも、なんとか埃が目立たなくなった。

次に物置から掃除機を出してきた。居間から掃除機を掛けようと、炬燵布団を隣の寝室に投げ入れ、テーブル本体はキッチンに立てかけた。

サッシの前に立ち、スイッチを入れる。サッシの溝がかなり汚れている。ガーゼを巻きつけた細い棒を使わないと湿り気を帯びた汚れが落ちそうもない。涼子は掃除が長引きそうな予感を抱きながら、とりあえず隙間ノズルで溝のゴミを吸い取った。

白い服の男４

　七海の勉強机周りに移る。椅子を引っ張り出し、ホースを突っ込む。

　引き出しの奥から飛び出した七海の持ち物がたくさん落ちている。主に七海が描いたマンガだ。それを一枚一枚拾い上げ、机の上に置く。勝手に捨てると怒られる。涼子にはゴミに見えても、七海にとっては思い入れのある大事な作品なのだ。

　ローボードの脇、狭い隙間にも細かい塵が溜まっている。髪の毛が溜まるのがこの付近だ。

　髪の毛はなぜかいつも落ちている。掃除機はたまにしか掛けない涼子だったが、ホウキではまめに掃く。それでも落ちている。掃いても掃いてもなくならない髪の毛は、涼子にとって埃より不快な存在だった。

　部屋の中央と押入れの溝のゴミを吸い取り、ようやく居間が終わった。隣の寝室へ移動するのに、炬燵を元に戻さなくてはならない。涼子は掃除機を居間の端に置き、寝室に足を踏み入れた。

「やぁ」

　誰もいないはずの寝室から声がした。微かにとか、遠くからとかの次元ではない。はっきりとした近距離からの声だった。

　涼子は何かと思い、一瞬、硬直した。耳を澄ませる。通りを走るトラックと、冷蔵庫のモーター音しか聞こえない。

　気のせいか。瞬きを数回しながら考えた後、なんとなく違和感のあった左側を見る。同時に声が出せないほど驚き、勢い良く後ずさりして寝室の壁に背中を強打した。

　見知らぬ男が立っていた。

　若くて痩せていて上背があり、白いハンチングに白いシャツ、白いジーンズ、白いスニーカーを履いている。アジア系の顔をしている割に肌も白い。ウエーブのかかった髪だけが薄くグレーがかってはいるものの、全身真っ白としか形容しがたい男が洋服ダンスと押入れの隙間にすっぽりと入り込んでいた。

「ダイジョブ？」

　壁に張り付いたままの涼子に向かって男が訊いた。男性にしては柔らかく高い声をしている。

「な、なんですか？　あなた」

　涼子はやっとのことで声を絞り出した。

「アタシ？　天使」

　男は首を斜め四十五度に傾けながら、女のような物腰で天使と名乗った。

「は？」

　涼子は恐怖に怯えながらも、思いも寄らない答えに呆気に取られた。勝手に人の家に上がり込んどいて天使とはふざけている。普通に考えれば泥棒か変質者ではないか。もっとも張本人がそう答えるはずもないが、天使とでも言えば誤魔化せるとでも思ったのだろうか。

「天使に見えない？　ほら」

　訝しげにしている涼子に、男は涼しげな笑みを浮かべながら自分の頭の上を指差した。涼子は眉をしかめて男の指先を追った。

「あ……」

　涼子は思わず目を見開いた。細工されているとは到底思えないものが男の頭上にある。ほの白い光の輪が浮かんでいるのだ。超極細のグラスファイバーで繋がっているにしては輪の方が物質として心もとない。

白い服の男５

「さっき、円盤見たでしょ？　あれに乗ってきたの」

　飄々としながら男が言う。

「何言ってるんですか。馬鹿なこと言わないでください」

　涼子は強く反論する。だが、頭の輪っかに関して否定材料は見つからない。とはいえ、自分は天使で円盤に乗って来たというのは、話が現実離れし過ぎている。

　涼子は未確認飛行物体の類を信じていないわけではなかった。が、目の前の天使が人間と変わらぬ風貌をしているのがどうも胡散臭い。輪っかに惑わされまいと、涼子は必死に形勢を立て直した。

「泥棒だって認めたらいかがですか？　うち、貧乏なんで差し上げるもの何もないですから。出てってください！」

　涼子が一気にまくし立てると、男はやれやれといった風にため息を吐き、涼子に向かって歩き始めた。

「近づいてこないでよ！」

　制止する涼子の言葉など男の耳に入らない。

「まあ、無理に信じなくてもいいわよ。でも、このままじゃ具合悪いから少しじっとしてて」

　男は涼子に触れられるくらいの距離まで来ると、彼女の目線に合わせる為に腰を屈めた。

「……警察呼びますよ。あの人達、ここに来たくて仕方がないんだから」

　体を硬直させるしかない涼子だったが、難を逃れようと必死に抵抗した。だが、この状況でどうやったら警察を呼べるのか皆目検討がつかない。

「呼びたければどうぞ」

　男は全く動じない。

「呼ぶわよ。呼ぶからちょっとどいてよ」

「それは無理」

　携帯も固定電話も居間にある。動かないと言い張る男を跳ね除けて逃げたとしても、その刺激で何をされるかわからない。

　成す術がないと半ば諦めた涼子は、手を出されたら大声を出そうと思った。声を上げれば近所に聞こえるはずだ。サッシは防音ではない。寒いしうるさいしで良い事がないと思っていたサッシが役に立つ時が来た。

　男は危害を与えるでもなく、涼子の瞳の奥をずっと覗き込んでいる。

　あまりに近い距離からの視線をあえて逸らしていた涼子だった。この距離で見つめ合うのは好きな相手に限りたい。が、サッシの件で少し明るい見通しの立った涼子の心に隙が出来た。斜め横に向けていた視線を正面に向ける。必然的に自分の瞳を見ている男の瞳が見えた。そして、動けなくなった。

　雲の上にいるような、果てなく続く青……。

　男の透き通る瞳の奥に見えた光景が、涼子の脳裏に染み込むようにして浮かび上がった。

　男が目を細める。

　次の瞬間、涼子は全身の力が抜け、意識が遠のき、膝から崩れ落ちそうになった。それを男が両腕で支える。涼子の意識はすぐに戻ったが、そこにいるのは先程までの警戒心むき出しの彼女ではなかった。

白い服の男６

「翼だってあるのよ、ほら！」

　涼子の表情の変化を見て取った男は、自分の背丈と同じ、二メートルほどもある大きな翼を広げた。艶やかで重量感のある純白の翼だ。

「素敵……」

　不審者がいるという思いは完全に消えている。涼子はうっとりとしながら翼に魅入った。

「すごい？」

　男は得意顔だ。

「あなた……ホントに誰？」

　涼子はまだ少し、ぼんやりしながら男に訊いた。

「だから、天使だって言ってるでしょ」

　男は腕を組み、さらりと言い放った。

「そんなこと信じられるわけ……」

　涼子が否定しようとした時、男は広げた翼で彼女をふんわりと包み込んだ。すると、涼子の声が突然出なくなった。

「魂で喋んなさい。アタシに嘘は通じないわよ」

　白い羽の中に埋もれた涼子を男が優しく諭す。そして、翼から涼子を解放した。

「魂？　……あ、声が出た」

　男の背中に翼が収まるのと同時に、涼子の声帯に痞えていた何かがすっと流れた。男はクスリと笑った。

「そう。頭で考えるんじゃなくて、魂で感じたままを言葉にして」

「頭で考えずにどうやって話すの？　話す前に頭の中で考えるんじゃないの？」

　徐々にクリアになってくる頭で考えた事を涼子は口にした。

「人間って必要以上に思考を使う生き物なのよね。それもネガティブな方向に。過去の経験をずっと引きずってる」

「過去の経験？」

「さっき、アタシが天使だって信じられないって言いかけたでしょ？　本来のあなたは不可思議なことでも頭から否定しない人なのよ。だけど、大の大人が非現実的なことを言うのはおかしいって決め付けてる自分もいる。思い込みっていうのかしら。何かからの情報に囚われているのもあるわね。あなた、人よりそれが激しいからいつでも思考をフル回転させてるの。挙句、魂が表現したい事とは逆の言動をしちゃうのよ」

　男はとつとつと涼子に説いた。

「よくわかんない……」

　心理学のような、哲学のような……。途中までは何となく理解できるものの、涼子は魂という言葉に惑わされていた。

「それでいいの。わからないものを頭で考えてわかった気になる方が問題だから」

　眉をひそめている涼子に、男はまた、笑みを送った。

　全く腑に落ちないまま涼子はふと、視線を下ろした。男の穿いたジーンズが目に映る。腿や膝下が両足共にかなり大胆に破けていた。

白い服の男７

「ジーパン……ボロボロだね」

　涼子は見たままを男に告げた。告げた後、思い込みではないよなと、自分の発言を振り返る。

「ボロボロって言わないでよ、ファッションなんだから」

　ずっとにこやかだった男が口を尖らせた。

「あ、怒った」

　涼子は思わず吹き出した。意味不明な言い訳をしてくると思った男が普通に感情を露にしたからだ。

「怒ってなんかいないわよ。天使は怒りという感情を持たないんだから」

　男はコホンと一つ、咳払いをする。

「怒らないの？　何があっても？」

「怒らないわよ。何があっても」

「どうして？」

「愛がすべての天使が怒るわけないじゃない」

　普通になったと思ったのも束の間、男はまた意味不明の言い訳を始めた。涼子は、ふーんと軽く受け流す。でも、心が愛で満たされていたら、怒りという感情は生まれないというのは一理あると思った。涼子は同意の意味で軽く微笑んだ。

「あれあれ？　アタシがあまりにもカッコイイから惚れちゃった？」

　涼子の表情が柔らかくなったのを見た男が調子付く。

「馬鹿なこと言わないでよ。っていうか、何でそうなるのよ」

　涼子は不意を食らう。

「アタシを見てうっとりしてるから」

「はぁ？　自意識過剰もいいとこね」

　容姿がいい男はこれだから困る。涼子はこの手の軽い男を『恋愛対象』としては相手にしない事にしていた。

　この手の男とは、自分に自信があるだけに女性の心にずかずかと土足で上がり込んで来る奴のことだ。

　気が弱く自己主張をしない男性が多くなってきている昨今、母性本能をくすぐる甘えを素直に見せ、時に力強くリードする。そんな男に、最初は警戒していた女性もだんだんペースを乱され、心を許す。ゲームオーバー。落とした女には途端に興味を無くす男は次のターゲットを求めて去っていく……。

　涼子はそうやって泣かされた友達を何人も見てきた。

　ただ、このようなプレイボーイは、幼少時に十分な愛を注いでもらえなかったことがトラウマになっているケースが多いという。自分に向けられる愛情が途切れる事を恐れているのだ。それ故、複数の女性を囲う。

　プレイボーイの心の片隅に、小さくうずくまっている幼い男の子がいると知ってから、涼子はプレイボーイを闇雲に避けるのは止めた。拒否しないとはいえ傷つけられるのは勘弁願いたいので、そんな彼らと縁があった時は、『友人』として付き合う事にしている。

　だからというのも何だが、涼子は男を客観的且つ冷静に見て、恰好がいいのは認めてもいいと思った。この男、モデル体型で顔も整っている。破れたジーパンをお洒落に穿きこなすには十分な素材の持ち主だ。

白い服の男８

「素直に認めなさいよ。アタシにウソは通用しないって言ったでしょ？」

　案の定、男は余裕を見せる。

「私は母親なのよ。なんで突然出てきたあなたに惚れなくちゃいけないのよ。しかも明日で二十八だし」

　涼子は男のペースにはまらないよう気を付ける。

「まだまだ若いじゃない」

　お決まりの慰めだと涼子は呆れつつ、「あなた、いくつ？」と男に訊いた。

「アタシは内緒。ってか、たぶん理解されないから言わない」

「天使だから何万歳とか言うんでしょ」

「ああ、近いものがある」

　聞くだけ無駄だったと涼子は思った。見た目は涼子と同じくらいだ。

「恋心はいつまでも持ってた方がいいわよ。もっと遊んだ方がいい。老け込んじゃうから」

　男は頼まれてもいないアドバイスを始めた。

「別に、遊びたくもないし」

　涼子は半ば、ふてくされて言う。

「遊びたくないの？　二十代で？」

「二十代だって関係ないでしょ？　生きていくのに精一杯なんだから。食べていくのに必死なのよ。子どもの教育費だって稼がなきゃいけないし。余計なことしてられないわ」

　それが現実だ。

「苦労してるんだね。可哀相に」

　涼子の言い分を聞き終えると、男は何を思ったか両腕を大きく広げ、愛しそうに涼子を抱き締めた。軽いハグというレベルではない。少し火照っているくらいの体温と心臓の鼓動がしっかりと伝わるくらい体を密着させている。すり抜ける隙間もない。

「ちょっと、何するの……」

　涼子は小声で抵抗した。だが、翼で包まれた時と同様、見えない力に阻まれてしまう。そのまま流れに逆らわないでと、どこからか感覚的なメッセージが聞こえてくる。耳にではなく、心に響いてくるのだ。

「いいから。全身の力を抜いてリラックスして」

　男の言う通りにするつもりがなくても涼子は動けなかった。勝手に重くなる瞼を閉じる。心を許した人ではないと決して見せない無防備な涼子がそこにいた。

「可愛いね。いつも素直でいればいいのに」

　涼子の髪を撫で、男はそっと彼女の体から手を離した。

「素直じゃなくて悪かったわね。……あ、言えた。さっきから何？　あなたが近づいてくると言いたいこと言えなくなるんだけど」

　涼子が再び正気に戻った。

「気にしない、気にしない。本来の自分に返る為の練習だから」

　男は涼子を軽くあしらった。

「なにそれ。意味がわからない」

　涼子は男を一睨みする。

「それに、私は可哀相なんて言われるほど落ちぶれてないの。今のままで十分幸せなんだから」
　正直、これは強がりだった。

白い服の男９

　涼子は元々体が強い方ではないので、無理をすると途端に体調を崩す。それでも仕事や家事をこなさなくてはならない。思うように動けない自分が情けなくて、七海が見ていないところで泣く事もあった。支えてくれる人がいてくれたら……そう思う事も度々あった。

　あくまでも突っぱねる涼子を、男は悲しげに見つめた。

「あまり、そうは見えないよ」

　それまで軽々しかった男が声のトーンを落とし、真面目な顔をした。

　涼子は眉をひそめながら男を見上げた。見破られている。この男には本当に嘘が通用しないのかと思った。

　顔を曇らせたまま涼子が黙ったので、男が話題を変えた。

「ねえ、今の生活をもっと充実させたいとは思わない？」

「え？　どういうこと？」

　反論ばかりだった涼子が聞き返してきたことで、男はパッと表情を明るくした。

「家事と育児と仕事だけで終わる毎日で満足してる？　何かを変えたいとか思わない？」

「何かを変える？」

「うん。夢とかない？　あれば、半分だけ叶えてあげるから」

　男は悪戯っぽい目つきで「半分だけね」と強調した。

「半分？」

　涼子はキョトンとした。

「そう。半分だけ夢を叶える手伝いしてあげる」

「なんで半分なの？　全部叶えて初めて夢を叶えたっていうんじゃないの？」

　涼子が率直に思ったままを口にした。

「そんなことないわよ。半分叶えるっていうのは達成までの道筋を見出すってことなの。世の中、夢を叶えたくても手段がわからずに同じところでじたばたしてる人が多いのよね。だけど、達成までの希望の道が見えると頑張れたりするでしょ？　そのお手伝いをするのがアタシ」

　そう言って男は自分の胸に左手の平を置いた。

「じゃあ結局は自分の努力次第ってことじゃない」

　涼子は淡々と呟く。

「そうなんだけど……。うーん、夢を叶える近道を教えてあげるって言ったらわかってもらえるかしら。叶えるために必要な環境を整えてあげるっていうのもあるわね」

「わかるようなわからないような……。そんな力があるんなら全部叶えてくれればいいのに」

　聞けば聞くほど都合のいい話に思えてくる。うまい話には裏があると思っている涼子は適当な相槌をした。すると、男が突然怒り出した。

「簡単に叶う夢なんて夢じゃないわよ。自分で頑張って手にするからこそ達成感だって味わえるのに」

「何、怒ってんのよ。餌、吊るしといて……」

　もっともなことを言い出した男に、涼子は文句を言いかけて止めた。

「ん？　なに？」

　男は語気を荒げたまま、涼子の声を逃さず拾い上げる。

「なんでもない。自分の力で叶えるからこそ、よね」

　それは涼子も同意する。

「そうよ、最後は自分次第。でもどうする？　半分は他力本願でもいいと思うけど」

　素直に引き下がった涼子に、男は再びにっこりと笑いながら選択を迫った。

「え……」

　涼子は戸惑う。

「願い事はないの？」

　男は答えを急かす。

「急に言われてもなぁ……」

　簡単なことならいくつか思い浮かぶ。ただ、涼子にとってそれらは道筋を整えてもらうほどの事ではなかった。

白い服の男１０

　きっとこの男が求めている事は、もっと難しくて重々しくて一生掛かっても叶わないかもしれないくらいの願いを言っているのだろう。そんな願い事がないわけではない。時折襲われる寂寥や焦燥。それがなくなる日が来ればいいのにと、心に隙間が出来る度に思う。

　だが、そんなことを突然現れた男にすんなり打ち明けるのもどうかと涼子は思った。

　考え込んだ涼子を、男はしばらくの間、不敵な笑いを浮かべながら眺めていた。

　視線を感じた涼子はふと男の顔を見た。

「その顔、天使っていうより悪魔だよ。何か企んでない？」

　涼子が指摘する。

「へ？　そんなことないわよ。悪魔だなんて人聞きの悪い」

　男は妙に慌てている。何か隠しているようにも見える。

「怪しいなぁ」

　勘ぐる涼子に、「まあ、ゆっくり考えて。時間はまだあるから」と、男はそそくさと話をまとめた。

「お腹減らない？　何か食べに行こうよ」

　男が言った。

「食べに行こう……って、あなたお金持ってるの？　私、人に奢るほどお金持ってないからね」

　天使だと信じるなら人間ではないのだろうし、ただの不法侵入者なら尚更、お金を持っているとは考えにくい。

「大丈夫。たんまり持ってるから」

　涼子の心配をよそに、男は自信たっぷりに言い放った。

「ホントに？　天使の国の紙幣とか何とか言って、適当な紙切れ出さないでよ？」

　涼子は嫌味交じりに告げる。

「大丈夫だって」

「でも私、お昼食べちゃったし」

「デザートでも食べなさいよ。奢るから」

「一人で行けばいいじゃない」

「そんなつれないこと言わないでよ」

　男は頑として涼子との外食に拘った。

　涼子は一呼吸置いてから、根負けする。

「わかったわよ。でも、その格好で行くの？　かなり目立つと思うんだけど」

「あ。それもそうね」

　男はそう言うと、腰の辺りを片手でポンポンと二回叩いた。すると、男の着ている服が瞬時にブルージーンズとグレーのパーカーに変わった。手品のように布を纏い、見えないところで早変わりするのならいざ知らず、男は何も隠すことなくやってのけた。

白い服の男１１

「えっ、どうやったの？　仕掛けは？」

　マジックの類が大好きな涼子は目を瞬かせた。

「仕掛けなんかないわよ。天使の基本的動作」

　男は得意げだ。

「きほんてきどうさ？」

「天使なら呼吸するのと同じくらい普通に出来るって事」

「他人は変えられないの？　私の服とか」

　涼子は試しに言ってみた。

「人工的なものは無理だわ。私のは全部天界製だから」

「てんかいせい？」

　やっぱり訳がわからず、涼子は口をぽかんと開けた。

「そんなことより早く行きましょ」

　男は涼子の腕を掴んで催促する。「財布、持っていかないよ？」という涼子に、男は「いいよ。はい、上着」と言って、下げてあったコートを差し出した。

「娘が帰ってくるから一時間だけだからね」

　強引に玄関に連れて来られた涼子は、転びそうになりながら靴を履いた。

　涼子は車で十分ほど行ったところのファミリーレストランに男を連れて行った。

　地味な服装に替えたとはいえ、身長が二メートルもあり、モデル並みの顔立ちをしている人物と

[illegible]
並んで歩けばかなり目立つ。案の定、レストランに入るや否や、店員や食事中のお客達が一斉に二人に注目した。

「何名様ですか？」

　応対に出てきたウエイトレスは平静を装っている。

「お二人様です！」

　男は意気揚々と答えた。涼子は刺さる視線に耐えられず、男の背中に隠れていた。

「おたばこはお吸いになられますか？」

　ウエイトレスが男に訊く。

「たばこ、吸う？」

　男は振り返り、縮こまっている涼子に訊いた。涼子は男に向かって小さく頷いた。子どもの前では吸わないが、一旦外に出るとかなりの本数を吸う。

「じゃあ、喫煙席で……」

　男がそう言いかけたところで、涼子が小声で遮った。

「あ、あの、一番目立たないところ、空いてます？」

「は？　目立たないところでございますか？　えっと……少々お待ちください」

　店員は涼子の要望に戸惑いながら店内を見渡した。初めてそんなことを言われたのだろう。ちょうど通り掛った別のウエイトレスに耳打ちしている。耳打ちされた方のウエイトレスは半分馬鹿にしたような苦笑いをし、「あっちならいいんじゃない？」と、涼子にも聞こえるくらいの声で言った。

　答えを得たウエイトレスは、再び営業スマイルで二人の前に立った。

「禁煙席になってしまいますが、あちらの奥ならあまり目につかないかと……」

店員は、厨房を囲んでＬ字になっている店の奥を手で示した。

「禁煙席でかまいません」

涼子は即答する。

「ではご案内します」

心なしかウエイトレスの笑顔がぎこちない。

白い服の男１２

　誘導されている間、涼子は一番後ろでずっと目を伏せていた。

　男はお構いなしに、「たばこ良かったの？　アタシに遠慮した？　背筋伸ばそうよ、美人が台無し」と涼子に声を掛ける。

　涼子は「いいから」と小声で言いながら、手を払って早く進むよう合図した。

　二人はトイレの前の席に通された。いつもならちょっと敬遠したい場所だが、今日の涼子は他人から離れていれば何でも良かった。

「やっと落ち着いた」

　涼子が安堵の息を漏らした。昼時を過ぎていたせいか、その周辺の席には誰も座っていない。ほとんどの客が離れた喫煙席に着いていた。

「食事に来ただけでこんなに疲れたの、初めてだわ」

　涼子は対面に座った男に聞こえよがしに言った。男は自分への皮肉だとわからないらしく、「どうして？　やっぱり喫煙席が良かったんじゃない？」と、まだたばこに拘っている。

「あなたっていつもこんなに人から見られてるの？」

　男の質問を聞き流し、逆に涼子が質問する。

「まあね」

　男は涼しげに答える。

「じろじろ見られて嫌じゃない？」

「いい男だから仕方ないわ」

　男は涼しげに答えながら白い歯を見せた。爽やかすぎる笑顔に、涼子は苦笑するしかなかった。

「何が食べたい？　アタシ、しょうが焼き定食」

[illegible]

男が涼子に向けてメニューを広げた。

「何を食べるか決めてきたの？　メニューになかったらどうするのよ」

差し出されたメニューをパラパラと捲りながら涼子が言った。

「たいがいあるでしょ」

男はしょうが焼きがあると疑わない。

「そうとも限らないと思うけど」

涼子は最初のページに戻って、しょうが焼きを探す。

「ああ、あるわ」

「ほらね」

男は自慢げに言い放ち、「リョコは？　何食べるの？」と、初めて涼子の名を口にした。

「どうして私の名前を知ってるの？　ウ、が抜けてるけど。教えてないよね？」

玄関の表札にも苗字しか入れていない。

白い服の男１３

「リョコのデータは調査済みよ」

　男は話を半分しか聞いていないのか、ウ、を無視した。

「私のデータ？　他にも何か調べたってこと？」

「母子家庭ってこととか、本屋に勤めてることとか、今までリョコに起きた事や心の中で思った事、全部知ってるよ」

　男は涼子の全てを知っていると言い切った。

「じゃあ、私が今、何を考えてるかわかる？　あ、余計な事まで言わなくていいからね。何が食べたいかだけでいいから」

　涼子は、初対面の人間に心の中の事までわかられてたまるかと思いながら訊いた。

「わかるよ。コーヒーゼリーが食べたいと思ってる。それも生クリームがお目当て。ホントはバナナパフェがいいんだけど、今日は食べ切る自信がない。それに、お昼を食べていなかったら和風ハンバーグにしたかった、ってな感じかな。違う？」

　男は、涼子がついさっき考えたことを言い当てた。

　完全に心の中を見透かされている。涼子は何も言えなくなり、拗ねたように口を尖らせた。
　涼子の表情で正解とみなした男は、にやりと笑った。

「リョコのことは何でもわかるよ」

「なんか、ヤナ感じ」

　居心地が悪い。そう思いながら涼子は更に膨れてみせた。

「アハハ、今のはたまたまだよ。リョコ、いつもこのパターンでしょ。和風ハンバーグしか食べないから今日もそうかなと思っただけ」

「なんだ、そうなの？　でも、和風ハンバーグをいつも食べてるってことは知ってるんだね」

　何らかの方法で自分の事を調査されている。やはり気分のいいものではない。

　そう思うと同時に涼子は腑に落ちないものを感じていた。コーヒーゼリーは滅多に注文しないメニューなのだ。それをこの男は言い当てた。本当に人の心が読めるのだろうか。

　涼子が事態を飲み込めないでいると、男が真面目な顔で呟いた。

「ただ、リョコのこれから先、遠い未来の事はわからない。これから何が起きるのか、リョコがこれから何をしようとしていくのかはわからないんだ」

「未来はわからないの？　何を注文するかっていうのだって未来だと思うけど」

　涼子は疑問をぶつける。

「未来はリョコが切り拓いていくものだから」

「でも、人の願いを叶えられるんでしょ？　それって未来がどうなるか予測できるってことじゃないの？」

「違うわよ。道筋を整えてあげるだけって言ったでしょ？　未来を予測しているわけじゃないの」

「道を逸れないようにするってこと自体、未来がわからないと出来ないんじゃない？」

「道を示したところで、その人がそこからどう歩いていくかで未来は変わるんだから」

　ウエイトレスが注文を取りに来たので話はここで途切れた。男はウエイトレスに笑顔を振り撒きながら二人分のオーダーをする。

　いつもなら機械的に注文を復唱するウエイトレスも、無邪気すぎる男に釣られて素の笑顔になる。近い未来と遠い未来の違いがわからない涼子は仏頂面のまま置き去りにされた。

　ウエイトレスがテーブルから離れる。涼子は彼女の後姿を見送りながら、もやもやした気持ちを持て余していた。先程の話がなんとなく気になる。だが、間が空いてしまったせいで話を戻す取っ掛かりが掴めなかった。

白い服の男１４

　涼子は男の顔をまじまじと見る。涼子と目が合うと、男は心底嬉しそうに微笑んだ。涼子は愛想笑いを返す。その拍子に、男が現れた時から引っかかっていたことを思い出した。

「ねえ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「ん？　何でも聞いて」

　男は耳を傾ける。「あのね」と切り出しながら涼子がテーブルに肘を乗せると、男もテーブルに腕を乗せ、思い切り身を乗り出して彼女の顔すれすれまで自分の顔を寄せた。

「ちょっと、聞きにくいな」

　涼子は体を仰け反らせた。

「アタシに彼女がいるかって聞きたいの？　いないいない、安心して。アタシはリョコ一筋だから」

　そう言って、男はテーブルに腕をついたまま上体を起こした。聞きにくい理由を男は自分の都合のいいように解釈する。

「リョコ一筋って意味わかんない。違うよ、そんなんじゃなくて」

　男の顔から解放された涼子は強く否定する。

「じゃあ、何よ。ああ、わかった。回りくどい事なしに愛の告白がしたいの？　いいわよ、受け止めてあげる」

「違うってば。それは断じて違う」

「それも違う？　じゃあ……」

　男がまた何かを言い掛けた時、涼子は早口で男の言葉に被せた。

「どうしてオネエ言葉なの？」

「は？」

「？」

　男にとって思いも寄らない質問だった。

「もしかして、そっち系？」

「何それ。ひどーい」

　男は憮然とした。涼子はお腹を抱えて笑い出した。

「私、オネエと話してみたいと思ってたんだ。念願叶っちゃった」

「オネエじゃないわよ。心も体も男なんだから」

　男は必死に弁解する。

「じゃあなんで女みたいに話すの？　誤解されても仕方ないよ」

　涼子が食いつく。

「物心付いた時からこの話し方よ。周りも何も言わなかったし」

「あなたの国の男性はみんなそうなの？」

　天使の国があるとして涼子は問う。

「そうじゃないけど……珍しいことじゃないわね。男だからとか女だからとか、あまり拘らないのよ。言葉遣いなんて大した問題じゃないの」

「そうなんだ。でも、楽しい」

　涼子はまた声を上げて笑った。

「そんなに笑うことないじゃない。侮辱だわ」

　男は完全にヘソを曲げた。この中性的な男を涼子は微笑ましく思いながら、「ごめん、もう笑わない」と謝った。

白い服の男１５

「そうだ。名前がわかんないと話しづらいな。なんて呼んだらいい？」

　空気を変えるため、涼子が男に訊ねた。

「なんでもいいわよ」

　男はふてくされたままだ。

「じゃあ、天使だからテンちゃんね」

　涼子も適当だ。

「一応、ラミエルっていう正式な名前があるんだけど」

「ラミエル？　言いにくいからやっぱテンちゃんでいいよね」

「強引ね」

　テンは呆れ顔をした。先程までの立場が逆転している。完全に涼子のペースだ。涼子は構わず話を続ける。

「テンちゃん、何も喋んなかったら物凄くイケメンなのにね」

「引っかかる言い方ね」

「もったいないじゃない、カッコいいのに」

　テンは『カッコいい』という言葉に反応して表情を緩めた。根は単純らしい。

「でも、もしオネエ言葉じゃなかったら近寄り難かったかもね」

「どして？」

「見た目がカッコいい人って私ダメなのよ。怖くて」

　見た目が整っている、イコールモテる、イコール女の扱いに慣れている、イコールいざとなる

と冷たい。涼子の中にそういう図式が出来上がっていた。

「アタシ、怖くない？」

「うん」

「良かった」

「よく喋るから怖くないっていうのもあるかも」

「いまどき無口なんて流行らないのよ」

　テンがまた口を尖らせる。涼子はまた笑った。

「ホントは彼女いるんでしょ？　天使の彼女」

「いないわよ。めんどくさい」

　意外な答えが返ってきた。

「なんで？　テンちゃんからそんな言葉を聞くとは思わなかった」

　天使はネガティブな言葉など発しないと涼子は勝手にイメージしている。

「天使の女は天使の男に高飛車なのよ」

　テンは腕を組み、苦い顔で遠くを見つめる。

「何か痛い想い出がありそうね。天使って温厚で誰にでも優しいのかと思ってた」

「人間にはね。天使同士はダメ」

「どうして？」

「男女の枠を超えて競争意識が激しいから。どれだけ人間に愛を与えたかって絶えず争ってるの」

涼子の中の偶像が崩れていく。

「天使なのに争わないでよ。じゃあ、恋はしないの？」

「するわよ。人間に」

「え？　どういうこと？」

「相手に尽くした分だけその人のことを好きになっちゃうのよ。いろいろ手を差し伸べるうちに恋心が芽生えちゃうのよね。人間もそでしょ？　尽くされてる時より尽くしている時の方が燃えちゃう」

　思い通りにならない相手ほどどうにかしたくなる。それが恋。思い当たる事のある涼子はテンに悟られるのが嫌で、無表情のまま疑問を投げる。

「でも、天使と人間じゃ結ばれないんじゃないの？」

「人間になるから大丈夫」

「あ、また始まった」

　非現実的な話には付いていけない。

「疑ってるでしょ。あちこちにいっぱいいるよ。慈愛に満ちてる人とかいない？」

「いるけど……性格的なことでしょ」

「そうじゃないんだな。天使の生まれ変わり」

　テンは言い切る。

「いろいろ障害もあるんだけどね。人間になってから結ばれるまで」

「なに、障害って？」

「それは秘密」

　テンは自分の唇に人差し指を立て、涼子の目をまっすぐに見つめた。涼子はなぜか自分の唇が

塞がれた気がした。

　店内は相変わらずざわついている。厨房からは陶器の皿がぶつかり合う音。小さな子どもを叱りつつお喋りに高じる母親達。流れているのか意識しないとわからない程度のＢＧＭ。けっして澄んでいるとは言い難い空気の中で、ふいに胡麻の香りが涼子の鼻をくすぐった。

「お待たせいたしました。こちら、しょうが焼き定食になります」

　ウエイトレスが料理を運んできた。

「はい」

　テンはウエイトレスを見ながら軽く頷き、「コーヒーゼリーは彼女ね」と、涼子の方を手で指した。

　涼子はテンの前に置かれたしょうが焼きを覗き込む。自分も頼めば良かったと少々後悔。テンは箸を手に取りながら涼子の様子に気付き、「食べる？」と訊く。涼子は恥ずかしくなり、慌てて首を横に振った。

「食べたら帰らないといけないんだっけ？」

　テンが顔を赤らめている涼子に訊いた。

「あ、そうだ。娘が帰って来たら買い物に行くんだった」

　涼子はすっかり忘れていた現実を思い出した。

　テンはしょうが焼きを急いで口に運び始めた。彼は体の大きさに比例して口も大きい。肉とご飯を交互に五口ずつ頬張り、あっという間に皿を空にした。

「早いね」

　呆気に取られながら涼子が呟いた。テンの食べっぷりに圧倒されていた為、コーヒーゼリーはまだ一口分しか減っていない。

「リョコが急いでるから」

「だからってそんなにがっつかなくても……」

「がっつくなんて下品みたいに言わないでよ。キレイに食べてたでしょ？」

　箸で運んだ分の料理を噛み切ることなく口の中に入れてしまうので、テンの食べ方は確かにキレイだった。

　涼子は携帯の時計を見た。一時間で帰るとテンに宣言した時間まで、あと十分少々だ。涼子はコーヒーゼリーをスプーンで崩すと、一気に数口で食べ切った。

　これから会計という時、涼子は不安になった。

「ところで、本当にお金持ってるの？」

「持ってないよ」

　テンは当然のように言い切る。

「持ってないの？　私も持ってこなかったよ？　テンちゃんが任せといてって言うから」

　涼子が戸惑いを隠せないでいると、テンは「ふふーん、これ見てて」と不敵な笑いを浮かべながら、テーブルに備え付けのペーパーナプキンを一枚手に取った。それを小さく折り畳むと右手で握り締めた。

「はい」

　三秒後、開かれたテンの手の平の上に、ペーパーナプキンと同じ大きさに折られた一万円札が姿を現した。

「なんだ、持ってるじゃない。わざわざ手品なんてしなくていいよ」

　涼子は手品だと決めつけ、「ペーパーは？　どこに隠したの？」とテンの袖口を捲ってみた。

「手品じゃないわよ。これがさっきのペーパーナプキン」

　テンは少しムキになる。

「ウソばっかり」

　涼子がすかさず否定する。

「ウソじゃないってば。じゃあ、いい？　手、貸して」

　テンは袖口を掴んでいる涼子の腕を取り、軽く握っている彼女の指の隙間に自分の指をねじ入れた。

「何するのよ」

　涼子は抵抗したが、手首をがっちり握られた為逃げられない。テンは涼子の手の平を開かせたあと、一万円札を載せた。

「ぎゅっと握って」

　テンは彼女の手を自分の両手で包み込む。

「開けとか握れとか勝手ね」

　涼子は文句を言う。テンは彼女の言い分を受け流し、三秒後に彼女の手をそっと離した。

「あ……」

　涼子がゆっくりと手を開くと、手の上にはペーパーナプキンが載っていた。

「これじゃ払えないから戻すよ」

　呆気に取られている涼子をよそに、テンは再び彼女の手を握った。三秒後、涼子の手の中のペーパーナプキンは再び一万円札に変わった。手の中でテンの思うままに変化する紙に、涼子は絶句した。

「広げてよく見てよ。透かしも入ってる」

　涼子は疑いながらも一万円札を広げ、上に向けて透かしてみた。どこからみても本物の一万円札だった。

「天使に出来ない事はないの」

　テンは得意げだ。

「うさんくさい」

　最近のマジックはどんなに間近で見ていても見破れない巧妙なトリックを使う。テンもこの手のテクニックを網羅したマジシャンなのだ。涼子はそう思い、それ以上テンのたわ言に付き合うのをやめた。

　涼子の呟きなど気にしないテンは、伝票を持ってレジに向かった。支払いを済ませ、二人で店の外に出てから、テンはお釣りで受け取った札と小銭をジーンズのポケットに押し込んだ。

「ところで願い事、決まった？」

　テンが涼子に訊ねた。

「また、その話？」

　突然現れて自分は天使だと名乗り、身辺調査はするし、オネエだし、食事に付き合えだの言って振り回す。この怪しい男とこれ以上関わるのは危険だと判断し、涼子は何か思いついた事を言って、さっさといなくなってもらおうと思った。

「何でもいいの？」

「何でもいいわよ」

　涼子が乗り気になったと勘違いしたテンは顔をほころばせた。

「じゃあね」

「うんうん」

　テンは目を輝かせる。

「実はね、付き合ってる人がいるんだけど」

　涼子がそう言った時、テンの笑顔が微かに固まった。

「ちょっと待って。願い事って彼に関すること？」

「うん。天使なんだから、恋愛関係得意でしょ？」

「そ、そうなんだけど」

　テンは困惑した。先程までの勢いを無くし、何やら考え込んでいる。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

　テンの態度に涼子は首を傾げた。

「ちょっと、用事を思い出したから後でね。涼子も早く家に戻りなさい」

　テンは涼子の願い事を最後まで聞かずに、そそくさと走り去っていった。

白い服の男１９

　曲がり角で身を隠しながら、テンは涼子が帰るのをちらちらと覗いていた。その肩を後ろから強く二回、叩く人物がいた。

「ラミエル」

　その人物はテンを正式名で呼んだ。真っ白なシルクのロングドレスを着て、腰まで伸ばしたコバルトブルーの髪をかき上げながら、テンのことをきつく睨んでいる。

「ジーナ！」

　振り向きざま、テンは焦ったようにその女性の名を呼んだ。

「彼女がいないってどういうことよ」

　ジーナはかなりの剣幕で怒っている。

「聞いてたの？」

「天使の女は高飛車で競争意識が激しいとも言ってたわよね」

「それはその、言葉の綾よ」

「願い事を叶えるのに彼女がいちゃまずいわけ？」

　ジーナはテンに向かって捲くし立てた。彼女はテンの恋人だった。

「いないって言った方が、人間の女の子は心を開きやすいかなと思って」

「そんなこと言って下心があったんじゃないの？」

「そんなんじゃないわよ。アタシにはジーナっていう大事な彼女がいるんだから」

　ジーナと同調するためにテンは腰を片手で叩き、元の白い服に戻った。

「よく言うわ」

　ジーナが吐き捨てる。

「ホントだよ。アタシはジーナ一筋」

「その言葉、誰にでも言うのね」

「それも聞いてた？」

　さすがにこの一言だけは誤魔化しきれない。テンは苦笑し、そばに積まれていたブロックに腰掛けた。

「どうでもいいけど、天使の昇格試験のルールわかってる？」

　ジーナがテンの鼻に自分の鼻を突きつけて詰問した。

「わかってるわよ。恋愛関係の願い事は不合格。それ以外のことでターゲットの人間の願いを半分叶える」

　テンが後ろに仰け反りながら答える。涼子に取った態度とは立場が逆だ。

「一週間以内よ。一度ターゲットを決めたら変えられないんだから。大丈夫？　彼女についてちゃんと下調べしてったの？」

　ジーナは人差し指を立て、「一」を強調する。

「したわよ」

「じゃあ、どうして彼に関する願い事を言われそうになってるのよ。あれは絶対、プロポーズされたがってるわよ」

　ジーナは体勢を元に戻して手を腰に当てた。大きなため息まで吐いている。

「私だってわかんないわよ。あの子、作家になりたいっていう明らかな夢を持っているのよ？母子家庭で生活に追われてるから叶える努力を中断してるの。それが一番の願い事のはずよ。彼どころじゃないと思ったのに」

「彼がいるって知ってたの？」

「知ってたわよ？　それが何か？」

　テンは当然のことと言い切る。

「馬鹿ねぇ。生活に追われてて彼氏がいる女だったら、その彼に頼りたいって真っ先に思うじゃない、普通」

　ジーナは心底呆れたように「そんなこともわかんないの？」と付け足した。

「でも、夢に関してかなりの執念を持ってるはずよ。……あ、だってね、毎日、新聞に載ってる作家の名前に見入ってるし。うん、そうそう。本人は諦めたつもりでいるけど」

　馬鹿にされっぱなしの状況を何とかしようと、テンはターゲットを涼子にした根拠を搾り出すように説明する。

「夢を諦めたのはいつ？」

「彼女が離婚してすぐだから六年前ね」

「六年？　諦めもとっくにつく頃だわね。あなた、ホントに読みが甘いわね」

　答えるごとにテンの形勢が不利になる。

「このままじゃやばいわよ。願い事の路線、変えさせないと」

「わかってるわよ」

　テンはジーナのお小言にうんざりし、立ち上がって彼女に背を向けた。両手を上げて軽く伸びをしながら体をほぐしている。テンの心境を敏感に察したジーナは少しだけ本音を見せた。

「危機感持ちなさいよね。不合格になったら天使の力を剥奪されて人間になるか、思念だけで人間を助け続ける天使の輪にされちゃうんだから。ただの輪っかよ。私のこと、ギュッともチュッとも出来なくなるんだから」

　結局それが言いたかったのかと、テンは振り返りながらフッと笑った。

「どうするの？　何か作戦はあるの？」

　ジーナは再び眉間に皺を寄せてテンににじり寄った。

「まあね。任せておきなさいよ」

　ジーナが甘えた事でテンに余裕が戻った。

「その様子なら大丈夫そうね」

　ジーナは満足そうに笑い、「ねえ、ラミエル。昇格した時の約束、覚えてる？」と訊いた。

「覚えてるよ」

　テンはさらりと答え、その後の台詞をジーナに向かってテレパシーで送った。

「信じてるからね」

　ジーナは背伸びをしてテンの首に腕を回し、軽くキスをした。

誕生日１

　休んだ気のしない休日を過ごし、一夜明けた。

　涼子は七海を学校に送り出した後、洗濯を済ませてから職場に出勤した。最寄りの駅前にある書店だ。読書好きな涼子はそこで趣味と実益を兼ねて働いている。

　読書が趣味とはいっても、仕事にしてからののめり込みようは半端ではなかった。

　雑誌やネットで売れ筋の作家や書籍を調べ、実際に読む。売り上げが伸びると見たものを一番目の付きやすい場所に、且つ、取りやすいように配置する。本を手に取らなくても内容がわかるように壁や棚に貼り出したり、ポップの書き方も研究した。

　また、無名の作家の作品でも涼子が良いと思ったものは店長に相談後、この店の一押しとして特別なコーナーを作った。それが店の特徴となり、常連の客を引き寄せる結果となった。涼子のアイデアが採用されてから、店の売り上げは三倍に伸びている。

　涼子がタイムカードに打刻し、エプロンをつけると、在庫チェック表を持った深見と目が合った。この店の店長だ。

「おはようございます」

　涼子が挨拶をすると、深見は「おはよう。ちょうど良かった。樋口さん、在庫チェックしてくれる？」と言った。

「いきなりですか？」

　三歳年上だが物腰の柔らかい深見に、涼子はいつも強気だった。とは言っても反抗しているわけではない。自分を受け入れてもらっているという信頼からの態度だった。

「僕、返品の箱詰めするからさ。こっちの方が嫌でしょ？」

　売れ残った雑誌の返品作業は力仕事だ。

「店長、腰は平気なんですか？　私、どちらでもいいですよ？」

　深見は一週間前にぎっくり腰を患っていた。そんな容態の人間に力仕事を任せて知らん振りすることなど涼子には出来ない。

「うん、大丈夫……とは言い切れないけど、在庫の方お願いするよ」

　深見は涼子に曖昧に笑って見せた。涼子はあまり納得がいかなかった。遠慮されるのが好きではないのだ。

「辛かったら言ってくださいよ？　腰痛は癖になりますから」

「ありがとう」

　深見は礼を言いながら、また、本音を隠した。

　在庫管理の日は一日それで終わる。返品の箱詰めを担当した方がレジも行う。

　涼子はふぅとため息をついた。涼子はあまり頭を使わない淡々とした作業が苦手だった。

　レジにいてどんな客がどんな本を選ぶのか観察し、分析結果でどんな本を多く仕入れた方がいいか考えている方が数段楽しい。棚の前で立ち読みしている客を観察しても正確な分析は出来ない。買うつもりのない本を手にしている場合が多いからだ。

　開店時間となり、ぽつぽつと客が入り始めた。涼子は客の邪魔にならないように棚から一歩離れ、並んでいる本とチェック表を見ながら在庫を確認していった。

　本がチェック表の順序通りに置かれているとは限らない。一冊だけ全く別のジャンルの棚に紛れていることもある。故に、何時間も棚と向き合う根気がいる。

「すみませーん……」

　涼子の背後から声がした。ざわざわした空気に混ざりこんでしまうくらいの囁き声だ。店内が静まった瞬間と重なったので、涼子はかろうじてその声を聞き取った。

誕生日２

「はい」

　涼子が振り向くと、そこに背広姿の道之が立っていた。外回りの仕事の時はたまに顔を出す。

「あ、道之だったんだ。変な声出すからお客さんかと思っちゃった」

「真面目に仕事してるじゃん」

　道之は普通の声量に戻した。

「当たり前よ。今日はどうしたの？」

「『最後の巨塔』って本、どこにある？　この前ドラマ化したヤツ」

「あっちの棚。売れてなければあるはず」

　涼子は隣の通路にある棚の方を指差した。本を探しにいくと、道之は彼女の後を付いてきた。

「ほら、あった」

　目星をつけていた棚の上段を端から追っていくと、右から六冊目にその本はあった。

　涼子は道之に言われた本を即座に探し当てて内心ホッとした。もたもたしているところなど道之には絶対に見られたくない。

　道之はいつも自分の周囲にいる仕事の出来る人間を褒め称える。しかし、深見に頼りにされるくらいの涼子でも、道之には褒められた事がない。本当に実力のある人間ではないと道之は褒めないのだ。

　涼子は常日頃からそのうちの一人として認めてもらいたいと思っていた。ただの大人しい従順な彼女では嫌なのだ。ただそれは、出逢った頃からそう思っていたのではない。付き合いが長くなるにつれて、彼が涼子に目立った関心を示さなくなってきてからのことだ。

「はい」

　涼子は棚から本を抜き出し、道之に差し出した。

「サンキュ」

　道之は本を受け取り、パラパラと捲った。涼子が本を探し当てたことへの評価はない。

「今日も店長に用事？」

　涼子が訊いた。

「うん、いる？」

　道之が来店する時は、涼子ではなく深見に会いに来る。約束もなしに彼女に会いに来るようなタイプではない。

　涼子と道之の付き合いは電話かメールがほとんどで、時間を取って会う事がままならない。

　滅多に会えない事を、涼子は正直、淋しく思っていた。だが、三年も経つといい加減慣れる。いや、甘えたい自分をひた隠しに出来るようになったと言った方が正解かもしれない。

　過去に一度、涼子は道之に対し、ほんの少しだけ感情をぶつけたことがあった。本当に、ほんの少しの我が侭だった。自分を出す事への恐怖に怯えながら、道之に違う側面を持った自分をわかってもらおうとした。

　だが、タイミングが悪かった。仕事でトラブルを抱え、疲れがピークに達していた道之は涼子を受け入れず、冷たく突き放し、困惑した。

　今、涼子の脳裏には、あの時の道之の表情がトラウマとなって焼き付いている。涼子は自分の負の感情に流されそうになる度、このことを思い出す。そして、もう一人の自分を閉じ込める。

　甘えさえしなければ、道之は穏やかで幸せな時間をくれる。精神的に寄り掛からない自分に、道之は優しくしてくれる。それだけで十分だ……。

　涼子は何かある度にそう考えるようになった。

誕生日３

「店長いるよ。呼んでこようか？」

　涼子はそう訊きつつ、体の向きを変えた。既に呼びに行くつもりでいる。

「いや、いいよ。行ってくる」

　道之は一歩踏み出した涼子の肩に手を置き、彼女の動きを制した。振り向いた涼子をこの場に残し、一人でレジの奥にある事務所に歩いていった。

　涼子は久しぶりに会った恋人の後姿をしばらく見送っていた。道之は大抵、深見に会うとそのまま店から出て行く。この瞬間が一番切ない。会わなければ抑えていられたのに、我慢している気持ちが溢れそうになる。

　涼子はいつも、堕ちていく気持ちに必死に耐える。

「仕事しなさいよ。ぼーっと突っ立ってないで」

　誰もいないはずの後ろから、涼子は小声で怒られた。驚いて振り向くとテンが立っていた。最初に現れた時と同じ、真っ白な出で立ちだ。

「テンちゃん、いつの間に？」

「今、来たのよ」

　目を丸くしている涼子が面白いのか、テンは悪戯っ子のように笑っている。

「今……って、どこから入ってきたの？」

　道之に気を取られていたとはいえ、出入り口に人が通る際、気付かないほど広い店ではない。

「ここ」

　テンは足元を指差した。

「ここって？」

　涼子は眉を潜める。

「今立ってるここ。アタシ、空間を移動できるのよ。リョコの家に行った時だって窓から入ったわけじゃないし。玄関の開いた音、しなかったでしょ？」

　テンの説明に涼子の思考は一時停止する。突っ込みどころは多々あるが、それにも疲れてきた。

「それで、何しに来たの？」

　テンの現実離れした話を聞き流し、涼子は話題を切り替えた。

「リョコがちゃんと仕事してるかなって」

「やめてよ、見張られてるの好きじゃない」

　涼子は束縛、干渉、抑制の類が嫌いだった。離婚してから気持ちは自由にはなれたが、子どもの安全を守り、生活を維持するという責任というものに常に束縛され、抑制されている。強い力に頼ることなく、自分の力で生きていかなければならない現状で、ただ干渉だけをしていく通りすがりの声に極度の反発を覚えるのだ。

　テンは涼子の心の動きには触れず、店の中をぐるりと見渡した後、彼女の後方に視点を定めた。

「あの男がリョコの彼氏ね」

　涼子が事務所に目を遣ると、深見と道之が並んで話をしているのが見えた。

「は？　奥にいるのは店長だよ？」

　再び詮索されるのが面倒だったので涼子はとぼけてみせた。

「誤魔化しても無駄だからね。さっき、後姿を切なそうに見てたくせに」

　そこから見られていたのかと、涼子は顔が熱くなるのを感じた。

「だから、何？」

　涼子は恥ずかしくなっている自分を隠す為、テンを睨みながら声を尖らせた。

「今日はもう一回こっちに来るわよ、彼」

　テンは涼子に耳打ちしながら事務所の方を顎で指した。

「有り得ないよ。いつも店長に会ったら即効で帰っちゃうし」

　涼子は片手を横に振りながら、自信たっぷりに否定した。

「でも今日は来るのよ」

　テンも自信たっぷりに断言する。そして、「リョコをデートに誘うから」と付け加えた。

「絶対、有り得ないって。そんなことがあったら逆立ちしてもいいわ」

　道之は仕事とプライベートをきっちり分けて考えるタイプだった。その上、知り合いのいる場で涼子との二人に関する話は極端に嫌がる。だから、仕事中でしかも友人である深見がいる前で、涼子を誘うなど考えられない事だった。

　だが、涼子が否定した直後にそれが起きた。

「見てみなさいよ」

　テンは涼子の肩を小刻みに数回叩き、振り返るよう促した。

「なに」

　大きな手でバンバン叩かれたように感じた涼子は仏頂面で答えた。

「うしろ」

　テンは、なかなか後ろを見ようとしない涼子の両肩を掴み、彼女の体をくるりと半回転させた。その涼子の目に信じがたい光景が映った。道之が涼子の方にまっすぐ歩いてくるのだ。

「ほら」

　テンが涼子を肘で突付いた。

「何か買おうと思った本があるのよ」

　涼子は軽くよろけながら、咄嗟に思いついたことを言った。自分に用があるとは到底思えない。

「アタシの力を見くびらないで。近い未来ならほぼ百パーセントわかるんだから」

「百パー？　すごい自信ね」

　涼子は反発した。近かろうが未来が見えるということは、未来が決められているということではないか。未来は今の積み重ねで、何かのきっかけで容易に変化すると考えている涼子は、冗談じゃない、と思った。

「アタシ、消えるね」

　涼子の嫌味に反応せず、テンは唐突に言うと姿を消した。一瞬のことだった。

「ちょっと！」

　涼子は直前までテンがいた空間に向かって叫んだ。咄嗟に天井や本棚の裏側を探したが影も形

もない。

誕生日５

「何やってんの？」

　そばまでやってきた道之が、挙動不審の涼子に声を掛けた。涼子は瞬間的にフリーズした後、道之の方に顔だけ向けた。

「ん？　なんかね、変なものがいたみたいだったから」

　涼子は笑顔を引きつらせながら言った。

「変なものって何だよ」

　道之は、涼子が先程まで送っていた視線の先を辿った。涼子はこっそりと道之の後ろから再度テンを探す。やはりいない。

「道之は何も見なかった？」

　恐る恐る道之に訊いた。

「うん、何も……って幽霊でもいたような口振りだな」

　道之に不思議そうな顔をされた涼子は、「そっか、そうかも」と、結論付けた。もちろん、実際には納得していない。

　テンがいなくなったのは、道之が涼子のところに向かって歩き始めてからだ。テンは涼子のすぐ後ろに立っていたのだから、前から来た道之の視界に入らないはずがない。しかし、道之には見えていない。

　涼子は、テンも幽霊も似たようなものだ、と心の中で思った。

「ところでさ、昼休み空いてる？」

　道之が涼子に訊いた。

「え？　うん。空いてるけど……」

　涼子はそう答えながらテンの予言を思い返した。

　リョコをデートに誘うから……。

　そんなことは絶対に有り得ない。涼子はテンと道之の言葉を重ね合わせ、期待し始めた自分を制した。

「昼休みって何時からだっけ」

　道之は話を進める。

「十二時からだけど」

　デートなんて、ない、ない……。

　涼子は心の中で否定し続ける。

「じゃあ、ランチしよ。今日、俺、ちょっと時間に余裕があるんだ」

　嘘……。

　涼子は絶句した。有り得ない事が起きた。テンの予言通り、道之から誘ってきた。

「なんだか嬉しそうじゃないね。やめとく？」

　呆然としている涼子に道之が言った。

「や、やめない。道之から誘ってくれるなんて珍しいからびっくりしちゃって……」

　涼子は慌てて言い訳をした。

「じゃあ十二時に。店の外にいるから」

　道之は軽く微笑むと店から出て行った。涼子はいつものように道之を見送りながら、いつもとは違う心境で立ち竦んでいた。

誕生日６

　ぼんやりしている涼子の隣りにテンが現れた。

「ほらね。言った通りになった。逆立ち決定」

　道之が店を出て行ったのと同時にテンが囁く。

「テンちゃん、そういう登場の仕方やめてよ。心臓に悪いわ」

　驚かされることで無駄なエネルギーを使う。いちいち疲れるので、涼子はテンに腹を立てながら忠告した。

「そんなおっかない顔しないでよ。美人が台無し」

　テンはさらっと涼子をなだめる。

「悪かったわね」

　涼子はもう一喝した後、「テンちゃんの姿って他の人には見えないの？」と訊いた。

「あのタイミングなら絶対、道之に見られてたはずよね。全く気が付いてないみたいだったけど。でも、ファミレスではウエイトレスさんに見られてたよね。何なの？　どうなってるの？」

　涼子は矢継ぎ早に質問した。テンは「興味があることには機関銃になるのね、あなた」と呟いた後、こう答えた。

「天使だからね。何でも操作できるのよ。自由自在」

　涼子は聞くだけ無駄だったと思いつつ、「とにかく道之には見えなかったってことね」と、今回の状況を把握した。

「デートに誘われて良かったじゃない」

　テンが話を元に戻した。

「デートって言ったってお昼一緒に食べるだけだよ？」

　涼子は極力、テンの前では浮かれまいとした。

「それってデートって言わないの？」

「だって、道之はランチなんて誰とだってするし」

　涼子は、道之の職場の同僚である沙耶のことを思い出していた。

　沙耶は涼子より一つ年上だ。道之は沙耶と一緒に組む事が多いのか、彼女と行動を共にする事が多い。涼子と会っている時でさえ、道之は沙耶と頻繁に連絡を取っている。電話が終わるのを黙って待っている涼子に、道之はその都度内容を説明した。あくまでも仕事上の付き合いだということを理解出来る。だが、どうしても聞きたくない言葉もある。

　あいつはいい相棒なんだ……。

　その言葉を聞く度、涼子の体から力が抜ける。自分には決して向けられない言葉だと気持ちが沈む。

　涼子は道之を信じている。だが、気持ちが穏やかでいられないのは、道之が沙耶の事を優秀な逸材として認め、頼っているからだ。涼子がなりたい立場を沙耶はいとも簡単に手に入れている。

「なんか、つっかかる言い方ね」

　胸に痞えていることを吐き出せずにいる涼子にテンが言った。

「そんなことないよ」

　涼子は言い捨てる。

「ランチから帰ってきたら心境変ってると思うけどね」

　テンがまた、予言めいたことを言った。

「どういうこと？」

「幸せー、みたいな」

「そんなことあるわけないよ」

　道之の言動次第で、涼子は確かにそういう心境になることもある。が、一喜した後には必ず一憂が待っている。一喜した後の一憂は、上り詰めた分、かなりのダメージを伴う。

「まあまあ。気楽にね。笑顔、笑顔」

　テンに笑えと言われ、涼子はますます仏頂面になった。

誕生日７

　在庫管理を半分終えたところで昼になった。涼子は少しばかり憂鬱だった。道之と会う時はいつもそうだ。会える嬉しさが大半を占めている中、ほんの少しの不安がどうしても拭えない。心を乱す話題が出ないよう、つい祈ってしまう。

「時間よ、頑張って！」

　テンがまた涼子の横に立った。出たり消えたり好き放題だ。

「彼に会うのにどうして頑張らなくちゃいけないのよ。ご飯食べたらさっさと帰ってくるわ」

　そのくらいドライでいないと道之とは付き合えない。涼子は神経をピンと張り詰める。

「わかった、それでいいわ。でも穏やかに、にこやかにね」

「私はいつでも穏やかです！」

「はいはい。言葉と態度、統一しようね」

「いちいちむかつくなぁ」

「女の子は感情で生きてるから大変ね」

「うるさい！」

　目つきがどんどん険しくなっていく涼子の顔の前に、テンは手の平をかざした。涼子は瞬間的に眠気に襲われたが、すぐに意識を戻した。気持ちがすっと軽くなり、余計な力が入っていた体が楽になった。

「いってらっしゃい」

「うん、行ってくる」

　微笑んでいるテンに、涼子は素直に呟いた。

　涼子が従業員用出入口から出ると、道之は店の前に設置してある子ども向けのガチャガチャを覗き込んでいた。

「ごめん、待った？」

　涼子が声を掛けると、道之は曲げていた腰を伸ばした。

「俺も今来たとこ。涼子、食いたいものある？」

「うーん」

　涼子は近場の料理店で食べられる物は何か、頭をフル回転させて考えた。

　道之には「何でもいいは無しね」と事あるごとに言われている。その割に道之が決める事が多いし、食べ物に関して好き嫌いのない涼子は「何でもいい」と言いたいところなのだ。だが、その返答では優柔不断だし、言われる側に立つと困ってしまうのもわかる。

「時間ないし、遠くに行けないからハンバーグでいいか」

　涼子が考え込んだ一瞬の隙に道之が言った。道之が求めるスピードに今日も追いつかなかった。

「そこにカントリーハウスがあるよ」

　涼子は書店から目と鼻の先にある店を指差した。

「うん、そこ行こう。けっこう旨いもんな」

　行き先が決まると道之は早々に歩き出した。

誕生日８

「行ったことあるの？」

　涼子が訊いた。

「別のところでね」

　カントリーハウスはチェーン店なのでところどころで見かける。涼子はこの店の存在を知ってはいたが、そばまで来たのは初めてだった。

　ログハウス風の店で、壁に沿って花壇のような杭が埋め込まれ、そこに大型の大工道具が装飾品としてゴロゴロと置いてある。遊び心が刺激されるような造りなので、一見テーマパークのアトラクションを思わせた。

　店の自動ドアを開くと、入ってすぐの所に受付の機械が設置されていた。道之の斜め後ろから機械を覗き込むと、来客の人数別に禁煙席、喫煙席に分かれたボタンが三つずつあった。

「喫煙席二名、と」

　道之は迷わず喫煙席のボタンを押した。

　道之はかなりのヘビースモーカーだ。値上げされようとタバコは絶対に止めないと豪語している。道之によると、タバコはリラックス出来るし、知らない者同士のコミュニケーションのきっかけにもなるので、決して百害あっても一利なしではないと言う。もちろんマナーを守った上での話だ。

「喫煙席ご希望の二名様」

　ウエイターが出てきて、待っている客に声を掛けた。涼子達は一番最後に来店したので自分が呼ばれたのではないと思った。

「喫煙席が空いておりますので、先にご案内させていただきます」

　他の客は腰を上げようとしない。禁煙席を希望しているらしい。

「俺達か」

　道之の言葉に頷きながら、涼子は先を越された客を横目でちらりと見た。明らかに機嫌が悪い。嫌煙している人にしたら、空腹の上、喫煙者が優先されたら面白くはないだろう。

　ウエイターに案内されて着いた席は、テーブルとテーブルの間に天井まで届いている木の仕切りのあり、他からの視線をあまり感じなくて済む造りだった。唯一、通路を挟んだ向かい側の席だけは丸見えで、それが惜しいなと涼子は思った。

「お嬢さん、何にしますか？」

　道之がテーブルの端に立ててある木の板にメニューを見ながら言った。お嬢さんと言われ、涼子はお姫様扱いされているような気になりながら、澄ました顔でメニューを覗き込んだ。パウチされた日替わりランチが差し込んであったので、涼子は火曜日の欄を見た。

「今日は、ハンバーグとエビフライが日替わりランチだね」

　道之が涼子の視線を辿って声に出した。

「そうだね」

　エビフライの気分ではなかった涼子は気のない返事をした。しかし、ランチにした方がライスもスープも付いて格安だ。
「おろしハンバーグにしたいんだろ？」

　おろしは毎度注文するメニューなので、道之は涼子の躊躇いを見抜いていた。

誕生日９

「昨日も食べたばかりなんだよね」

　何の気なしに涼子が言った。

「昨日も外食したの？」

　道之がすかさず突付いた。

「え？　どうして？」

　普通に肯定すればいいものを、涼子はつい、疑問形で返してしまった。誰と食事したのか聞かれたらどうしようという戸惑いの方が先に立ったのだ。天使と一緒だったなどと言ったら頭がおかしくなったんじゃないかと思われそうだし、友達と食べたと嘘をつくのも嫌だった。

「家じゃ作んないだろ？　七海ちゃん、おろし好きじゃないからって」

「あ、そうか」

「ま、いいけどね」

　涼子の答えになっていない答えを、道之は深く追及しなかった。

「今日もおろしにする」

　涼子が言うと、道之は「俺もそれにしようかな」と言って、テーブルに置いてあった呼び鈴を押した。すぐにウエイトレスがやって来た。

「おろしハンバーグセット二つ。一つは御飯大盛りで。飲み物は……」

　セットには飲み物が付いている。何を飲むか聞いていなかった事に、オーダーしながら気付いた道之が涼子をちらりと見た。

「アイスコーヒー」

　あらかじめ決めていた涼子は道之に小声で答えた。すると道之は、「それ二つ」と付け足した。

ウエイトレスがいなくなった直後、道之が「あっ」と突然何かを思い出した。

「そういや、今日、涼子の誕生日だろ。ケーキも頼もうか。何がいい？」

道之はケーキメニューを涼子に差し出した。これもパウチされたものだ。

「覚えててくれたんだ」

涼子の顔が途端にほころぶ。

「ホントはゆっくり飲みにでも行ければよかったんだけど」

「ううん、覚えててくれただけで嬉しい」

仕事の事でいっぱいの道之の頭の中に、自分の誕生日がインプットされ続けているだけでも奇跡だ。涼子はそう思いながら、七種類あるうちの一つを指差した。

「ショートじゃないんだ？」

意外そうに道之が訊く。

「うん、生クリームは捨てがたいんだけど、今日はモンブランな気持ち」

いつもとは違った気分が、いつもの嗜好を変える。

「なんだ？　そのモンブランな気持ちって」

キョトンとした道之に、涼子はニターッと笑ってみせた。

「俺がショートにして半分こしようか。本当は生クリームもちょっと食べたいだろ？」

道之は時々、女の子のようなことをする。

以前、涼子の家で飲んだ時、それぞれの好みで買った数種類のビールや缶チューハイを、一缶空ける度すべてコップに半分ずつ分けた。買う時には「俺はこれ」と拘っていたにも関わらずだ。涼子の了解は取らない。今日は珍しく聞いてきたが、涼子が頷くのを見越している。

「うん！」

　涼子は声を弾ませた。道之と一つの物を分け合う時、涼子は二人の距離の近さを感じる。道之が自ら半分ずつにする行為が、自分への安心感の表れだと勝手に思っているからだ。

誕生日１０

　道之は通り掛った別のウエイトレスを呼び止めた。

「追加お願いします。モンブランとショートケーキ」

「かしこまりました。いつお持ちしますか？」

　ウエイトレスは笑顔で答える。

「食後で」

　道之がオーダーしている間、涼子はずっとニタニタしていた。

「嬉しそうな顔しちゃって」

　ウエイトレスがいなくなった後、道之が涼子をからかった。涼子は照れながら、声を上げて笑った。

　料理を待つ間、二人でタバコに火を点ける。仕事の合間の一服は、気を緩めるのに丁度いい。

「ちょっと考えてたんだけどさ。今度旅行に行かない？　七海ちゃんと三人で」

　にやけた顔が戻らない涼子に道之が言った。

「え？　何？」

　思いも寄らない提案だった。涼子は道之の言葉を聞き取っていたものの、自分の耳を疑った。

「旅行、行こうよ。三人で」

　道之が短く繰り返す。

「旅行？　行きたい！　でもそんな時間取れるの？」

　涼子は喜んでみたものの、すぐに悲観的になった。旅行となれば二連休は取らなければならない。日頃の道之のスケジュールからして不可能と考える方が容易なのだ。

「来月の三週目なら少し時間が取れそうなんだ。涼子は仕事、休めそう？」

　道之は具体的な日程を告げた。いつと限定する時は、彼の中で既に旅の行程が出来ている。言葉では曖昧な表現を使っても、実行できると確信したことでないと道之は口にしない。涼子の不安は即座に解消された。

「シフト組むのがこれからだから大丈夫だと思う」

　浮き足立ちそうなのを抑えながら涼子が答える。

「じゃあ、決まりな。寒いから温泉行こう」

「うん」

　日頃の淋しさを一掃させる話題に、涼子の胸は躍った。運ばれてきたおろしハンバーグが特別な物に見える。誕生日に道之と会う事すら奇跡的なのに、年明け早々の楽しみまで与えてもらった。涼子は日頃の行いを神様に評価してもらえた気分だった。

　食事を終え、涼子は携帯の時計を見た。休憩終了十分前。その時、ケーキが運ばれてきた。

「そのモンブラン、美味そうだな」

　涼子の前に置かれたケーキを見て、道之が言った。

「半分に切るよ」

　涼子はそう言いながら、まずは自分のモンブランをフォークでぐさりとさした。すると、ケーキのてっぺんでくるくると巻かれていたマロンクリームが崩れ落ちた。

「あーあ、涼子はホントに不器用だよな」

　道之は自分のショートケーキをキレイに二等分しながら言った。片方を涼子の皿に移すと、空いたスペースにぐずぐずのモンブランのおよそ半量を、フォークで寄せながら取った。

「うー、ごめん」

　謝りつつも涼子は笑みを零す。けなされようが、道之が自分に関心を向けてくれている事が嬉

しいのだ。

「とにかく、誕生日おめでとう」

　挨拶でも交わすように、道之はさりげなく涼子を祝う。

「ありがとう」

　道之にトーンを合わせ、涼子もさりげなく礼を言う。

　二人で残り少ないアイスコーヒーのグラスを鳴らす。涼子にとって久しぶりに心が満たされたひとときだった。

誕生日１１

　七海が寝入った十一時過ぎ。涼子は炬燵で熱いお茶を啜りながら、道之と過ごした時間の余韻に浸っていた。テンが言った通りだと思うとしゃくだが、本当に「幸せ」な気持ちでいっぱいだった。

「やほ」

　テンが姿を現した。涼子の斜め右前に膝を抱えた恰好で座っている。涼子はびっくりして身を縮込ませた拍子に、持っていた湯のみを落としそうになった。

「テンちゃん、そういう登場の仕方しか出来ないわけ？」

「最短距離で登場するとこうなるのよ。脅かすつもりはないんだけど」

　テンが肩を竦める。

「最短距離じゃなくていいから、玄関から入ってくるとかしてくれない？」

　涼子は顎で玄関を指し、「タンスの横とかでもなくてね」と付け足した。

「めんどくさい」

　テンは一言で却下する。

「めんどくさい、じゃなくて。私があなたのせいで心臓麻痺で死んでもいいわけ？　天使としてまずいんじゃないの？」

「アタシのせいで死んだら、生き返らせるから平気よ」

「また、いい加減な事言って」

　涼子はテンの言う特殊な能力をとことん信じない。

「まあ、涼子が驚かなければいいことよ」

「毎回あんな風に出てこられたら誰だって驚くわよ」

「いい加減、慣れない？」

「慣れません！」

　テンに何を言っても埒が明かない。涼子は憤然としながら台所に立った。

「テンちゃんもお茶でいい？」

　テンをお客とは思っていない涼子だったが、自分のお茶だけ入れ直すのは気が引ける。だが、気を遣った涼子の神経を逆撫でするようなことをテンが口走った。

「アタシ、コーヒーがいいなぁ。ちゃんと豆から挽いた奴」

「はぁ？」

　涼子は呆れた声を出しながら振り返った。

「こんな時間に豆なんか挽けないよ」

　七海が寝ているのに、コーヒーミルでガーガーと音を立てることには抵抗がある。

「お客の希望も聞けないの？」

　悪びれずテンが言う。

「テンちゃん、お客じゃないし」

　涼子は言うまいとしていたことを口にする。

「あら、ひどい」

　テンは傷ついたように拗ねてみせる。

「もう……どうしてもっていうんなら挽くけど」

　涼子はむくれた声を出し、コーヒーミルを持って玄関から出て行こうとした。玄関ドアの向こうでなら、少なくとも七海を起こすことにはならない。

「ウソウソ、冗談だってば。リョコは真面目なんだから」

　テンは涼子のそばに駆け寄り、手からコーヒーミルを奪った。

「冗談に聞こえないわよ」

　手が空になった涼子は、更に不機嫌になりながら客用の湯飲みを食器棚から出した。テンはそれも取り上げる。台所に涼子を残し、炬燵から彼女の湯のみを持ってくると、調理台に二つ並べた。

「アタシが最高のお茶を入れてあげる」

　テンはそう言うと、急須に入っていた古い茶葉をシンクの三角コーナーに捨てた。調理台に置いてあった茶筒を手に取り、開けた蓋に新しい茶葉を適量入れる。急須に茶葉を移し変えた後、湯飲みの方にポットのお湯を注いだ。

「湯飲みは温めておかないとね。冷たい器だと一気にお茶が冷めちゃうから」

　テンはそう説明しながら湯飲みが温まるのを待った。

「もういいかな」

　両手で湯飲みを包み込み、温まり具合を確かめると、湯飲みの中の湯を急須に入れた。「旨みが出るから少しこのまま置いとくの」と言って、静かに時をやり過ごす。じっと二人して黙ったまま……二分くらい経った頃、テンはそれを二つの湯飲みに交互に注ぎ分けた。

「炬燵に行こう」

　テンは湯飲みを二つ持ち、居間に移動した。涼子も後を追い、先程座っていた位置に二人で納まった。

誕生日１２

「リョコ、彼に旅行に誘われたでしょ」

　お茶を一口啜った涼子に向かって、テンが口火を切った。

「もう知ってるの？」

　テンに見透かされて、涼子は怒るどころかゆっくりと頬を緩ませた。道之とのやりとりが蘇る。
　ところが、機嫌を良くしている涼子にテンは冷たく言い放った。

「実行されないよ」

「変なこと言わないでよ。彼は適当な約束をする人じゃないんだから。出来ない事は出来ないってはっきり言うし」

　涼子はむきになる。

「それが今度ばかりは違うのよね」

「何を根拠に」

「アタシは近い未来が見えちゃうって言ったでしょ？」

　テンは少し嘘をついた。数分後の未来が見えるのは本当だが、その先を自分の予言通りにするとなると思念で操作しなければならない。つまり、テンは未来透視ではなく、未来操作をしようとしていた。

　それを涼子に伏せたまま、「彼、予定外の仕事が入るから、今以上に忙しくなって旅行どころじゃなくなるのよ」と、言い放った。

「そんな……」

　涼子は書店での一件を思い出した。いつもならば店長に顔を見せた後、すぐに帰ってしまうはずの道之が自分を誘いに戻ってきた。想定外のことでもテンには分かってしまう。

　旅行が実行されないというのも起こりうることなのか……。

[illegible]。

　涼子の顔から笑みが消えた。

「行けなくなったっていう連絡すらよこさないわよ。仕事で手一杯になるから」

　テンはこれから自分が操作しようとしている未来を淡々と告げた。

　道之の悪い面をクローズアップすれば、彼に幻滅した涼子が他に目を向ける、テンはそう目論んでいた。昼休みに二人が会うのを黙って見過ごしたのは、道之に旅行の話をさせる為だ。この話が出てこない限り、有頂天になった涼子を落胆させる事が出来ない。

　すべては涼子の気を道之から逸らし、願い事を恋愛関係以外の事に変更させる為のテンの作戦だった。

「それより、作家になる夢はどうしたの？　昔は一生懸命書いてたのに」

　テンは、彼女の過去の夢を持ち出した。

「そんな事もわかるの？」

　涼子は不意を突かれた。

「書きかけのお話もたくさんあるじゃない。最後まで書いて見直すだけの原稿も」

　涼子のパソコンのファイルには、文学賞に応募せずお蔵入りさせた作品がある。最後まで書き上げたものの、見直しをする段階で作業が出来なくなったものだ。元夫との一件がそうさせた。それ以来、ファイルを開いていない。

「もったいないじゃない。長編の小説なんて誰にでも書けるもんじゃないわよ。才能よ、才能」

　才能かどうかはわからない。でも涼子は、好奇心に任せていろいろなことに取り組んできた中で、執筆には異様な集中力を発揮出来た。

　文字を綴り始めると、周囲の雑音は消え、自分の視野に入らない景色は絵画のごとく動きを止める。それを才能と呼ぶのなら、涼子には小説を書くためのそれが本当にあるのかもしれない。それでも涼子はテンに向かって否定した。

「今は書いてる余裕がないの。仕事しながら家事やったら、それだけで一日終わっちゃうんだから」

「七海ちゃんとテレビ見てる時間は？」

「テレビ見ながら七海と会話してるの。子どもと向き合う時間だって必要でしょ？」

「こうしてお茶飲んでる暇はあるじゃない」

「リセットする時間、持っちゃいけない？　一人になってのんびりする時間も欲しいわよ」

　涼子の口調がだんだん険しくなってくる。

「少しくらい……」

　もう一言、テンが口を挟もうとしたのを涼子は最後まで聞くことなく遮った。

「作家になる夢は母子家庭になった時点で諦めたの。今更そんなこと、ほじくり返さないで欲しいわ」

　自分で放った「諦める」という言葉が涼子の胸に突き刺さる。それを振り払うかのように、涼子はテンを睨み付けた。

　テンはじっと涼子を見据えた後、「なんだかもったいないわね」と、言った。

「何がもったいないのよ」

「せっかく恵まれたものを持ってるのに、状況のせいにしてるから」

「状況のせいになんかしてないわよ。自分の意志で決めたの」

「そうには思えないけどね」

　テンは冷たく答えながらも、涼子の反応に核心を掴んだ手応えを感じていた。

障害１

　次の日、昼休みを取っていた涼子の元に、道之からメールが来た。今夜、旅行の資料を持って家に来るという。夕べからテンの予言が頭から離れない涼子だったが、メールの受信によって不安は一掃された。

　二日続けて道之の顔を見られる。有り得ないことが立て続けに起きている。普段感情を押し殺している分、涼子は嬉しさを隠し切れない。

　終業一時間前から「あと、何分……」と、進みの遅い時計をちらちらと見たり、店内をうろうろしては綺麗に整っている棚の整理をしたりした。そして、五時。仕事を終えた涼子は挨拶もそこそこに書店を出た。

「地に足を付けなさいね」

　帰路についた涼子の後ろからテンが忠告した。

「どういう意味？」

　早足で歩きながら、涼子は顔だけテンに向けた。テンが突然現れても、今日の涼子は気にならない。

「浮かれるなってことよ」

「私のどこが浮かれてるのよ」

「自分の夢を追う時間はないくせに、男に裂く時間はあるじゃない」

「またそれ？」

　妙に突っかかってくるテンに涼子は苛立ってきた。

「ガッカリしないように、今のうちに心を落ち着けといた方がいいって言ってるのよ」

　テンは追い討ちをかける。

「大丈夫です。私はいつでも冷静ですから」

　涼子はそう言い放ち、足を速めた。だが、テンの歩幅に勝てるはずがない。テンは涼子の前に回りこんで道をふさいだ。

「ホントよ。彼に悪気はなくても、あなた達の間には厚い壁があるから」

「どういうこと？」

　足止めを食らった涼子は険しい顔をした。

「何かしようとすると、障害が起きてくるの」

「障害？」

「そう、旅行どころじゃない障害が」

「でも、道之から言ってきたんだよ？　彼が言い出す時は実行出来る確信がある時だけだし」

　現に今日、道之からメールが来ている。旅行の話は前に進んでいる。

「彼がその気でも周りがそうさせないわよ」

　テンは断言する。

「何を根拠にそういうことが言えるわけ？　もう邪魔しないで」

　理解不能なことばかり言うテンを涼子は片手で横に追いやり、道を開けさせた。

「まあ、落ち込んだら慰めてあげるから」

　涼子の背中に向かって投げられたテンの言葉は、彼女の反発心を煽るだけだった。怒り心頭に発した涼子は振り向きざま、「うるさい！　どっかに行ってよ！」と叫んだ。だが、そうするまでもなく、テンは既に姿を消していた。

障害２

　自宅に戻った涼子はドアを開けて中に入り、隙間から外の様子を伺ってからドアを閉めた。鍵とチェーンで厳重にロックして、冷静でいたらすぐに気づいた事を思い出し、またもや憤然とした。

　アイツに鍵は関係ないんだっけ……。

　どこからでも入ってくるテンには対処のしようがない。

「テンちゃん！　彼がいる間に出てきたりなんかしないでね！」

　涼子はどこかで聞いているであろうテンに向かって抗議した。

「お母さん、何か言った？」

　居間から七海が出てきた。

「帰ってたの？」

　涼子は動揺しながら訊いた。

「うん、さっき帰ってきた。誰かいたの？」

「ううん、電話。携帯で話してたの」

　涼子はカバンから携帯を取り出しながら七海に示した。

「ふーん」

　七海は不可解な顔をしている。

「あ、そうだ。今日、瀬川さんがくるからね」

　道之の苗字は瀬川という。

「何しに？」

「ふふーん、お楽しみ。七海にとっても嬉しい事よ」

　涼子は笑ってみせる。

「何？　気になるー」

「まあまあ。それより夕飯の支度手伝って。今日は三人で食べるから」

　詳細を隠されて、七海は不満気だった。が、久しぶりに見る母親の嬉しそうな表情に、何か楽しい事が起きるのだろうということは容易に想像できた。冷蔵庫を開けてウキウキしている涼子の隣に立ち、「何を作るの？」と訊く。

「麻婆豆腐。それとナスがあるからジャコと一緒に炒めて梅ドレッシング和えと……他に何にしようか」

　腕によりを掛けたい涼子は、買い足して間もない材料をありったけ使って料理しようと思っていた。

「ポテトサラダとウインナー。私、作る！」

　七海は幼稚園の頃から包丁を持っているのでりっぱなアシスタントだ。

「あとはご飯と味噌汁だね。よし、パッパと作っちゃおう」

　献立さえ決まってしまえば作るのは訳ない。一時間もしないうちに予定の料理は出来上がった。
　それらの様子をテンは姿を消して見ていた。涼子が帰宅した時、テンは家の中で彼女を出迎えていた。そうとは知らない涼子が鍵を閉めながら怒っていたのも知っている。

　居間のテーブルに料理を盛り付けた皿を並べ、道之を迎え入れる準備が整った。

「道之、電車で来るかなぁ」

　一息つこうと、居間に腰を下ろした涼子が呟いた。

「どうして？」

　七海も涼子に合わせ、斜め左隣に腰を下ろした。

「せっかくだから飲みたいじゃない」

「何を？」

「何を？　ってビールよ」

「寒いのに？」

「七海だって寒い日に冷たいジュース飲むでしょうが」

「飲まないよ、おなか壊すもん」

　そう言い切る七海は時々際限なくジュースを飲み、下痢をする。その次の日は確かに飲まないが、辛かった事は過ぎ去ると忘れるのが子どもで、それは七海も例に漏れない。涼子の目を盗み、ちょこちょことコップに注いでは飲む。

　ああ言えばこう言う七海に涼子は、「そう」と聞き流す。

障害３

「瀬川さん、今日も仕事？」

　七海が話題を変えた。

「そうじゃない？」

　そう答えたものの、涼子は道之に今日の予定をはっきりと聞いているわけではなかった。

　道之から話さない限り、涼子は彼に細かいスケジュールを聞かない。涼子と同様、道之が詮索されることを嫌がるというのもあるが、涼子自身、知りたくなかった不安材料を手に入れてしまうことを恐れている。

「何時に来るの？」

　曖昧な返事をした涼子に七海は質問を続ける。

「七時頃かな。でもわからない」

　七海は壁に掛けられた時計を見た。あと数分で七時になる。

「わからないって、会うのに時間決めないの？」

　友達との約束に時間設定は不可欠な七海は不思議がる。

「慌てなさんな。プライベートまで時間に縛られてたら窮屈でしょ。それに待ってる時が一番ワクワクするんだから。楽しまなきゃ」

「そういうもん？」

「そういうもんよ」

　七海には楽しめと言いつつ、道之を待っている時間はいつも落ち着かないものだった。これから会える嬉しさでそわそわするのはもちろんだが、仕事で来られなくなる可能性もあり、道之の顔を見るまではとても穏やかではいられない。

　娘に向けていた涼子のポーカーフェイスが限界になりそうな頃、チャイムが鳴った。

「あ！　来た！」

　反射的に玄関に飛び出したのは七海だった。

「こんばんはぁ！」

　ドアを開けながら七海が道之に威勢良く挨拶する。七海は、会えば遊んでくれる道之のことが大好きだった。

「こんばんは。七海ちゃん、相変わらず元気だね」

　道之も七海に調子を合わせ、声のトーンを上げる。

　涼子は居間で二人のやり取りを聞いていた。飛び出していきたい気持ちを抑え、ゆっくりと立ち上がり、玄関に向かう。

「いらっしゃい。どうぞ、上がって」

　七海の頭越しに、涼子は平静を装いながら道之を招いた。

「ご飯、出来てるよ！　私がポテトサラダ作ったの」

　七海がはしゃぐ。

「俺の好きなもの作ってくれたんだぁ。さすが、七海ちゃん」

　道之は子どもの扱いを心得ている。

「ビール、飲む？　車じゃないよね？」

　涼子は道之のコートと背広の上着を受け取り、ハンガーに掛けながら訊いた。

「うん、電車で来たよ」

　道之がそう答えると、七海がすかさず「良かったねー、お母さん。一緒に飲みたかったんだよね？」と、言った。

「余計な事言わないでよ」

　涼子は顔を熱くしながら七海を制する。

「ホントの事言って何が悪いんだよなぁ？」

　道之は七海をかばう。涼子は唇を尖らせて二人を見た後、ふっと可笑しくなって幸せなため息をついた。

「資料っていうか、ネットで良さそうなプラン見つけてプリントアウトしてきたんだ。これ、見てみ」

　道之は二枚に渡って印刷されたものを差し出した。

「どれどれ」

　冷蔵庫から缶ビールを出してきた涼子は、それと引き換えに資料を受け取った。

「どれどれ」

　七海も調子を合わせ、涼子にぴたりとへばりついて母親の手元を覗き込む。

「瀬波温泉って……新潟じゃない！」

　近場と聞いていた涼子は素っ頓狂な声を出した。

「海に行きたいって言ってたろ？　太平洋は日帰りでも行けるから、どうせだったら日本海を見に行くかなと思って」

　道之はあくまでも冷静に説明する。

「日本海は魅力的だけど大変じゃない？　せっかくの休日に疲れちゃったら仕事に差し支えるよ」

　自分が関係することで道之を疲れさせたくはない。涼子は常にそう思っていた。

「東京駅から新幹線で三時間だから、車で伊豆とかに行くのと変らないって。大丈夫だよ」

「私、日本海に行きたーい」

　距離感も日本海がどこにあるのかも知らない七海が大人の会話に横入りしてくる。

「ほら、七海ちゃんもそう言ってるし」

「ホントにいいの？」

地図上で日本海が遠い場所と認識している涼子は手放しに喜べない。

「嫌じゃなければね」

頭の中で旅行行程を組み立て済みの道之は動じない。

涼子はもう一度、資料に視線を落とした。そこに載せられた写真には、海に沈みかけた夕日が橙の光の輪を描きながら、周りの空を薄紫色に染めている風景があった。

「嫌じゃないよ。こんな夕暮れの景色、見てみたい」

「じゃあ決まりね」

道之が即答する。涼子は遠慮がちに微笑んだ。

「もう食べようよ。お腹空いた」

話は済んだと決めつけた七海が、まだ迷いを消し切れない母親に言った。

潔いというか、少々ずうずうしい娘に閉口しながら、子どもに思い出の一つも作ってやれない罪悪感も手伝って、この際、道之に甘えてしまうのもいいのかもと、涼子も気持ちに整理をつけた。

「そうだね、食べよっか」

涼子がそう言って箸を取ったその時だった。道之の頭上にキラリと光る輪が現れた。

涼子は初め、気のせいか何かが反射しているのだと思った。だが、光の輪は徐々にはっきりとした輪郭を現し、気のせいでは済まされない存在感で道之の頭上に鎮座した。

涼子は咄嗟に七海を見た。これだけ尋常ではないものが光っていれば目に入るはずだ。だが、七海はそ知らぬ顔をしている。彼女には見えていないようだ。

「あ、沙耶だ。ちょっと待ってね」

道之の携帯が鳴った。道之は手に取った箸をデーブルに置いて電話に出た。それと同時に光の輪

は残像だけ残して消えた。

「うん、それはさ……」

　道之のテキパキとした指示が部屋に響き渡る。

　二人でいる時に仕事の電話が掛かってくると、涼子はいつも声を潜める。会話の邪魔をしないようにする為と、道之の電話の相手に自分といる事を悟らせないためだ。隠したいのではない。商談中に彼が女性といる事を悟られると、彼が相手にあまりいい印象を持たれないのではないかと思うからだ。

　沙耶は客ではないのでそれほど気を遣う必要もないとは思うものの、なんとなく気が引けて黙ってしまう。七海も子どもながらに空気を読んでいる。待っている間、涼子が七海に目配せすると、七海は口に人差し指を当てて『静かに』と声を出さずに口を動かした。

「うん、うん……」

　道之が相槌を打つだけの会話が続いている。涼子と道之の貴重な時間が割かれていく。涼子の心はざわめき始めていた。

「え？　どういうこと？　それはまずいね。どうしよう、今、夕飯を招かれて人のうちにいるんだ」

　何かトラブルでもあったのか、道之は深刻そうな顔をした。

「沙耶、何とか出来ない？　おまえならうまく対処できるだろ」

　道之は仕事より涼子との時間を優先している。涼子にとって嬉しいはずなのだが、沙耶に向けた道之の言葉に、彼女の胸はちくりと痛んだ。

　道之は沙耶の事を信頼している。ただ一緒に仕事をしているというだけでなく、同等の能力を持つものとして道之は彼女を認めている。正に涼子が欲しているポジションだった。

「相手先に一日待ってもらうように言って、そっちを優先してみてよ」

　道之は具体的な指示を沙耶に出している。

「うん。ああ、そっかぁ……」

沙耶の説明に道之の表情が徐々に険しくなっていく。話が長くなるにつれ、相槌を打たずに傾聴し始めた。

「わかった。待ってて」

道之は電話を切るや否や、涼子に手を合わせた。

「どうしたの？」

聞かなくても想像できた事態を涼子はあえて聞いた。黙っていたら動揺している自分を諸にさらけ出してしまう。

「ごめん！　緊急事態。俺が行かないと収拾つかないみたい」

道之は申し訳なさそうにするも、心は既に職場に飛んでいる。

「大変じゃない、早く行かなきゃ」

涼子は落胆する自分を見せまいと、声に張りを持たせた。

「俺が仕事から上がってるのに連絡してくるってことはよっぽどなんだよ。俺に頼らなくても自分でどんどん仕事進めちゃう奴だから」

道之は立ち上がり、壁に掛けてあった上着とコートをハンガーから外した。事態の説明は涼子にとって聞きたくない情報になりつつある。

「仕事が出来る人なんだね」

涼子の心の糸が張り詰める。

「そう。男みたい。いや、そこらの男より使える。いい相棒だよ」

　道之は心なし嬉しそうな顔をする。涼子も軽く微笑む。引きつった頬を隠すために。

「食事、せっかく作ってくれたのに余らせちゃうな」

　靴を履きながら、道之が言った。

「タッパーに詰めて持っていきたいところだけど、食べる時間がなかったら腐らせちゃうし」

　付け足された道之の言葉に、タッパーを取りに台所に立ちかけた涼子の動きが止まる。

「いいよ、気にしないで。七海と食べて、余ったら明日のおかずにするから」

「ホントにごめん」

　道之は慌しく玄関から出て行った。涼子はドアを開けたまま、道之の姿を見えなくなるまで見送った。

「あーあ、ポテトサラダ、瀬川さんのために作ったのになぁ」

　七海がふてくされた声を出した。

「仕方ないよ、仕事だもん。ここに来れただけで奇跡なんだから」

　涼子は力なくパタンと扉を閉めた。七海を諭しながら、自分にも言い聞かせる。

　普段と何も変らなくなった食卓に、普段より少し豪華な夕食が並んでいる。七海はマイペースにいつも食べる量だけを平らげた。

　すっかり食べる気が失せた涼子は、七海の手前、食べている振り程度に料理を口に運んだ。その為、すべての皿にそれぞれ半分くらいずつ料理が残された。涼子は、先程まで道之が座っていた場所に視線を送り、気持ちを立て直そうとする。が、いつになく高揚してしまった分、立ち直れずにいた。

　涼子は意気消沈したまま、食べ残した料理を台所に運び始める。

「アタシの言った通りになりそうね」

　テンがシンクに寄りかかり、腕を組んで立っていた。

「ちょっと！　七海がいるのよ」

　涼子はいきり立ち、居間にいる七海を指差した。娘がいる時にテンが現れたのは初めてだ。

「大丈夫。彼女にうちらの会話は聞こえないようにしてあるから」

　テンは涼しい顔をしている。

「姿は？　そこからじゃ七海に丸見えよ！」

「あなた以外にアタシは見えないから大丈夫」

　涼子が七海の方を覗き見ると、彼女はテレビに夢中になっていた。七海には気付かれていないとわかると、涼子はテンを睨みつけた。

「さっきのは何？」

　涼子は憮然として言った。

「ん？」

　テンは何を聞かれたのかわからない。

「『アタシの言った通り』って」

「ああ、それはね、言った通り障害が起きたでしょってこと」

「障害なんて起きてないわよ」

　仕事の電話が障害だったとすればそうかもしれないが、涼子は意地で否定した。

「そう？」

　テンは余裕で聞き返す。

「何かある？」

　涼子は憮然と言い返す。

「旅行よ。話を始めた途端に邪魔が入ったでしょう」

「見てたの？」

「うん、ずっとね。涼子が家に帰ってきてから」

　涼子はここで初めて、最初からテンが家にいたことに気付いた。

「この調子じゃ計画倒れで終わるわね」

　テンは涼子の神経を逆撫でする。

「どうしてよ。仕事が入って具体的な話まで出来なかっただけじゃない」

　向きになる涼子に、「この先もいろいろあるわよ」と、テンは更に不安を煽った。

「変なこと言わないくれる？　たかが一回、スムーズに事が運ばなかったくらいでそんな事言われちゃたまんないわ」

「一回で済めばいいけどね」

　テンがそう言い放った時、七海が「お母さん、どうしたの？」と言いながら台所に来た。七海から見ると、涼子はシンクと体を平行にして立ち、斜め上に視線を送りながら難しい顔をしているのだ。奇妙に思えたに違いない。涼子は焦りながら七海の方を振り返った。

「なに、怒ってるの？」

　眉間に寄った皺を元に戻さずにいた涼子は、七海にそう指摘された。

「怒ってないわよ」

　涼子は慌てて否定し、素早くテンがいた方に向き直った。七海には見えないテンは笑みを浮かべ、涼子に手を振りながらいなくなった。

「ずっと怖い顔してたよ？　台所に何かいるの？　ゴキブリ？」

　七海の発想は短絡的だ。台所で母親の機嫌を損ねるものと言ったらゴキブリらしい。

「え？　あ、そうなのよ。ゴキブリかなと思ったら油汚れだった」

　涼子はガス台近くの壁を指差した。テンが立っていた位置のちょうど真後ろに当たる。

「ああ、あれね。私もこの前、間違えたよ。同じだね」

　七海は顎を上げ、壁を見上げる。疑いもせず納得し、母親が自分と同じ経験したことを喜んでさえもいる。

「ねね、残ったヤツ、全部冷蔵庫に入れるんでしょ？　まだあるよ？」

　涼子は片付けの途中だったことをすっかり忘れていた。

「うん、持ってきてくれる？」

　七海は涼子に言われると、居間に戻っておかずの残っている皿二つを両手で運んできた。

「七海」

　皿を受け取りながら、涼子は少し緊張気味に娘の名を呼んだ。七海は眉を上げ、不思議そうな顔をする。

「お母さんが台所に来てから、誰かの声とか聞こえなかった？」

　涼子は声のトーンを下げながら訊いた。七海の反応を見るためだ。

「聞こえないよ？」

　七海は淡々とした声で答える。嘘をついている様子はない。親に言わない方がいいと判断した時の七海は声が微妙に上ずる。今回はそれがない。

「そう」

　七海の答えに涼子は安堵した。すると、今度は七海が動揺し始めた。

「お母さん、何か聞こえたの？　おばけ？　幽霊？　座敷わらし？　こわい！」

　七海の妄想は止らない。最近、学校で借りてきたおばけの本が脳裏に焼きついているようだ。七海は涼子の体に両手を回し、ぎゅっとしがみついた。

「ごめん、ごめん。近所で大声出してる人がいたのよ。あんまり七海に聞かせたくないこと言ってたから、聞こえちゃってたら嫌だなと思ったの」

　涼子は咄嗟に嘘をついた。テンの出たり消えたり自由自在なところは、七海の頭を占領しているおばけに近いものがある。が、自分の家にそんなものが出入りしていると知ったら、七海は涼子から片時も離れられなくなるだろう。

「なーんだ。びっくりした。で、何て言ってたの？」

　七海はホッとした顔をしてから、すかさず質問をする。大人が隠そうとする話を子どもは往々にして聞きたがる。

「ん？　えーっと、なんだっけ」

　涼子は忘れた振りをして、「七海、久しぶりにプリン作ろうか」と、提案した。恐怖から意識を逸らし、自分にべったりくっ付いている娘から回避するためだ。涼子の手作りプリンは七海の大好物だった。

「うん！　作る！」

　七海はしがみついていた手を離し、満面の笑みを浮かべた。子どもは切り替えが早い。

　それに引き換え大人の涼子は、プリンを思い浮かべるだけでは切り替えが出来ない。何か作業に夢中になることで初めて嫌なことを忘れられる。テンのネガティブな発言で暗い気分になりかけていた涼子は、プリン作りに没頭する事にした。

　アイツの言う事なんか気にしない、気にしない……。

　涼子は自分に言い聞かせながら、ボールに卵を三個割り入れた。二つは全卵、一つは卵黄だけにする。プリン四つ分の材料だ。その中にチューブに入ったコンデンスミルクを搾り出すのだが、チューブの口が小さい為、欲しい分量のコンデンスミルクがなかなか出てこない。

「七海、小鍋で牛乳温めておいて」

　涼子は時間短縮の為、七海に指示を出した。

　彼女に出来る作業はどんどんやらせる。背が伸びてきた去年辺りから火を使うのも危なげなくなってきたので、大抵のことは任せられる。

　ただ一つ、玉ねぎだけは涼子が調理した。玉ねぎを切らせようとすると、目が痛くなると言い、ゴーグルやマスクを持ち出してきて大事になるからだ。冷やした玉ねぎでもダメらしい。見ているだけで面倒に思う涼子は、玉ねぎだけは自分で切った。

　コンデンスミルクを出し終わり、その中に沸騰直前で火から下ろした牛乳を混ぜ合わせた時だった。

　涼子の視界の右端に光を感じた。涼子がそちらに顔を向けると、隣でカップを並べていた七海の頭の上で光の輪がキラキラ光っている。道之の頭上で見たのと同じものだ。今回は最初から輪郭がはっきりしている。

「どうしたの？　お母さん」

　忙しなく動いていた母親の手が止まった事を七海はいち早く察した。視線は七海に向けられているのではなく上部だったので、自分を見られているといった意識はない。

「え？　ううん、何でもない」

　涼子は七海と目を合わせ、取り繕うように否定した。だが、嫌な胸騒ぎがする。再び七海の頭上に視線をずらすと、光は空中に溶けるように吸い込まれていった。

「裏ごししていい？」

　作業をしようとしない涼子に七海が言った。

「う、うん。お願い」

　プリンの作り方は七海もよく覚えている。七海は別のボールを取り出し、裏ごし器を載せてプリン生地を流し込んだ。

「お母さん、カップにカラメル入れといて」

　立場が逆転した。裏ごしを繰り返す七海が涼子に指示を出す。

「わかった」

　涼子は言われたままに冷蔵庫から市販のカラメルを出してきて、カップの底に丸く円を描くくらいに注いだ。気持ちのざわめきが治まらない。

「出来た？　入れるよー。お母さん、次は鍋にお湯沸かしてね」

　主導権は完全に七海になっていた。七海がプリン生地をお玉で四等分している間に、涼子は浅鍋に水を張り、火に掛けた。沸騰したら火を止めてカップを入れる。

「熱いからお母さんやってね」

　七海は既に蓋をスタンバイしている。涼子がカップを鍋に入れ終えると同時に蓋を閉めた。

「３、０、０、０と」

　手の空いた七海は、冷蔵庫に貼り付けてあるタイマーのボタンに指を押しつけた。

「この前、三十分じゃ固まらなかったよ？」

　セットした時間を聞きつけて涼子が助言した。

「そしたら延長すればいいでしょ」

　最後まで七海の方が上だ。

　二人で居間に戻ると、七海がテレビを付けた。

　何か観たいものがあるわけではない。消えている黒い画面から何かが出てきそうで怖いのだという。前にテレビでやっていた心霊特集を見た影響だ。だから、七海と共に過ごす時間に静寂は有り得ない。怖がりなのだから見なければいいのに、七海はなぜか番組欄から探し出し、わざわざチャンネルを合わせる。そして、トイレや入浴など、一人で出来るものを減らしていく。

　涼子は付き合い切れないのでその都度説教するのだが、七海の抱えている寂しさをこういう形で母親に訴えようとしているのかと考えることもあった。

「お母さん」

　テレビを見たり見なかったりしていた七海が、視線を涼子に向けて話し掛けてきた。

「何？」

「さっき、プリン作りながら考えてたんだけどね」

　七海は真面目な顔をして話し始め、一瞬躊躇った。

「どうしたの？」

「私……旅行行くの、やめようかな」

　道之がいた時には、乗り気を見せていた七海だった。それが今、真逆の態度を示している。

「なんでよ、日本海に行きたいって喜んでたくせに」

　七海の心境の変化に涼子は戸惑った。

「お母さんと瀬川さんは恋人同士でしょ？　普通、恋人同士っていうのは二人でいろんなところへお出掛けするじゃない。私が一緒に行ったら二人じゃなくなっちゃう」

　七海の様子がおかしい。「何言ってるのよ」と涼子が口を挟むと、間髪入れずに「お母さん達も二人で行った方がいいよ」と言った。

「七海、遠慮してんの？」

「だって、お母さんは瀬川さんの彼女だけど、私は関係ない人だから」

　関係ないと言った七海の言葉が小さな針となり、涼子の胸をちくりと刺した。

「関係ないことないでしょ？　家族なんだから」

「違うよ。結婚したら家族だけど、まだ結婚してないし」

「結婚してなくたって、七海は私の子どもなんだから家族でしょ？　七海が行かないんだったら、お母さんも旅行に行かないよ？」

「お母さんこそ遠慮しないでよ。私、留守番くらい出来るよ」

「よく言うわよ、おばけが怖くて一人でトイレにも行けないくせに」

「この時だけ頑張るよ」

「頑張るって……七海、なんか変だよ。急にどうしたのよ」

　涼子が何を言っても、七海は頑なに「行かない」を繰り返す。だが、旅行に同行したくないと思わせるきっかけなどなかったはずだ。涼子が困惑していると、セットしておいたタイマーが鳴った。

「あ、プリン！　竹串刺してくる！」

　七海は涼子の視線を避けるように一人で台所に飛んでいった。プリンの入った鍋に竹串を刺し、「やっぱりまだかなぁ」と呟いている。一見明るく見える後姿を見ながら、涼子は七海が何を考えているのかわからず、大きくため息をついた。

　ため息を合図にするかのようにテンが現れた。七海の座っていた場所にどっかりとあぐらをかいている。

「子どもが行きたがらないんじゃ、話を進められないわよね」

　テンが意地悪い口調で言った。涼子はテンをきつく睨む。そんな涼子をテンは哀れむかのように見つめた。

「子ども一人置いていく気？　いくらしっかりしているとはいえ小学校三年生なのに」

　テンは足を交差したまま両膝を立て、その上に腕を乗せた。そして、前屈みになって涼子に責め立てた。

「置いていくわけないでしょ。連れてくわよ」

　涼子は語気を荒げる。

「でも、母親の恋路を邪魔しちゃうって言ってるじゃない。健気よね」

「ドラマの見過ぎなのよ。道之の前では喜んでたし」

「気を遣ってたのよ」

「そんな風には見えなかったけど？」

　七海が人に気を遣い、距離を置く時は無口になる。今日は涼子より喋っていた。

「今まで三人で旅行した事あるの？」

　テンが続ける。

「ないわよ。だけど、食事なら何回も一緒にしてるんだから」

「ディナーは必ず七海ちゃんが一緒なの？」

「そうよ」

「ああ、わかった。それが原因だわ」

　テンは大きく二回頷いた。

「三人で食事してる時に彼女はいつも気が引けてたのよ。二人が楽しそうに大人の会話しているのを見てて、疎外感みたいなのが拭えなくて、旅行なんかに行ったら二日間もそんな気持ちを味あわなくちゃいけないことになるって気がついたのよ」

「七海が一緒の時は大人の会話なんかしないわ」

「自覚がないだけでしょ？　そうしているつもりがなくても、七海ちゃんはそう感じているのよ」

「そんなことない。娘の表情見てればわかるわ」

「わかってないわよ。というか、リョコより彼女の方が大人かもね。小さい子ほど母親の態度に

は敏感なのよ。それで母親に嫌われまいと思って、良い子でいようとしてるんだわ」

　そう言い切ったテンに涼子は憤慨した。

「自分こそわかったような口利かないでよ」

「現に嫌がってるじゃない」

「嫌がってないって」

　涼子は強く否定した。

　これまで何をするにも娘の気持ちを第一に考えてきた。子どもの表面的な言葉と内面的な心情の違いを見極めてきた自信がある。今回、日本海と聞いて遠慮していたのは七海よりも涼子の方だ。七海は涼子よりも旅行に積極的だったのだ。

「お母さーん」

　台所から七海が涼子を呼んだ。それと共に再びテンが姿を消した。

「カップ、冷蔵庫に入れて！　もういいみたいだから」

　湯の中に入ったカップは熱くて素手で持つ事が出来ない。ミトンで取り出すのだが、カップの淵が湯から少ししか出ていない為、つるつる滑って掴みづらい。七海は過去に一度、カップを掴み損ねて湯の中にプリンをひっくり返してしまったことがある。それ以来、この工程だけは涼子に頼るようになった。

「今行くー」

　涼子は複雑な思いに囚われながら、それを七海には悟られないように声を張り上げた。

障害１２

　翌日になっても涼子の気持ちは晴れなかった。

　物事が具体的に動き出した途端に道之が職場に呼び出されたり、初めは喜んでいたかに見えた七海が同行しないと言い出したりと、テンの言う障害が次々と起きている。それともテンの言うことなど単なる偶然で、旅行如きで浮かれるなという暗示なのだろうか。

　冴えないままレジに立ち、涼子はそんなことを考えていた。

　事務処理を終えた深見が涼子の隣に来て、「体調でも悪いの？」と声を掛けた。心ここに在らずだった涼子は我に返り、「いえ、元気ですよ」と言って、笑みを作った。

「そう？　オーラがどんよりしてたけど」

　深見は涼子が無理にテンションを上げた事を見抜いていた。涼子は人に声を掛けられると、条件反射のように空元気を出す。どんなに落ち込んでいてもだ。

「オーラがどんよりって、人をおばけみたいに言わないでくださいよ」

「だって、昨日の帰りとは大違いだよ？　笑うなって言われたって自然とにやけちゃうみたいな顔してたのに、今日は目が笑ってないし」

　自覚のある涼子は無駄なことはやめようと思い、作っていた笑顔を解いて「実は昨日……」と口を開いた。

　一通り、昨日の出来事を聞いた深見は、「偶然にしちゃきついね。楽しみにしてた分だけ落ち込むよな」と、言った。

「普段いろいろと出掛けたりって出来ないじゃないですか、道之、忙しいから……。仕方がないって諦めてたところがあったから、舞い上がっちゃったんですよね」

「普通じゃない？　誰だって好きな人とは一緒にいたいでしょ」

「そうなんですけど……」

　涼子は少々口篭った。

「だけど……？」

　深見が尋ねる。涼子ははっきりと公言できないもやもやを、別の言い方で表現した。

「神様に、行くなって止められてるみたい」

「どうして？」

「わからないけど……」

　テンのことなど説明しようがない。

「でもさ、まだ行けないと決まったわけじゃないだろ？」

「ええ、まあ」

「道之は約束を守る奴だよ。一度口にしたことを安易に撤回したりしないって」

「そう信じたいですけど、仕事が相手じゃ……」

「確かにワーカホリックなところはあるけど、樋口さんに対していつもそれじゃいけないって思ってると思うよ。そうじゃなきゃ、過密スケジュールのあいつが旅行になんか誘わないって」

　深見は道之の性格を踏まえた上で自分の考えを訥々と述べた。力説しているわけでもないのに、道之をよく知る人物の言葉は涼子の心にすんなりと入ってくる。だが、道之のことはそれで説明がついたとしても、七海のことはどう解釈すればよいのだろうか。

「七海はどうしてあんなこと言い出したんだと思います？」

　涼子は一度緩めた眉を再度ひそめた。

「うーん、状況を知ってるわけじゃないから何とも言えないけど、お母さんを取られるって思ったのかな」

「今頃？　昨日今日に会ったわけでもないのに」

　七海は道之に疑う余地のないほど懐いている。

「子どもの心って大人が予測できないような動きをするから」

　深見にも小学生の子どもがいる。

「突然、危機感を持ったんでしょうか」

「否定は出来ないよね。道之のことでウキウキしてるお母さんを見て、急に独占したいと思ったのかもしれない。樋口さん、いつも自分の感情押さえ込んでるから、そのギャップが不安に繋がったんじゃない？」

　涼子は思い当たることを指摘され、顔を曇らせた。

　何も言えなくなった涼子に深見は慌てて、「もう少し大きくなれば、母親の幸せを考えられると思うよ」と、慰めとも思える言葉を投げ掛けた。

　深見の心遣いを感じた涼子は、不安をそのままにして軽く微笑んだ。

「もう、そう考えてくれてるのかなって事を言うことはありますよ」

「なんて？」

「お母さん、瀬川さんと結婚しなよって」

「どんな顔して言ってる？」

「ほわんとした顔です」

「じゃあ、強がってるわけじゃなさそうだね」

「何も考えずに言ってる感じです」

　七海の顔を想像したのか、深見が口角を上げた。

「そっか、普段軽い調子でそういうこと言ってるんだ」

「そうなんです。簡単に言わないでほしいですよね」

　いろいろな意味で……。

　涼子は心の中で呟く。

　少しの沈黙の後、その間に深見が頭の中で巡らせていたことを口に出した。

「児童心理の本を読んだことがあるんだけどさ、親を取られる意識があったとしたら……何かサイン、出してなかった？」

「サイン、ですか？」

　急に学術的な質問をされ、涼子はどう答えたらいいのかわからず「えっと……」と言ったきり言葉に詰まった。それを察した深見は、わかりやすく例を出す。

「学校に行こうとするとお腹が痛くなるとか」

　ああ、そういうことかと合点のいった涼子は、「私より先に起きて朝食食べてます」と答えた。

「夜、なかなか寝付けないとか」

「布団に入ると同時に寝息立ててます」

「成績が落ちてきたとか」

「テストは満点ばかりです」

「自分の欲求を口にしなくなったとか」

「毎日、あれがしたいな、これはイヤだなってうるさいくらいです」

七海の健全ぶりに深見は質問を止め、一笑した。

「情緒は安定してるね。自分の吐き出せない思いを抑圧してたら、何かしらありそうなもんだからな。道之に関する不安は本当にないのかもね」

「だから、びっくりだったんですよ。恋人は二人でいろとか、自分はまだ他人だからとか、七海の口からそんなことが出てくるなんてすごく意外だったんです」

「子どもってわからないね」

　涼子は肩を竦めながら「全く」と呟いた。

　そこまで話すと、レジに客が来た。対応したのは深見だ。

　深見が代金を受け取りながら、本にカバーを掛けるかどうか客に希望を聞く。それを横で確認するや否や、涼子は手早くカバーを掛ける。手馴れたものだ。一冊なら深見がお釣りを渡す頃には客に渡せる状態になっている。今日は三冊だったので少し客を待たせた。

　その三冊目に取り掛かった時、涼子の隣で何かが大きく光った。

　驚いてそちらに顔を向けると、深見の頭の上で光の輪が浮かんでいる。それは道之や七海の頭上で光ったものよりも、数倍強力なエネルギーを放っていた。

　眩しさに目を逸らした涼子の耳に、認識できない周波数の音を聴いてしまったような違和感が残る。しかし、深見はおろか、一番先に気が付きそうな客ですら平静を保っている。自分にしか見えていないのか。涼子は手を止めて呆然とした。

「樋口さん？」

　深見が不思議そうな顔をして涼子に声を掛けた。

「あ、すみません」

　涼子は我に返り、止めていた手を動かした。客に本を手渡した後、涼子が再び深見を見ると、光は跡形もなくなくなっていた。

「俺の頭に何かついてる？」

深見が自分の頭を撫でながら訊いた。

「い、いえ、何も……」

涼子は首を小刻みに横に振った。だが、気のせいだと言い切れないもやもやが消えない。

「そうだ」

深見が何かを思いついたように呟いた。

「どうしたんですか？」

涼子は咄嗟に尋ねた。同時に、聞かない方がいいような予感に駆られる。

「黙ってた方がいいと思って今まで言わなかったんだけどさ」

だったら、言わなくていいです……。

心の声とは裏腹に涼子は「何をですか？」と深見の言葉を促す。

「道之と一緒にいる沙耶って子いるだろ？」

「ええ」

「道之の元カノなんだよ」

「え……？」

初耳だった。

「彼女、俺達の大学の時の後輩なんだ。あの二人、大学生の時に付き合い始めて、同棲もしてたんだよ。だけど道之が先に社会人になってあんな調子に仕事をするようになってから、大学生の彼女が一人で待ってる時間が増えちゃってね。私は家政婦じゃないって大喧嘩。それで別れたんだけど、沙耶が就活して受かった会社が道之の出向先でさ。しかも同じ部署。別れてから二年くらい経ってたからわだかまりもなくなってたらしくて、また話すようになったみたい。縁があるのかね」

涼子は顔が引きつりそうになるのを必死で堪えた。

「深見さん、どうしてそんなに詳しいんですか？」

「俺も沙耶とはよく連絡を取るから」

「二人はもう関係ないんですよね？」

「うん。道之は沙耶のこと何とも思ってないよ。ただの後輩としか思ってない。一度別れると復縁とか有り得ないタイプだから」

　涼子は少し安堵した。だが、軽く微笑んだ涼子の顔を見て、深見が再び不安を煽った。

「でも、樋口さん、気をつけた方がいいよ。沙耶はあわよくばって思ってるみたいだから」

「どういうことですか？」

「まだ道之のことが忘れられないみたい。ずっと後悔してるみたいだよ」

「そんな……」

　涼子は愕然とした。沙耶は自分よりも道之のそばにいる時間が長い。彼からも仕事が出来る人間として認められている。何でもなくても心配になるには十分過ぎる要素を持っているのに、特別な感情を持ち合わせながら一緒に仕事をしていたら、彼の心を動かす機会は数限りないではないか。

「俺、思うんだけどさ。道之は仕事人間だろ？　結婚したとして、悪気はなくても家庭を顧みないかもよ」

　深見が道之のマイナスの面を強調した。

「あんなに子どもが好きでも？　仕事に没頭してても、家庭は家庭って切り替えませんか？」

　涼子は、それまで見てきた道之の態度を振り返る。どんなに忙しくても、涼子が助けを求めれば必ず時間を割いてくれている。そんな彼が家庭を顧みないなどということが有り得るのだろうか。反論する涼子に深見は更に追い討ちを掛ける。

「いや、仕事優先にすると思う。あいつ、仕事している時が一番楽しいんだって。沙耶がパー

トナーになってから仕事がはかどるって言ってたし」

　同棲までしていたのなら、沙耶は彼の考え方、日常の癖、様々なものの好みなど詳しく理解しているだろう。痒いところに手が届く彼女がそばにいたら、道之が意識していないにしても、より一層仕事に集中できるに決まっている。いちいち指示しなくても阿吽の呼吸で仕事に取り組んでいるはずだ。

　それに比べて涼子は彼の何の力にもなれていない。彼の体を休ませる時間を奪ってばかりいる。

「店長……私、どうしたらいいかわからなくなってきました」

　そう呟いたのを最後に、涼子はすっかり塞ぎ込んだ。レジから離れて本の整理をしながら、楽しそうに彼女の事を語る道之の表情を思い出していた。

　復縁はないと言いつつ、彼女の事を心のどこかで意識しているのではないか。沙耶と一緒に過ごす事が生き甲斐になっているから、職場の外に楽しみを見つける必要がないのではないか。自分には気を遣って時間を作っているだけで、会いたいから会っている訳ではないのではないか……。

　涼子は疑心暗鬼になっていた。しまいには、旅行の計画も最初から仕事の都合などつかないのに、自分に対する気休めで言っただけなのではないか、と思うようになっていた。

「ラミエル、何やってんのよ」

　涼子の様子を本棚の上から眺めていたテンの元にジーナがやってきた。テンの横に並び、悪態をつく。もちろんジーナも他からは見えない。

「何よ」

　いきなり責められたテンは声を尖らせる。

「天使の癖に女心がわかってないわね」

　むくれたテンを逆撫でするかのように、ジーナは彼の鼻を人差し指で突付いた。

「どうしてよ」

　テンはジーナの手を掴んで下ろす。

「ラミエルは涼子に願い事を変えさせたいんでしょ？　恋愛以外のことに。だけど今の彼女、前より彼に固執してるじゃない」

　詰問されたテンはムッとしながら涼子を見た。確かにため息の間隔が短くなっている。

「旅行に行けなくなるような障害が立て続けに起きたから落ち込んでるだけでしょ？」

　思惑通りにいっているとは言い難い。が、自分がしたことは間違っていないとテンは意地を見せた。ジーナはテンの言い草に「フン」と鼻から息を吐いた。

「だけって……ホントに表面的なことしか見てないのね。それに、障害が起こるたびに不安になるように煽ってどうするのよ。涼子の心境の変化、ちゃんと見極めないと」

「見極めてるわよ。ちゃんと考えてる」

「考えてないわ。いい？　おさらいね、涼子の家に道之が来た時のことから」

　ジーナは体ごとテンの方に向けた。

「ずいぶん、偉そうね」

　高圧的なジーナにテンは気持ち後ろに背を向ける。僅かな動きだったにも関わらず、ジーナはテンの反抗を見抜いた。

「試験に合格出来るように協力してるんじゃない。このままだと不合格への道一直線よ？　天使の輪か、何の力も持たない人間にへんしーん」

「縁起でもない。恋人がそういうこと言うかしら」

「そうなって欲しくないから言ってるんでしょ？　どうでも良かったら口出ししないって」

「わかったわよ。そういう事にしとくわ」

　テンはだんだん面倒になってきた。心の中で、女のお小言は人間も天使も変わらずやっかいだと思った。

「可愛くないわね。いいの？　知らん振りしてて。後でジーナの言う通りにしておけば良かったって思ったって遅いんだから」

　投げやりなテンに、ジーナはしつこく食い下がる。

「はいはい。わかったって言ってるじゃない」

　逃げられないと思ったテンがジーナの方に向き直ると、ジーナは早速とばかりに「まずはね、道之が来て、旅行の資料を涼子に見せたの」と、おさらいを始めた。

「その時の涼子はどんな気持ちでいた？」

　ジーナは涼子の心情を追及する。

「浮き足立つほど喜んでた」

「そうね。それで？」

「そんな幸せが手に入ったら結婚願望が強まるだけだから、道之のところに沙耶から電話を掛けさせた。それで、道之には自分が行かないとどうにもならないと悟らせたの」

「ラミエルが仕組んだのよね」

　道之の頭上に光った輪のことだ。光る輪は、テンが遠隔で人を操作する時に出来る。

「でもリョコは、仕事で二人のペースを保てないのは日常茶飯事だからと思い、待とうとした。だから安心させない為に、七海に旅行は一緒に行かないって言わせた」

「母親としては娘を置いて旅行になんか行けないものね。特に涼子みたいな女は」

「そう。それでもリョコは七海に行きたいと思わせるように、どうやって説得しようかと悩んだ。店長に相談し始めたから、リョコが信用している店長に爆弾発言させたのよ」

　テンがそこまで言うと、ジーナが「それよ、それ」と強調した。

「沙耶は元カノだなんて致命的な打撃よ。店長、それがわかってたから、涼子には言わずに墓場まで持っていこうと思ってたんじゃない。落ち込むなんてもんじゃ済まないわ」

　ジーナは「あーあ、やっちゃったわね」と、テンを罵倒した。

　テンは涼子に視線を移した。何かを思い浮かべているのか、表情がかなり険しい。それがどういうことを意味しているのか、ジーナが説明した。

「人間の女の子っていうのは、彼氏が自分の事をどう思っているのか、いつも不安でいる生き物なの。その上で更に不安要因がプラスされると、いても立ってもいられなくなっちゃうの。わかる？　執着から抜け出せなくなるのよ。彼のことで頭がいっぱいになって、他の事が考えられなくなるの。そうなったら自分の夢どころじゃなくなるわね。そんなことくらい誰でも想像つくでしょ」

「じゃあ、どうしたらいいのよ」

　憮然としてテンが訊く。

「まずは涼子が抱えた不安を取り除かないとね」

「どうやって？」

「作家への夢をプッシュするのよ。彼のことを考えなくなるくらい書く事への興味を持たせるの。執筆に夢中になれば嫌なことを忘れられるよ、とかなんとか言って。あくまでも遠回しにね。恋愛云々って言葉はご法度よ。思い出させるだけだから。そうよ、面白そうなネタを提供したら、涼子が勝手に想像を膨らますんじゃないかしら。こうなったら悩んじゃった事、利用しない手はないわ」

　思いつくままに言い切ったジーナは、我ながらにいいアイデアだと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべた。

「利用……って、天使がそういうこと言うかしら」

「よく言うわ。自分だって昇格試験の為に涼子を利用してるくせに」

「アタシは利用なんてしてないわ。昇格するために協力を願っただけ」

　自分はジーナほど悪ではないと言わんばかりにテンは主張する。

「言葉を変えただけじゃない」

　ジーナは譲らない。

「とにかく、小説を書かせるように仕向けるの。わかった？」

　口では勝てないと諦めたテンは、「ＯＫ」と流した。

「ささっと合格して、私達も旅行に行こうよ。どこがいいかなぁ。太陽系は飽きちゃったから、もっと遠くの星がいいな」

　ジーナは目を輝かせてテンをせついた。

「考えとくわ」

「約束だからね」

　ジーナは満足げにテンの頬にキスをして姿を消した。

　テンの実力と愛情を、ジーナはいつも強く信じていた。その想いにテンはいつも応えていた。だから、ジーナの中ではテンの合格は必然で、旅行は確定されたものだった。

　だが、今回関わった涼子という人間は、予想をしていたより遥かに複雑な心の持ち主で、思い通りの展開を見せない。テンの自信は揺らぎ、焦り始めていた。

固執１

　退勤後、店から出てすぐに涼子は携帯を開いた。道之にメールを送るためだ。

『お疲れさま。』

　その先が続かない。沙耶のことに触れたかったのだが、何をどう伝えたらいいのかわからない。

『沙耶さんって、元カノだったの？』

　そう打ち込んで、慌てて消す。それを聞いたところで、嘘が嫌いな道之に悪びれることなく肯定されるだけだ。涼子も、過去の恋愛を責めるつもりはない。

『沙耶さんと道之が付き合ってたって聞いたよ。二人はもう、関係ないんだよね？』

　聞きたいのはこのことだ。でも、道之は自分の心の世界を覗かれる事を何よりも嫌がる。涼子はまたクリアボタンを押し、すべての文字を消した。

『お疲れさま。昨日は大変だったね。仕事、うまくいきましたか？』

　涼子はそう打ち込んだ。一番聞きたい事を避けて送信。そのまま携帯の画面を見つめていた。

　すぐに返事がくることなど滅多になかったが、とにかく道之とコンタクトを取りたかった。連絡を取ることで、このもやもやした気持ちをどうにかしたかった。道之の事を疑っている自分をどうにかしたかった。

　家に向かって歩きながら、涼子は何度も問合せをして着信を確認した。やはり、返信はない。涼子はメールを送る前よりも気持ちが不安定になった。嫌な妄想ばかりが頭を過ぎる。

「とんでもない情報、聞いちゃったみたいね」

　いつの間にか、涼子の隣にテンがいた。テンの声をすぐ横に感じた涼子はその場で立ち止まり、開いたままの携帯をぱたりと閉じた。

「テンちゃん……」

　いつもだったらうっとうしく思えるテンを、涼子はすがるような目で見た。

「なあに？」

　テンは背中の大きな翼を広げ、今にも崩れ落ちそうに弱々しい声を出す涼子を包み込んだ。

「メールの返事が来ないの」

「彼から？　いつものことでしょ？」

「そうなんだけど……道之、今もきっと、沙耶さんと一緒にいるよね？」

「仕事だからね」

　テンは何の思惑もなく答えた。だが、その一言が不安でいる涼子の胸を抉った。

「それがネックなのよ。毎日顔を合わせてるし、道之も沙耶さんの事、頼りになるって褒めてた。同じ目的に向かって協力し合って、いろんな苦難を乗り越えていったら、この先、もっと絆が深まるかもしれないでしょ？　元々恋人同士だったってことは惹き合うものがあるってことだし。どうしよう、復縁しちゃったら……」

　涼子は今にも泣き出しそうだった。

「取り乱すなんて涼子にしちゃ珍しいわね。よほどショックだったのね。だけど、それで復縁って短絡的過ぎない？」

　テンは子どもをあやすように、涼子の頭に軽く手を載せた。同時に、涼子を包んでいた翼を背中に仕舞う。ネガティブだとはいえ、涼子が自分の言い分を吐き出し始めたことで、病的に落ちることはないと判断した。

「沙耶さんは、道之とまた付き合いたいと思ってるんだって」

　涼子は自分の髪を撫でるテンの腕の隙間から訴える。

「ずっと好きだったのかしら」

「わからないけど……別れた原因だって学生だった沙耶さんとのすれ違いだっていうから……」

「嫌いで別れたんじゃないなら、彼もいい加減ほとぼりがさめてるかもしれないわね」

「自分の事を好きな相手がそばにいたら、どんな気持ちになるかな……」

「悪い気はしないんじゃない？　男はモテたい性分だからね」

　テンは一般論として語り、遠くを見た。

「道之はそんな軟派じゃないわ」

　涼子は、あなたと一緒にしないでと反論した。

　思いがけず責められたが、テンは否定せずにぺろりと舌を出した。テンは発言を容認したつもりだった。が、涼子はテンが舌を出したことで開き直られたと受け取り、自分の中の嫌悪感を呼び起こしそうになった。

固執２

　男のよそ見で痛い目に会ってきた涼子は、女性に纏わる問題が起きると異常なほどの拒否反応を起こす。その手の相手を目の前にした時、顔を合わせているのはもちろんのこと、声を聞くのも同じ空気を吸っているのも嫌になるのだ。

　普通の人間ならなるべく近づかないように出来る。が、突如として自由自在に現れるテンには、離れていたくても涼子の意思ではどうにもならない。テンに対して拒否反応が起きた場合、涼子は自分の嫌悪で自分の首を絞めることになる。

　だから、テンのことを心底嫌にならないよう、防御のために話題を変えた。

「あ、あとね、店長が気になること言ったの。私達が結婚したとしても、道之は家庭を顧みないって。沙耶さんのことがなくても、うまくいかないって言われたみたいで……」

　道之と自分との間が揺ぎ無いものだと信じられれば、沙耶のことも気にならなくなる。涼子は他者の同意により確信を得たくてテンに訴えた。

　道之が家庭を顧みないなんて有り得ないでしょ……。

　テンがそう答えてくれれば……と涼子は願った。だが、これまで涼子を失望させることばかり言ってきたテンが、涼子の期待する言葉を口にするはずがなかった。

「親友の言うことは間違ってないかもね」

　テンはさらりと肯定した。

　涼子は、何でもいいから否定して欲しいと思っていた。心の膿を出してすっきりしたかった。だが結局は不安の上塗りをしただけで、安心を求めていたと気づいたのは何も言えなくなった後のことだった。

　がっくりと肩を落とした涼子を見て、テンはジーナの小言を思い出した。

　女の子は不安があると、他のことが考えられなくなるのよ……。

　テンは、しまった、と思った。悪気はなかったものの、正直に言いたいことを口にし過ぎた。涼子の思考は完全に道之に固執している。

　テンは、「リョコ！」とわざと勢いをつけて呼んだ。

「なに？」

　涼子は、一瞬怯み、驚かされたことに半分腹を立てながら八の字になった眉をテンに向けた。

「リョコ、彼の事を忘れよう」

　テンが言い放った。

　涼子は「え？」と、小声で聞き返した。別れろとでも言いたいのだろうかと、涼子は悲観的に捉えた。

　テンは涼子の表情を慎重に読む。それを悟られないように表向きは飄々とした態度を崩さない。
「忘れるっていうのは諦めるのと違うのよ。一時、恋愛から離れるの。そうすれば心に余裕を取り戻せるから」

　恋愛本にでも載っていそうなレクチャーを実行できるくらいなら、世の中に恋愛で苦しむ女の子などいなくなる。どこかで読んだことのあるフレーズをおさらいされ、「理屈ではわかるけど……」と、涼子は小さく反論した。

「彼の気持ちをこっちに向けたいでしょ？」

　テンはまず、涼子の願望を重視する。

「うん……」

　訝しく思いながらも、涼子はテンの話に耳を貸す。

「自分磨きするのよ」

「自分磨き？　それと彼を忘れることとどう繋がるのよ」

　涼子はますますわからなくなり、八の字眉をきゅっとすぼめた。

「まあいいから。その方法を伝授するわ。今、ここじゃなんだから、夜いる？」

「いるけど……」

「じゃあ、七海ちゃんが寝た頃に行くわ。待ってて」

　テンは涼子の返事を待たず、一人で勝手に予定を組み込んだ。

　七海が寝付くまでの数時間、これほどまでにため息が吐けるのかというくらいに涼子は息を吐き続けた。

　いつもの涼子なら、七海に話しかけられると何をしていても視線だけはしっかり娘の方に向ける。だが、今ここにいる涼子の心の目は道之に飛んでいた。相槌は打つものの視点が定まらず、気持ちが宙に浮いていた。

　母親の様子がおかしいのを娘はすぐさま察知する。そして、会話を諦め、口を閉ざす。

　普段は絶え間なく喋っている七海なのに、今日はテレビの画面を見つめたまま涼子との距離を取った。その後、一人で明日の時間割を揃え、寝室へ行き、静かな寝息を立て始めた。それに気づかないほど、涼子は不安という感情に強く支配されていた。

「やほ」

　居間にテンが来た。あらかじめ来るとわかっていた涼子は、驚くことなくテンをちらりと見上

げた。手には携帯を握り締めている。

「まだ落ち込んでる？　メール来た？」

　能天気を装い、テンが尋ねる。面白がられているようにしか思えない涼子は、テンを横目で睨んだ。

「まあいいわ。これからリョコは彼を忘れるんだから」

　テンがさらりと言う。

「その忘れるって何？」

　涼子が口を開くと、「いい？」とテンは涼子の前にノートパソコンを置いた。

「ちょっと！　これ、私のパソコンじゃない！」

　テンが差し出したのは、長い間、物置の奥にしまい込んでいた涼子のパソコンだった。テンは「そうよ。何か問題ある？」と訊いた。

「人の物を勝手に漁らないでくれる？」

「仕方ないじゃない。こうでもしないとリョコ、小説書きそうもないし」

　テンは開き直る。

「またそれ？　書けないって言ってるでしょ。毎日、仕事と家事でくたくたなんだから」

　涼子が言葉を尖らせると、「恋に悩む暇はあるじゃない」と、テンが間髪入れずに返した。

「本当にくたくたなのよ。あなたみたいに瞬間移動出来ないし、食事だって魔法みたいにパッと出せないの」

　涼子は抵抗する。心のゆとりを完全になくしている今、執筆どころではないことを必死で訴えた。

固執４

「確かに疲れ切ってて、どんよりしてて、覇気がないわね」

　テンは手鏡を涼子の顔に突きつけた。彼女が魔法と例えた術を使って出さずに、あえて棚に置いてあった涼子の鏡を手に取った。

　涼子は鏡に映る自分の顔と対面する。嫉妬と不安に陥り、陰気な雰囲気を漂わせた自分がいた。

「もしもよ。彼がリョコの思い通りに動いてくれる人になったとするでしょ？　リョコはそれで満足？」

　仏頂面で鏡を見つめている涼子にテンが訊いた。

「え？……」

　矛先の変わった質問に、涼子は鏡から目を逸らし、テンを見た。

「何もない自分を彼が構ってくれればそれで満足かって聞いてるのよ。もちろん、何もなくても人はお互いに愛し、愛されるべきなんだけど、リョコは違うでしょ？　もっと自分を向上させたいと思ってる。そうなってからの自分で彼に認められたいと思っている。やりたいことすら見つけられない人が多い中、リョコはなりたい自分を持ってるのに、みすみすチャンスを逃してるのよ。もったいない」

「だから、やりたいことがあっても……」

　涼子は力の入らない声で言い返した。

　テンが言ったのは本来の自分の姿だ。鏡にいた自分は、あまりにも情けなく、なりたい自分とはかけ離れている。でも、ぎりぎりの生活をしている自分に、七海以外の事でこれ以上鞭打つことは出来ない。心の支えと思っていた道之は不安の種になってしまった。そんな中、どう頑張れというのだと、涼子は心の中で自分を正当化する理由を考えていた。

　テンは涼子の言葉の続きを声にした。

「自分の境遇のせいでそれを諦めた。だけど今日、気付いたはずよ。夢を追いかけられる状況になってること。母親が悩み込んで上の空でいても、七海ちゃんはきちんと自分の事やってたでしょ？　そういう年齢になってるのよ。もう母親べったりの赤ちゃんじゃないの！

「体を休ませる時間だって必要だわ。その時間を使って考え事してるの」

　涼子が口先でぼそっと言うと、テンは「言い訳」と、言い捨てた。

「その言葉、自分で納得して言ってる？　納得して言ってるのならリョコの主張として認めてあげる。でも、心のどこかで引っかかってたら言い訳って自覚した方がいいわよ」

　涼子は反論できなくなった。発言するごとに心がもやもやして、すっきりしないでいることを涼子も薄々感じていた。

「五分や十分、原稿に向かう時間くらいあるでしょ。パソコンのファイル、見せてもらったんだけど、一通り書き上げてある作品があるじゃない」

「読んだの？」

　涼子は目を丸くし、事後承諾で事を済ませようとしているテンに詰問した。

「終わりだけね。完っていう文字を見ただけよ」

　テンは涼子に構わず、パソコンの電源を入れる。パソコンが立ち上がるとすぐに、テンはデスクトップにあったワードを開いた。

固執５

「何かが足りないのよね。さらっと流れちゃってる。ちょっと詳しい概要って言われるわよ、これじゃ」

「やっぱり全部読んだんじゃない」

　勝手に読んで勝手に批評するテンに涼子はむっとした。

「この文章に、ぐちゃぐちゃに取り乱れたリョコの感情を書き足していったらリアルなお話になるわ」

「ぐちゃぐちゃって……失礼な」

「それも自覚なし？　まあいいわ。書き出せば自分が見えてくるから」

　涼子は「偉そうに」と悪態を吐く。

「だいぶ年数も経ってるから内容なんて忘れちゃってるでしょ？　今日は帰るから一度全部読み返してみて。宿題」

　テンはそう言い残して姿を消した。

　テンと相対して余計なエネルギーを消費した涼子は、圧し掛かる疲れを全身で感じていた。

「勝手過ぎ……」

　そう呟きながら涼子はパソコンの画面に目を遣った。白い画面には、過去に自分が打ち込んだ文字が羅列している。だが、頭に湿った真綿が詰まったような状態の涼子には、文章として認識することが出来なかった。

　キーを打たれることのないパソコンは、ザーッという音をたてながら部屋の一部と化している。

　こんな気持ちで小説なんか書けないよ……。

　涼子は誰に訴えるでもなく、心の中で嘆いていた。

　次の日の夜。昨日と同時刻にテンが現れた。

「パソコンは？」

　能天気にテンが訊いた。

　涼子は昨日と同様、七海が寝た後の居間でぼんやりと携帯を眺めていた。当然のようにパソコンなど開いていない。

「気が乗らなくても毎日ワードを開きなさい。最初はそれだけでいいから」

　テンは部屋の隅に追いやられていたパソコンを見つけると、ひょいと拾い上げて涼子の前に置いた。

「この様子だと読んでもいないわね？　音読してあげようか」

　テンはワードを開くと、一ページ目の最初から声に出して読み始めた。

「やめてよ、恥ずかしい」

　涼子はテンの腕を引き、慌てて制止する。テンは読むのを止め、涼子を見た。

「いいわ、読み返すのは省略。一行ずつ読んでいって、言い回しが変なところを端から直していきましょ」

　そう言ってテンは一行目を指差した。涼子はテンを一睨みしてから一行目に目を移す。

「直しながら、感情とか描写とか、膨らませたいところがあったら書き足すのよ」

「そんなこと、わかってるよ」

　過去に自分がしていた作業だ。でも、その単純作業すら今はする気になれない。

　それをテンに言おうとして涼子はふと思い留まる。一行目と限定されたことで、涼子は集中力を取り戻した。文字の羅列でしかなかった白い画面が意味を成す一つの集合体となる。涼子はそのまま二行目、三行目と読み進めた。

　テンは涼子の隣でテーブルに肘をつき、黙って彼女を見守った。

　涼子がキーに手を置いた。物語に入り込んだ涼子は外界の音や景色を遮断する。テンが見ていることなどすっかり忘れ、涼子はバックスペースキーで文字を消し、新たな言葉を綴った。書き直した文章を読み返し、再び消す。腑に落ちないのか、その作業を何度も繰り返している。

「すごいじゃない。その調子よ」

　涼子の動きが止まったのを見計らって、テンが高揚した声を出した。

「集中力、もたないよ」

　涼子は立ち上がって台所に行った。冷蔵庫を開け、麦茶をコップに注ぐ。ネガティブな言葉を吐きつつ、執筆に没頭した時の爽快感をほんの少し思い出していた。

「大丈夫よ、焦ることないわ。少しずつでいいの。毎日の積み重ねが大作を生むのよ」

　テンも台所に移動し、涼子の脇に立った。

「大作なんて大袈裟な」

　麦茶にむせながら、涼子はテンに言った。

「筆者が自分の作品を卑下してどうすんのよ。リョコは才能があるんだからね。芥川賞か直木賞を獲る作家になるんだから」

　テンは咳き込む涼子の背中を叩いた。

「何を根拠に？」

「夢は具体的にビジョンを描くことで叶うものなの。作家になる限り、目標は大きく持たなくちゃ」

「簡単に言うけど、両方ともプロの作家が発表した作品に贈られる賞なんだよ？　私、まだプロじゃないもん」

「ダメよ、今から否定語禁止。プロじゃないって言い切ってたら一生プロになんかなれないわ。言霊って影響力あるのよ。いい？　文章を書いている時点でもうリョコはプロ。プロであるかないかは自分の意識が決めることなの」

「お金も稼いでないのに？」

「そうよ。思い込むことが大事よ」

「ふーん」

　生計を立てるまでに至らなくても収入を得て初めてプロなのではないか。表情で訴えている涼子にテンは、「じゃあさ、ちょっと聞くけどリョコはどうして小説を書きたいと思ったの？」と訊いた。

　涼子は少し考えた後、

「読んだ人が癒されたり元気になったりしてもらいたいからかな」

　と答えた。それを聞いたテンは、「ライトワーカーになりたいのね」と呟いた。

固執７

「ライトワーカーって？」

　涼子が聞き返すとテンは、「光を与える仕事ってことよ」と言った。

「光を与える？」

「相手の気持ちを楽にしたり癒したり希望を持たせたりするってこと。リョコは文章を読んでもらうことでそれをしたいんでしょ？」

「うん、そう」

「素敵なことだわ。それをいつも頭に置いていれば、すらすらと文章が出てくるわよ」

「簡単に言わないでよ」

　涼子は反論したものの、忘れていた何かを思い出し、書くことへの意欲が体の芯を沸々と温め始める。

「やる気が出てきたわね」

「ちょっとね」

「ちょっと？」

　テンの早過ぎる切り替えしに涼子は苦笑する。

「頑張ってみるよ」

「うん、頑張って。やっと本来のリョコに戻ったわね」

「本来の私って？」

「ん？　葛藤のない自分ってこと。まあ、そのうちわかるわ」

　テンの説明に尚更わからなくなった涼子だった。が、ニコニコと笑っているテンの顔を見ながら、心が和んでいくのを感じていた。

「落ち込みそうになったら無理やりにでもワードを開きなさいよ。わかった？　あることないこと妄想するのは無意味だからね！　時間の無駄」

　テンは念を押す。

「わかったって」

　涼子は首を縦に二度振った。ネガティブな想いで重くなっていた心が軽くなっている。今回ばかりはテンに感謝しなくては……涼子がそう思いかけた時、何を思ったかテンが口を滑らせた。

「小説は裏切らないから。道之と違って」

　それを聞いた途端、和みかけた涼子の心が再び凍りついた。テンは何かを知っているのだろうか。涼子は再び不安に苛まされた。

「ちょっと待って。道之と違って……ってどういうこと？」

　テンは行きたい場所に瞬時に移動し、事実を目で見ることが出来る。そのテンが、「小説は道之と違って裏切らない」と言い切った。憶測で話す必要のないテンの言葉には信憑性がある。

「ん？　別に深い意味はないけど？　沙耶がそばにいるから安心は出来ないってことよ」

　テンは軽く口走る。ジーナの忠告は頭から消えている。

「じゃあ、何かがあったってわけじゃないのね？」

「そうよ」

　事実に基づいた発言ではなかった。だが、息苦しい鼓動が胸に残る。

「だったら、変なこと言わないで」

　涼子はテンに釘を指す意味で言葉を尖らす。

固執８

「でも、同棲してたり、喧嘩別れしたんじゃないんでしょ？　で、今は頼りになる仕事の相棒。沙耶は復縁を狙ってる」

　テンは単純に経緯を追う。

「道之は一度別れたら復縁は有り得ない人なの。彼、前にそう言ってたし」

　記憶を辿り、涼子は道之を正当化する為の根拠を探す。

「ケースバイケースでしょ？　いつもそばで楽しいこと辛いことを共有して、相手の新たな一面を発見して絆を深めたりなんかしたら……」

「道之は、公私混同なんかしない」

「どうかしら」

「仕事と恋愛は別よ」

「職場結婚している人は何？　公私混同してるってこと？」

「道之と沙耶さんは終わった関係なの」

「元カノっていう認識じゃなくて、新しい存在としてみるようになったら気の迷いが起きないとも限らないと思うけど」

　テンの道之に対する批判は止まらない。ああ言えばこう言うテンを涼子は疎ましく思った。

「さっきから、どうして彼のことを悪者にしようとするのよ」

「悪者になんかしてないけど……うまくいったところで家庭を顧みない男なんでしょ？」

「それは店長が勝手に想像したことよ」

「友達の言う事は当たってると思うけど」

「そんなのわからないじゃない。それに、店長は沙耶さんと暮らしてた時の道之を思い返して言

ってたわけだし。今とは違うはずだわ」

　涼子の語気が荒くなる。テンはそんな涼子をじっと見据えた。

「相当な自信ね」

「私は、彼を信じてるだけよ」

　涼子は低く、力強い声で言い放った。道之を弁護するうちに、自分の想いも強固なものとなった。

　毅然とした涼子に、テンは受け入れ難い違和感を感じ始めていた。涼子は道之を心から信じている。いや、心は揺れているのだが、そんな自分に負けまいと必死で闘っている。

　これは愛なのだろうか。それとも美化した独占欲なのだろうか。いずれにしても、自分には向けられたことのない、強くて暖かいエネルギーを涼子は放っている。そう感じながらテンは冷静な判断力を失った。

「どちらにしても、今のリョコは自分を磨く必要があるのよ。小説を書きたくなるようにしてあげる。書くための集中力をアップさせてあげるわ」

　リョコの願いを叶えるのはアタシ。彼女の不安を受け止めようともせず、放りっぱなしの道之なんかより、アタシの方がリョコを幸せに出来る。彼女の真の笑顔を引き出せるのはアタシだけ……。

　テンは意地になっていた。表面的に道之を評価し、非難しようとする自分を止められない。戸惑いと焦りに駆り立てられるように涼子の頭上に光の輪を作る。より強力な効果を狙った、テンすら直視出来ないほどの眩い光だった。

　同時に、涼子も頭上で起きたことに気が付いた。光を見上げ、瞬間的に目を反らず。瞼の裏に光の輪の残像が映る。

「光の輪って……あなたの仕業だったの？」

　涼子は、道之や七海や深見の頭上で見たものと同じだと悟った。

「冗談じゃないわ！　何かおかしいと思ったのよ。みんな急に態度を変えたり、今まで言わなかったような事を言ったりするから」

　テンは慌てた。

「リョコが夢に没頭出来るようにしてあげようとしただけじゃない。寂しい気持ち、自分でコントロール出来ないんでしょ？　彼の事を忘れられればすべて解決するのに、うだうだ悩んでるから手伝ってあげたのよ」

　テンは自分のしてきたことを再確認しながら涼子に言った。今、彼女に返した言葉はどこも間違ってはいないし、試験合格の為に目論んだ事だ。ただ、何か腑に落ちない。負の感情が邪魔をする。

「だからって、周囲の人間の言動を操作するなんて……」

　涼子は怒りに震えた。自分だけならまだしも、子どもの七海にまで手を加えたことが許せなかった。

　テンは光の輪を消し、口を閉ざした。

　涼子も沈黙する。

　しばらくの間、二人の息遣いだけが冷たく重い空気を揺らしていた。そして、先に声を発したのは涼子だった。

「もう私に付き纏わないで。小説なんてどうでもいいわ」

　涼子はそう言い残し、七海が眠る寝室に引き篭もった。

　ダイニングテーブルに腰掛けた姿でジーナが現れた。片足をテーブルに載せ、膝に肘を付いている。ジーナは姿を消した状態で、ずっとテンの様子を伺っていた。

「どうしちゃったの？　なんか変だよ？」

　少々苛立ちながらジーナが言った。テンは涼子が閉めた寝室の扉をじっと見つめている。

「どこが変なのよ」

　ほんの少しの間を置いて、テンはジーナの方に微かに顔を向けた。

「いつものラミエルらしくない」

　眉間に皺を寄せ、ジーナはテンを責めた。恋人の異変、特に女性がらみの事を見逃さずにはいられない。しかも、ただごとではない事に女の勘は冴える。

「そう？　全部想定内だけど」

　テンは自分に嘘をつく。

「操作してるところを見られても？　これまでのこと全部見透かされたことも想定内だって言うの？」

「そうよ。何か問題でも？」

　開き直りにも見えるテンの態度に、ジーナは焦れながら反発を覚えた。

「自覚ないんだね。焦り過ぎて、やってることがめちゃくちゃなのに」

　ジーナはテンをじっと見据えた。いつも自信に満ちた恋人が、一人の女性を前にして空回りしている。

「振り回されてるじゃない、涼子に」

　黙っているテンにジーナは非難し続ける。

「まあ、ラミエルが他の女に優しくするより、嫌われるような事しててくれた方が安心だけどね」

　女心もちらつかせてみる。だが、テンは小さくため息を吐くと、ジーナから目を逸らした。

　いつもなら、こつんとおでこを指で弾き、「困った子だね」と言うはずなのに……。

　ジーナは耐え切れなくなった。テーブルから飛び降り、テンの正面から彼の両腕を掴んだ。

「ねえ、ラミエル。涼子のことはもうやめよう。あなたがおかしくなる。私、見ていられないよ。今回の試験は諦めて、ターゲット、他に見つけ直そう」

　必死で訴えるジーナを前にして、テンは無表情のままだ。

「なんとか言ってよ！」

　ジーナは叫んだ。

　テンはようやくジーナと目を合わせた。ジーナの困惑した表情が涼子のそれと重なる。涼子から意識が離れないテンにジーナの声は届かない。

「ちょっと、一人にしてくれるかな」

　テンはそう言うと、ジーナの前から姿を消した。

事件１

　涼子はあまり眠れないまま、白々としてくる空をカーテン越しに眺めていた。精神的な疲労が激しく、体が重い。

　無理やり布団から這い出し、七海を学校に送り出す。仕事を休んでしまいたかったが、生活のためと思い留まる。

　出勤し、職場で深見と顔を合わせる。涼子を不安に陥れた覚えのない深見は、いつもの柔らかな口調で挨拶してきた。

　テンに操作されていない状態では、深見は道之のことを何と言うだろうか……。

　涼子は深見に挨拶を返しながら、確かめたい衝動に駆られた。だが、取り乱すことなく冷静に実行するだけの自信がない。道之の沙耶との過去に再び触れることになるからだ。

　でも気になる。聞こうか、止めようか……。

　それを店にいる間、ずっと繰り返していた。

　何度も目を合わせては逸らす涼子を、深見もまた、不思議に思っていた。だが、訳を尋ねようとすると客が来る。二人してすれ違いを繰り返し、涼子の退勤時間になった。

　帰宅した涼子は玄関のドアノブを回して「あれ？」と思った。開いているはずの鍵が閉まっている。携帯を開き、時間を確認。もう六時を廻っている。遊びに出掛けたとしても、七海はとっくに帰っている時間だった。

　勢いで閉めたかな……？

　そう思いながら、涼子は鍵を開けた。部屋の中は真っ暗だった。

「ただいまー！」

　涼子はどこかにいるであろう七海に向かって叫んだ。が、返事はない。

「七海、トイレ？」

　涼子はトイレのドアの上部を見た。中に誰かが入っていれば小窓から漏れるはずの明かりがつ

いていない。涼子は念のため扉を開く。ここにもいない。

「七海？」

　炬燵で寝入っている可能性もある。涼子は居間の照明を付け、炬燵布団を捲ってみた。

　やはりいない。寝室にも押入れにも七海の姿はない。一通り部屋を探した後、涼子ははたと気付いた。七海のランドセルがないのだ。

　遊びに行くとしても一度帰るはずなのに……。

　涼子は七海がそうせざるを得ない理由を考える。ふと思い立ち、七海の一番仲の良い友達、美咲の家に電話を掛けた。ごくたまに、夜遅くまで七海が世話になる家だ。

「もしもし、樋口です。忙しい時間にごめんね。今、大丈夫？」

『大丈夫だよ！　どうしたの？』

　美咲の母親の晴美が出た。子どもと同様に母親同士も仲がいい。涼子は他の母親達との交流を積極的にする方ではなかったが、晴美とだけは密に連絡を取り合っていた。

　晴美は涼子とは正反対の性格で、涼子が躊躇している隙にどんどん行動してしまうようなタイプだった。だから七海が世話になる時も、涼子からお願いするのではなく、涼子の状態を察した晴美から「今日は預かるからね」と言ってくる。もちろん見返りは求めない。裏表のない晴美に、ともすると疑心暗鬼になりがちな涼子は安心して心を開いていた。

　その晴美が少し驚いたような声を出した。大抵メールで用事を済ます涼子が、自宅に電話をしてきたからだ。

「七海が学校から帰って来てないんだけど、美咲ちゃん、何か知らないかなと思って」

『え？　帰ってきてないの？　ちょっと待ってね。聞いてみる』

　電話の向こうで晴美が美咲を呼ぶ声が聞こえる。同時に受話器を台に置く音。パタパタと少し離れた場所に移動する晴美の足音がこちらに戻ってくるのに、そう時間は掛からなかった。

『一緒に帰ってきたけど、いつも別れるところでバイバイしたって言ってるよ』

「そっか、ありがとう」

『もう六時半でしょ、ちょっと心配だね。他にも誰かに電話したの？』

「ううん、まだ」

『じゃあ、私も何人かに電話してみるよ。最近、男の子が帰宅途中にランドセルしょったまま寄り道してるみたいだから、便乗しちゃったのかもしれないし』

「そうだね。私、女の子のうちに掛けてみるから、男の子は頼んでいいかな」

『いいよ！　じゃあ、また後でね！』

　平静を装っている涼子を感じ取り、晴美は自ら動いた。

事件２

　涼子は七海がよく遊んでいる女の子の家から順番に電話を掛けた。あまり遊ばないような遠くに住んでいる友達の家にも掛けた。だが、すべて手掛かり無し。再び晴美に連絡を取ると、やはり誰も学校を出た後の七海を見ていないとの事だった。

　涼子は近所を捜してみる事にした。この時点で七時を過ぎている。辺りは真っ暗だ。通学路を中心に公園や児童館、近くのマンションの駐車場などを覗いてみる。寒空である故、たむろっている不良すらいない。

　七海が普段足を運んでいる場所を、涼子はぐるぐると何周も廻っていた。晴美の言った事に相槌を打ったものの、七海は友達に誘われたからと言って勝手にどこかへ行くような子ではない。

　午後八時。念のため、一度帰宅する。七海は帰っていない。

　どうしよう……。

　涼子はパニックに陥りながら携帯を取り出した。道之にメールをする為だ。

　電話ではなくメール。涼子はそれを意識していたわけではない。仕事中の彼に私用で電話をすることなど絶対に許されないと体が勝手に反応する。仮に仕事中でなくても、自分のことで道之を煩わせてはいけないとさえ思っている。自分が余計なことで道之を疲れさせてはいけないと涼子は頑なだった。

　ただ、今日は緊急事態だ。こんな時くらい頼ってもいいだろう。涼子は本来なら無用な言い訳をしながら、携帯の文字を打った。

　メールを打ち終え、携帯を閉じると、涼子は再び闇の中を彷徨い始めた。

　道之の携帯のバイブがズボンのポケットで震えた。仕事中に来た携帯メールは休憩になるまで読まないことにしている。

　道之はいつものように、メールが届いたことを少し意識しただけですぐに仕事に集中した。だが、なぜか気になる。胸騒ぎを何度かやり過ごすも、どうにも無視できない何かを感じる。道之はキーを打つ手を止め、携帯を取り出した。

涼子からのメールに尋常じゃない状況を察する。道之は下唇を噛みながら思案した。

行ってやりたい。でも、社員全員、少しでも早く作業を終えるために必死になる時間に、「失礼します」と言って一人抜け出すことなど出来ない。いつもの涼子なら自分で解決する。本当にどうしようもなかったら、また連絡が来るはず……。

そう考えた道之は、携帯を開いたままデスクの上に置いた。涼子からのメールにすぐ反応できるようにだ。これだけでも道之にとっては精一杯の配慮だった。

道之の異変に気付いたのは沙耶だった。そして、違和感を覚えた。

道之は誰かからの大事な連絡を待っている。プライベートと仕事をきっちり分ける道之が、携帯をデスクに置いてまで気にしているとなると、よほど大変なことが起きているのだろう。

沙耶がそう思ったのは、職場にいる限り、仕事関係の連絡が携帯に来ることは有り得ないからだ。だが、道之がプライバシーを探られることを何よりも嫌がることを沙耶もまた知っている。自分が口を挟むことではないと、沙耶は仕事に集中した。

テンはその様子を苛立ちながら見ていた。もちろん姿は隠している。天使としてなのか、一人の男としてなのか、テンは涼子を助けに行こうとしない道之を歯痒く思っていた。

事件３

　何かを決意したテンは道之の開かれた携帯に念を送り、消灯したメールの画面を何度も点灯して表示させた。その度に道之は携帯を覗くものの、新たに着信があったわけではないとわかるとそれですぐに目を逸らす。

　仕事への執念が強すぎる……。

　もどかしさが頂点に達したテンは、道之ではなく沙耶に念を送った。彼の背中を押すものが必要だと判断してのことだ。テンは静かに目を瞑ると、沙耶の頭上に光の輪を作った。

　沙耶はふっと顔を上げ、その場に立ち上がった。そして、今渡す必要のない書類を持って道之に近づいた。

「瀬川さん、これお願いします」

　そう言って沙耶は道之に書類を手渡した。

　そのタイミングを狙って、テンが道之の携帯を点灯する。

　沙耶の目に携帯の光が否応なく飛び込む。沙耶は道之の携帯を反射的に見た。沙耶もまた、ずっと長い間、誰の携帯であっても見るのが怖かったのに、だ。

　道之と付き合っていた頃、沙耶はよく彼の携帯を覗いていた。彼のことをすべて知った上で安心したかったからだ。

　だが、携帯を見る度に後悔していた。

　女友達からの楽しげに躍っているメールは、安心するどころか更に不安に陥れるものだった。彼の返信も同様だ。沙耶は不安定になった気持ちを彼にぶつける。裏切っている訳ではない道之の言葉に納得し、仲直りはするものの、女友達との連絡を絶やさない彼への猜疑心は消えない。
また、携帯を覗く。喧嘩する。悪循環だった。

　自分の行為が自分を苦しめていたと悟ったのは道之と別れてからだ。この時の苦い経験から、沙耶は誰の携帯でも見ることをやめていた。

　それなのに、沙耶は吸い寄せられるようにして道之の携帯を覗き込んだ。何の躊躇いもなくメールを読み、道之に声を掛けた。

「瀬川さん、仕事なんかしてていいんですか？」

　元恋人とはいえ、上司である道之に沙耶は敬語で話す。でも、今日は口調がきつい。

「え？」

　携帯を覗かれたことに気付かなかった道之は、沙耶が何を言っているのか理解出来なかった。

「涼子さんからのメール」

　沙耶はそう言って、道之の携帯を指差した。道之は慌てて携帯を閉じる。

「涼子さんのところへ行ってあげてください」

　沙耶は半ば強制するかのように言った。

「おまえには関係ないだろ？」

　道之は憮然として答える。

「関係あるとかないとかじゃなくて、放っておいていいんですか？　後悔しませんか？」

　沙耶の声がだんだん大きくなる。周りの同僚が何事かと二人を見た。

「仕事が先だよ。片付けてから。みんな頑張ってるのに俺だけ一人抜けるわけにいかないだろ？」

「何を言ってるんですか！」

　沙耶は声を荒げた。

事件４

「もし、このまま放っておいて涼子さんやお子さんに何かあったら、瀬川さん、平気でいられるんですか？　事件かもしれないんですよ？」

「もう一度連絡があったら考えるよ。もしかしたら、もう見つかってるかもしれないし」

「もう一度って、既に緊急事態だから涼子さん、連絡してきたんですよ？　どうしていいかわからないから助けを求めてるのに」

「じゃあ、警察に連絡しろってメールしとくよ。本当に事件だったら、素人が首突っ込まない方がいいと思うし」

　道之の冷静極まりない言葉に、沙耶は怒りがこみ上げてきた。

「……瀬川さんって相変わらず冷たいんですね」

　沙耶は声を震わせながら道之を睨んだ。

「私の時もそうだった。仕事仕事で、私のことは一番最後。休日もろくになかったですよね？　でも、もっと一緒にいたいなんて言えない。仕事上の付き合いや、一人で息つく時間も欲しいだろうし、疲れてるのがわかってるのにそれを言ったらただの我が侭だって必死で我慢してたんです。最後は寂しさで爆発しちゃったけど……。でも、今回は甘ったれた連絡じゃないんです。瀬川さん、涼子さんのお子さんに何かあったら、あの時行ってやれば良かったって思うんじゃないですか？　もし、思わないとしたら……」

　沙耶は数秒間、沈黙した後、「……軽蔑します」と付け加えた。

「もう、瀬川さんの下で働きたくなくなると思います。別の部署に移動願出します」

　道之は沙耶の目をじっと見つめた後、ふと笑みを零した。

「沙耶、強くなったな」

「え？」

「あ、いや……」

　道之は頭に浮かんだ昔の沙耶に触れる事をあえて避けた。

「これ、明日までにまとめないとならないんだぞ？」

「大丈夫です。任せてください。瀬川さんと動いていたんで内容わかってますから」

「でも、ここから出づらいよ。他の奴らだって手一杯なのに」

　オフィスの中には道之と沙耶の他、三人が残っていた。離れたところに座っているので、二人の会話は届かない。

「皆には私から事情を説明しておきます」

「なんて？　涼子は身内じゃないんだぞ？」

　道之は少し離れた三人に聞こえないように声のトーンを下げた。沙耶も座っている道之の目の高さまで腰を落とし、調子を合わせた。

「身内と同じですよ。繋がりを信じ切れてるからこそ、放っておいても大丈夫って思ったんじゃないんですか？　他人だったら逆に放っておかないですもん、瀬川さん」

「そうか？」

「そうですよ。昔、身内が危篤になっても仕事を優先するって豪語してたじゃないですか。友達に相談があるって言われると、寝る時間割いてまで飛んでいくのに。それとも瀬川さん、涼子さんと遊びで付き合ってるんですか？」

「そんなわけないだろ」

「ですよね？　瀬川さん、こう見えて真面目だから」

「どう見えるんだよ」

「女の扱いがうまい」

「チャラ男みたいに言うな」

「すみません。とにかく、他の方にはご家族が事故に遭われたって伝えておきますから」

「あれ？　沙耶さんは嘘が嫌いなんじゃなかったっけ？」

「物事を円滑に進めるための知恵です。それに嘘じゃないです。遊びで付き合っているのじゃないなら、何もない限りいつか家族になりますよね？　将来的に立派な家族です」

「すごく短絡的だな。距離を保ったままでも真面目な付き合いってあると思うけど。それに俺、涼子に振られるかもしれないし。沙耶の時みたいに」

「私、振ってませんから！」

　沙耶はかがめていた腰をピンと伸ばし、大声で訂正した。

事件５

「そう？　出て行ったの、おまえじゃなかったっけ？」

「そうですけど……私の事はいいですから、早く行ってください！」

「わかったよ。じゃあ、頼むな」

「大丈夫です」

「ありがとう」

　出て行く道之の背中を見送りながら、沙耶は自分の言動を不思議に思っていた。密かに道之との復縁を願っていたのに、今の自分は彼との距離を広げることを選んでいる。ライバルの肩を持っている。

　何かに操られているみたい……。

　沙耶はそう思った。

　携帯など見て見ぬ振りをしていれば、涼子は道之に不信を抱き、二人の間には亀裂が走ったかもしれない。そうすれば、道之の気持ちを自分に向けやすくなったかもしれない。でも、人の不幸の上で成り立つ幸せなど本当の幸せではない。沙耶はそれを自ら考えたというより、感覚的にそう捉えていた。

　これで良かったんだよね……。

　沙耶は自分を納得させるように小さく一回頷くと、道之のデスクで作業を再開した。

　ところが。

　廊下でエレベーターを待つ道之の元に、同僚の鈴木が血相を変えて走り寄ってきた。鈴木は沙耶の同期だ。

「瀬川さん！　沙耶ちゃんが」

　ただ事ではなさそうな様子に道之がオフィスに戻ると、沙耶は体をくの字に曲げ、腹を抱え込むようにして床に倒れていた。苦しげに呻き声を上げている。オフィスに残っていた他の二人は

新人で、沙耶を覗き込むように立ち竦むだけで何もしようとしない。

「沙耶！　どうした！」

　道之は沙耶のそばにしゃがみ込んだ。沙耶は道之の声掛けに答える代わりに嘔吐した。顔が真っ青だ。

「急に物凄い音がしたんで見たら沙耶ちゃんが倒れてて……」

　鈴木の動揺は治まらない。

「救急車呼んで！」

　鈴木の説明を遮るように道之が叫んだ。鈴木は言われるままにデスクの受話器を取る。道之は鈴木のたどたどしい状況説明を苛立ちながら聞いていた。その間も沙耶は胃の中の物を吐き続ける。

　担架を持った救急隊が到着。沙耶に酸素マスクを装着し、受け入れ先を探す。ベッドが空いていないとか、専門医がいないとかでなかなか決まらない。

　ようやく搬送する病院が決まったのは、救急隊が到着後二十分後のことだった。しかも、その病院は会社から車で一〇キロも離れている。

「救急車の中でこちらの方のお名前などを伺いたいのですが、ご同行願えますか」

　救急隊に「はい」と返事をしたのは道之だった。この時、涼子に起きていることを忘れたわけではなかった。だが、目の前で苦しんでいる沙耶を放っておくことも道之には到底出来なかった。
　テンは唇を噛みしめながら一部始終を見ていた。

　道之がすぐに涼子のところに飛んで行ったのなら、自分は何もせずに見守るつもりだった。だが、事態は予想外の展開を見せた。命に関わることはテンの力ではどうすることも出来ない。道之を操作し、沙耶を他の同僚に任せるよう仕向けることは出来るが、後日、そうした自分を責める道之がますます涼子から気持ちを遠ざけるのは否めない。

「リョコ……」

テンは居たたまれない気持ちになりながら、この場を後にした。

待っていたはずの言葉１

　涼子は暗闇の中を彷徨いながら、一人で七海を探していた。警察にも捜索願を出したが、何か情報が入ったら連絡しますと言うばかりで頼りにならない。

　涼子は七海が行きそうな場所の物陰という物陰に這いつくばって入り込む。動くものに期待を寄せると、たいがい猫だ。涼子が当てた懐中電灯の光に驚き、去っていく。

　再び、アパートが見えるというところまで戻って来た。その角の手前に薄暗い電灯が一つ点いているだけの公園がある。滑り台と砂場とブランコがあるだけの小さな公園で、高い樹木もなく、子どもが遊んでいれば柵の外からでも様子が伺える。

　探している間中、この公園は何度も注意して見ていた。それなのに、先程までは確かになかったはずの小さな人影が、ブランコを微かに揺らしていた。

「七海？」

　涼子が声を掛けると、人影は揺らしていたブランコをぴたりと止めた。涼子はゆっくりと近づきながら目を凝らす。薄明りの下、長い髪を二つに結び、ダウンジャケットにジーンズをはいたシルエットが浮かび上がった。間違いなく七海だ。

「七海！」

　涼子がもう一度名を呼ぶ。

「おかあ……さん……」

　七海は振り絞るようにして涼子を呼んだ。

「良かった、探してたんだよ。ここにいたんだね」

　涼子が更に近づくと七海はブランコから降り、おぼつか無い足取りで母親に向かって歩き始めた。七海は涼子にしがみつくと、強張らせていた表情をみるみるうちに歪ませ、号泣し始めた。
　涼子は七海をしっかりと抱き締め、「もう大丈夫。大丈夫だからね」と繰り返す。娘を抱き上げ、大きく成長した重みを感じながら「寒いから帰ろう」と家路についた。

　七海は母親の体温を感じて安心したのか、涼子の首に両手を巻きつけながら口を開いた。

「男の人に連れて行かれたの……大きくて太った人……髪の毛が長くてぼさぼさで……後から来た人と喧嘩したの。太った人はナイフ持ってて……血がいっぱい出て……怖くて、ずっと目、瞑ってた」

「そう、怖かったね……」

　涼子は七海の背中をそっと擦った。

「少ししたら喧嘩が終わって……後から来た人がここに連れて来たの……お母さんの所に帰ろうって……」

「ん？　助けてくれた人がいたの？」

「うん……すごく背の高い人……お母さん、すぐに来るからねって」

　涼子は振り返って公園を見た。人影はない。

「その人は？」

「ここに着いたらいなくなっちゃった」

　七海の話を聞き、涼子は疑問を感じた。普通、子どもを保護したら警察に連れて行かないだろうか。しかも、母親がすぐに来ると言い切っている。何を根拠にそう思ったのだろうか。

「その人、痩せてるのにすごくふわふわしてた」

　恐怖で震えていたはずの七海が安堵に満ちた声を出した。痩せた男の話をし始めた途端だ。

「ふわふわ？　痩せてるのにふわふわってどんなんだろう」

　涼子は七海の感情の変化に合わせ、穏やかに笑ってみせた。だが、そんな中でも涼子は、親の所まで送ってこないその人物も何かやましさを抱えていたのかもしれないと、疑いを辞せなかった。

　涼子は玄関を開け、灯りを点けると七海の靴を脱がせた。照明の下で改めて七海を見た涼子は思わず叫び声を上げた。

「七海！　あなた、怪我してるの？」

　七海の着ているダウンのところどころに点々と血が付いている。ジーンズにも濡れたような跡があり、涼子が触れると乾いてごわごわしていた。これが血の痕だとしたら、かなりの出血量だ。

待っていたはずの言葉２

「ちょっと、こっちにおいで」

　涼子は七海を居間に連れて行き、暖房をつけてからダウンを脱がせた。自分の体から離れた真っ赤に染まった服を見た七海は、恐怖を思い出したのか再び泣き出した。

「大丈夫よ、もうお母さんいるからね」

　涼子は床に座り、七海を向かい合わせで膝に乗せた。すぐに怪我の状態を調べるのを止め、七海が落ち着くまで背中を擦った。

「痛いところはない？」

　七海を自分の胸でしっかりと抱き、涼子はそっと問い掛けた。七海は小さく頷く。

「そっか、良かった。パジャマ着ようか」

　七海が少し落ち着いたと判断した涼子は、大量に血の付いているジーンズをゆっくりと脱がせた。七海の足に怪我をした形跡はない。上半身も特に変わった様子はない。七海はだらりと腕を下げ、涼子に身を任せている。

　七海の腕をパジャマの袖に通そうとした時、涼子は七海の手に何かが握られているのを見つけた。

「これ、何？」

「落ちてたの。綺麗だったから……」

　七海がポツリと言った。長さが十センチほどの真っ赤な羽だった。七海の汗で濡れていた羽は、手を広げると同時に艶めきを取り戻した。生きているようだ。

「どこに？」

　羽を受け取りながら涼子が質問すると、七海は怯えた表情を浮かべながら口をつぐんだ。

「ごめんごめん、いいよ、言わなくて」

　涼子は羽を七海の視界に入らない棚の上に置き、パジャマの前ボタンを留めた。

「何か温かいもの飲もう。何がいい？」

　涼子が立ち上がると、七海は涼子にしがみついてきた。

「コーンスープ」

　涼子の腰回りに顔を押し付けた七海がぼそっと言った。

「コーンスープね」

　七海を抱き上げて台所に向かった涼子は、自分と七海のマグカップを食器棚から片手で取り出した。

　レンジ台の一番下にある扉を開け、スープの粉を二袋取り出す。カップにあけて、やかんで湯を沸かし、カップの三分の二まで注ぐ。洗いカゴに挿したままのスプーンで、お湯が少し冷めるまでかき混ぜる。

　それらの単純な作業も、七海を抱えながらの状態ではたちまち難儀となる。でも、娘の心情を考えるとそんなことは苦でも何でもない。

「よし、戻るよ」

　涼子はカップを持ち、七海に微笑みかけた。

　コーンスープで体を温めた後も、七海はしばらく目をぱっちり開けたまま涼子にもたれかかっていた。普段はお喋りな七海も、記憶を遡りたくないのか押し黙っている。涼子も娘の肩を優しくトントンと叩くだけに留め、あえて何も話さなかった。

待っていたはずの言葉３

　静かな時を時計の秒針が刻んでいる。母と娘の体温がお互いの肌を行き来する。ただそれだけの何にも代えがたい安心感が七海を深い眠りに誘っていく。寝息を立て始めた七海を涼子が布団に運んだのは、帰宅してから二時間後のことだった。

　涼子もパジャマに着替え、布団に入るも寝つけずにいた。

　警察に届ける前に七海が見つかったとはいえ、誰かが血を流している事件に巻き込まれたことをこのままにしておく訳にはいかない。夜が明けたら警察に連絡を入れなければと思いつつ、七海に事情聴取が及ぶと予測されるだけに、どうしようか考えあぐねていた。

　その時、涼子の携帯が鳴った。電話だ。そっと布団から抜け出し、携帯の置いてある居間に移動する。表示されている名前は道之だった。同時に壁の時計を見る。四時を回っていた。

　今頃……。

　涼子が道之にメールをしてから八時間が経過している。どんな状況にあったかはわからないが、今回のような事でも道之にとって二の次なのだ。涼子は道之に対し、初めて不信感に近い感情を抱いた。

「もしもし」

　涼子は小声で応答した。

『連絡遅くなってごめん。会社で沙耶が倒れて、今まで病院にいたんだ』

「え？　沙耶さんが？」

　予想外の話に、涼子は思わず聞き返した。ただ、沙耶という名前に心がちょっとした拒絶反応を起こす。

『救急車呼んで、付き添ってくれって言われて……』

「だいじょうぶなの？」

『うん、落ち着いた』

「そう……」

　涼子は話を聞きながら、少しずつ現実に戻り始める。

　私より沙耶さんなんだ……。

　卑屈な想いが喉まで出掛るも、涼子は懸命にそれを飲み込んだ。むやみに嫉妬心を露わにするほど涼子は子供ではない。

『それより、七海ちゃん見つかった？』

　道之が話を変える。道之は道之で、本当に心配していたのだ。

「うん、少し前にね」

『そう、良かった……』

　道之は心から安堵したような声を出した。涼子は胸に痞えた大きな塊を持て余す。少しの沈黙の後、道之が口を開いた。

『涼子』

　静かに彼女の名を呼ぶ。

「ん？」

『考えたんだけど、おまえ、仕事辞めて家にいた方がいいような気がする』

「え？」

『家にいて、七海ちゃんのことをしっかり見守ってあげた方がいいと思うんだよ』

　道之の言葉に涼子は一瞬戸惑った。道之が何を言いたいのか全く理解できない。

待っていたはずの言葉４

「そんなことしたら生活出来なくなるよ。役所からもらってる手当なんて微々たるものなんだから」

『収入の心配がなくなればいいんだな？』

「そうだけど、宝くじでも当てない限り無理よ」

『そんなことないよ。他にも方法はあるよ』

「働かずに？　七海のそばにいてやる方法なんてあるの？」

『うん』

「何？」

　涼子の問い掛けに、道之は一瞬の間を置く。そして、涼子の耳で微かに聞き取れるほどの呼吸を二、三回繰り返した後、感情を表に出さない淡々とした口調で言った。

『一緒に暮らさないか』

　今度は涼子が沈黙する番だった。涼子は道之の言葉を頭の中で反芻した。でも、その意味に対する自分が導き出した答えを即座に否定した。

　これまでの付き合いの中で、そんなことを少しも匂わすことのなかった道之だ。遊びで付き合っている訳ではないことは確かだが、自分の時間を乱されることを人一倍嫌う道之の事だ。涼子が思いついたことを突然言うはずがない、そう思った。

　道之は、涼子が答えられないでいる理由を察していた。道之もまた、自分がこれまでに発していた言葉の数々を思い起こし、彼女の戸惑いを無理のないこととして受け止めていた。

　ただ、彼女に向けた言葉が、純粋な気持ちからかというとどこか違和感を覚える。今回のような緊急時にさえ、家族同然の人間を優先できなかった罪悪感。そんな罪の意識が今の道之を動かしていた。

『俺が二人の面倒を見るよ。見させてくれないか』

　道之はマイナス感情を振り払いながら言った。

「それって……」

『プロポーズ』

「え、でも……」

『嫌？』

「嫌じゃないけど……」

　好きな人の微妙な心の動きは良いものも悪いものも感覚的に伝わってくる。涼子は道之の言葉に対して手放しに喜べない何かを感じていた。

『もう、二人を怖い目に合わせたくない。俺が守ってやりたいんだ。電話で言う事じゃないって思ったけど、どうしても今、言いたかったんだ。俺、決心したから』

　それだけ言うと、何も答えられずにいる涼子に向かって「考えておいて」と付け加え、道之は電話を切った。

　涼子は心臓の鼓動を大きく感じながら、頭の中で道之の言葉をぐるぐると思い返していた。

　一緒に暮らそう……。

　あれだけ待ち望んでいた言葉が嬉しくない。七海に起きた事件に関連した道之の行動が、自分達の未来を映し出しているような気がしてならなかった。彼に何とかしてもらおうと期待し、結果的に自分を落胆させる。それがこの先も起こり得る可能性を否定できない。

　違う。誰かに何とかしてもらおうとしてはいけないのだ……。

　心の靄を道之のせいにしようとした自分を、涼子は即座に否定した。欲しいとする幸せは、人から与えられるものではない。道之を愛している事には変わりないが、自分という土台がしっかりしない限り、彼の言動に左右されるだけの人生になってしまう。道之に委ねた形の結婚では、いつまで経っても満足感や充足感を味わうことはないだろう。

　様々な想いを巡らせる中、感情を揺すぶられることで隠れていた本来の自分がはっきりと姿を現した。彼がいようがいまいが、幸、不幸は自分次第でどうにでもなるのだ。

　今の自分のままでは道之と結婚しても幸せを感じることは出来ない。涼子は道之のプロポーズを断ろうと思った。道之はすんなりと受け止めるだろう。道之との付き合いも終わりを告げる。
だが、それすら仕方のない事と、涼子は凛として思った。

　大晦日。涼子の誕生日から目まぐるしく一週間が経った。

「忘れ物、取りに来た」

　喧嘩して以来、初めてテンが姿を見せた。除夜の鐘を聴くと張り切っていた七海が、耐え切れずに眠ってしまった十一時過ぎの事だ。

「忘れ物って？」

　この間の喧嘩の名残を引きずり、少し気まずい思いを抱きながら涼子が訊いた。

「羽、なかった？　これくらいの」

　テンは人差し指と親指を広げて長さを示した。

「羽？　赤いのなら七海が持ち帰ってきたけど……」

　涼子は、七海が綺麗だと持ち帰った赤い羽根をテンに見せた。

「そうそう、これ」

「でも、白くないよ？」

「いいのいいの」

　テンは涼子から羽を受け取ると、ふうっと息を吹きかけた。すると、真っ赤だった羽は徐々に淡いピンクとなり、やがて真っ白で光沢のある羽に変った。

「これ、アタシの体の一部だから返してもらうね」

　そういうと、テンは翼をばさっと広げ、右手で左側の翼に差し込んだ。一連の動作をじっと見ていた涼子だったが、ふと、ある事に気が付いた。

「もしかして、テンちゃんが七海を助けてくれたの？」

「まあね。油断してざっくりやられちゃった」

「やられたって……まさか、七海の服に付いてた血、テンちゃんの？」

「そう。ごめんね、汚しちゃって」

「いいよ、そんなの……」

「家まで送り届けたかったけど、なんとなくリョコに会いづらかったからね。一応、リョコが七海ちゃんを見つけるまで危なくないように公園の外から見てたんだよ。だから許して」

　助けた人物の事を七海が「ふわふわしてた」と言い、安堵の表情を浮かべていた訳を涼子はこの時ようやく理解した。テンに包まれると思考が停止し、夢見心地になる。涼子が体験した事を七海も経験したのだ。それを悟ると同時に、涼子の中からテンに対するわだかまりがすーっと消えた。道之の事で踏ん切りをつけていた涼子だったから、というのもある。

待っていたはずの言葉６

「でも、どうしてやられちゃったの？　念みたいなの使えなかったの？」

「七海ちゃんいたしね。なんとなく人間っぽく闘ってみるのもいいかなって」

「そんな無茶しないでよ！　怪我で済んだからいいけど、死んじゃったらどうすんのよ」

　天使は刺されたくらいじゃ死なないよ……。

　本気で心配している涼子を見て、テンはあえてその言葉を飲み込んだ。

「なんとなくさ、人間の気持ちや痛みを知っておこうと思ったんだよ。大切な人を守ろうとする時の気持ちとか」

「だからって避けられる危険を冒すことないじゃない……。テンちゃん、ごめんね……ありがとう、ホントにごめん」

　必死に頭を下げる涼子を見て、テンは焦りを感じた。

　今、沙耶を優先した道之のことがあった後で、自分が七海を助けたことを涼子は知った。このままでは涼子の道之への心象が悪いままになってしまい、自分のせいで涼子の幸せを壊してしまいかねない。

　一度は、道之よりも自分の方が涼子を幸せに出来ると思った。が、やはり涼子は好きな相手と幸せになるのが一番なのだ。涼子が心から望んでいることを天使として忘れてはならないのだ。

　テンはそう思い、慌てて付け足した。

「リョコ。アタシね、今までリョコのこと利用してたの」

「え？」

　利用という言葉に、涼子は眉を潜めた。

「天使の昇格試験。一週間以内にターゲットにした人間の願い事を叶えなくちゃいけなかったの」

　テンは真実を包み隠さず述べる。

「ああ、だから一生懸命、私の願い事を聞き出そうとしてたんだ……」

「そうよ。いろいろあったけど、やっとリョコの願い事叶えられたわ。プロポーズされたかったでしょ？」

　涼子はキョトンとした。そんな願いをテンにした覚えはない。

「でも最初に言った通り、半分しか手伝ってないからね。最終的には道之の自発的な行為だから安心して」

　恋愛に関する願いを叶えたところで不合格だ。テンはその事を忘れた訳ではない。

　涼子はなぜか、願い事の内容を否定することが出来なかった。テンの勘違いだと、喉まで出掛った言葉が声にならない。テンが何か別のメッセージを放っているような、そんなオーラを感じる。だから、表に出された言葉への返答が全く見当違いになりそうな気がしたのだ。

「さて、そろそろ帰んなきゃ」

　戸惑ったままの涼子にテンがさらりと言った。

「どこに？」

「天界。もう用事が済んだからね」

「もう、お別れってこと……？」

「そう」

　テンはポーカーフェイスを保つ。

「じゃあ、そこまで送る」

　いつものようにパッと消えてしまいそうなテンを涼子は慌てて引き止めた。もう二度と会えない。直感でそう思った。

「この場で消えるなって？　いいわ、ちょっと外、歩きましょうか」

　テンの誘いに、涼子はホッとして軽く微笑んだ。スウェットの上下姿だった涼子は、その上からざっくりとしたセーターと壁に掛けてあったダウンのコートを羽織った。

　先に玄関に立っていたテンが、「これ、あげる」と言って、白い毛糸の帽子と手袋を差し出した。テンの羽のように光沢がある。

「普通の毛糸じゃないね。素敵」

　涼子は礼を言って身に着けた。その出で立ちを見たテンは、くすくすと笑いだす。

「何？」

　涼子が訝しげに尋ねると、「もこもこの雪だるま」と、テンが悪戯な目をして言った。

「ひどい！　それが言いたかったわけ？」

　怒りながらも涼子はテンのペースに巻き込まれ、いつの間にか笑っていた。

　玄関を出ると、冷たく刺すような空気が二人を襲ってきた。テンは平然としているが、雪だる

まになっても寒がりの涼子には防寒着がまだ足りない。帽子を引っ張って耳を覆い、ダウンの首元を手できゅっと押さえる。

　気を逸らした為、歩幅の違うテンとの間に距離が出来た。涼子は小走りにテンを追いかける。

　テンのすぐ後ろまで追いついてから、涼子は空を見上げた。星がキラキラ瞬いているはずが今日に限ってどんよりと曇っている。

　別れの夜なら、せめて空くらい賑やかにしてよ……。

　涼子はそんなことを考えながら目線をゆっくりと下ろした。空近くで、テンの淡いグレーの髪が目に入った。艶めいているはずのテンの髪も暗く沈んでいる。涼子にはそう映った。

「テンちゃん」

　涼子が後ろ姿に向かって声を掛けた。

「ん？」

　テンは立ち止まり、振り返る。

「私、また……小説書いてみる」

「急にどうしたの？　さんざん嫌がってたくせに」

「あのお話、天使が出てくるでしょ？　こうして実際に天使にも出会えたわけだし、今ならもっとリアルに書けそうな気がするんだ」

「そう？」

「主人公の女の子と天使の友情をもっとリアルに」

「素敵」

「マイペースだけど優しくて思いやりのある天使がずっと見守ってくれるっていうストーリー」

「アタシがリョコにしてきたことね」

「時々、喧嘩しながらね」

「言いたい事言い合って」

「だから、テンちゃんをモデルにして書き直そうかなって思ってるんだ」

「イケメン天使に変更ってわけね」

「自分でよく言うよ。オネエ言葉使ってるくせに」

　テンは笑っただけで言い返さなかった。涼子の悪態も今日で最後だと思うと愛しささえ感じる。

「道之のことでうだうだ悩んでる暇があるんだもんね。いくらでも時間なんて作れるのに状況のせいにしてちゃいけないよね。テンちゃんの言う通りだなって思った。だから、小説書くよ。自分を確立する為に。自分の人生を生きる為に」

「そう思えたんなら、もう大丈夫」

　そう言うと、テンは手のひらで涼子の頭をポンポンと優しく叩いた。涼子は首をすくめて子どもの様に笑った。

　その時、額に何かを感じて、テンは空を見上げた。

待っていたはずの言葉８

「あれぇ……雪だぁ」

　街灯に照らされた白い粒が、ふわふわと風に流されつつ空から舞い降りてくる。テンは空を仰いだまま、顔でそれを受け止めた。

「あ、ほんとだぁ。初雪だよ」

　涼子も両手を胸の前で広げ、手袋の上で溶けていく儚い雪を眺めた。

「アタシ、雪見るの、初めてよ」

　テンが言った。

「そうなの？」

　手を閉じながら涼子はテンを見上げた。

「天界はいつでも春だからね。一度、見たいと思ってたんだ」

「そう……。最後にテンちゃんの願いが叶ったね」

「うん」

　テンは口角を上げるも、寂しげな目をした。

「これ、積もりそうだよ。もう葉っぱの上が真っ白になってる」

　雪は徐々に勢いを増してくる。

「雪だるま、作ってみたいな。かまくらとかにも入ってみたい」

「テンちゃん、かまくらなんて知ってるんだ？　スキー場くらい積もらないと作れないけど、雪だるまならもう少し待ってれば作れるよ」

　時折、車の通るアスファルトも灰色から白に変わるのに時間が掛からない。

「もう少しって？」

「一時間くらいかな。もうちょっと掛かるかも」

「一時間？」

　時間を聞いた途端、テンの表情が曇った。

「どうしたの？」

　涼子が心配げに訊いた。

「アタシ、一時間もいられない。もうすぐ迎えが来るの」

「迎えって？」

「ほら、アタシがここへ来た日。リョコ、大きな円盤見なかった？」

「まさか、あれに乗ってきたの？」

「そうよ」

「瞬間移動できるのに、乗り物がいるんだね」

「天界との行き来の時は一応ね」

　相変わらず良くわからない理屈だなと思いながら、涼子は目の前に立っているテンをしみじみと眺めた。

　人間の姿をしている天使と過ごした一週間は、これまで生きてきた中で一番騒々しく、一番充実した日々だった。そして、自立しているつもりが道之に依存しがちだった生き方を深く考え、自分を変えようと思えた貴重な時間だった。

「雪だるま、一緒に作れないのは残念だけど、テンちゃんに会えて嬉しかったよ。いろいろとありがとうね」

　別れの時が来たことを察した涼子は少し感傷的になった。

「こちらこそ。リョコに会えて楽しかったよ。小説頑張ってね。それと、お幸せに」

　テンはそう言うと、涼子の額にキスをした。それと同時に念を送り、涼子の時間を止めた。涼子は蝋人形のように動かなくなった。

　テンは上空に現れた大きな楕円形の光を見上げた。

「リョコ、またね」

　テンはキョトンとしたまま動かなくなった涼子の唇に自分の唇を軽く合わせると、背中の翼を広げて光に向かって飛び立った。

　テンがいなくなると、催眠が解けるように涼子は目を覚ました。辺りを見渡し、テンを探す。テンはどこにもいない。

「また、会えるよね……」

　涼子は、鼻の奥がつんとなるのを感じながら、キラキラ光る雪を眺めた。

背中を押すもの1

　果てしなく続く空の青、瑞々しい草の緑、凛として咲く色とりどりの花々。

　一年中、安定した気候の地で、テンは閉じていた目を静かに開けた。

　涼子の小説を数日に渡り、透視で読んでいた。自分と会わなくなってからの涼子が書き直したものだ。涼子の苦悩やピュアな心がふんだんに盛り込まれている。

　テンは、物語の中の天使を自分に重ね合わせた。主人公の少女は涼子。友情が恋に変わりそうで変わらない、変えてはいけないんだという葛藤を繰り返す二人。

　涼子とこんな風に関われたら良かったのに……と想像し、慌てて首を振る。だが、物語を読み進めるにつれ、テンは以前にも増して涼子のことばかり考えるようになった。

「ラミエル、どうしたの？　浮かない顔しちゃって」

　ベンチに座っていたテンの背後から、ジーナが声を掛けた。

「わっ、ジーナ。脅かすなよ」

　テンは勢いよく振り向き、目を丸くする。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。何を考えてたのよ」

「べ、別に」

　テンは口籠りながら答えると、再び前に向き直った。ジーナは首を傾げながら、テンの隣に腰を下ろした。

「再試の申し込みしたの？」

　ジーナが尋ねた。

「え？」

「不合格決定なんだから、このまま何もしなかったら天使の輪か人間になっちゃうじゃない。忘れたわけじゃないでしょ？」

「[illegible]」

　昇格試験は天使としての力量を計るだけでなく、適性のない者は天使の称号を剥奪されるという厳しいものだ。

「ああ、そうだったね」

　テンは力なく答える。

「呑気ねぇ。ほら、行くわよ！」

　ジーナは立ち上がり、テンの腕を引いた。だが、テンは立ち上がろうとしない。

「何よ、はっきりしないわね」

　ジーナは一旦手を離し、眉間に皺を寄せながらテンを睨んだ。すると、テンがぽつりと呟いた。

「アタシ、ちょっと考えてたんだけど」

「何？」

「再試、受けるかどうか迷ってるの」

　テンの言葉にジーナはさっと顔色を変えた。

「ラミエル、馬鹿なこと考えないでね。今あなたが思っている事が何を意味しているかわかってる？」

「ジーナ、アタシ……」

「嫌よ！　絶対に嫌だからね！　ラミエルを人間になんか絶対にさせない！」

　ジーナは強い口調でテンに捲くし立てた。

　テンの心の中に自分がいないことをジーナはわかっていた。地上にいる時から、冷静さを失うほどテンは涼子に拘っていた。

テンは涼子のことが好きなのだ。だが、地上にいる時のテンは、それを自覚していなかった。いや、天界に戻るまではまだそれほどまでの気持ちはなかったはずだ。それが、涼子の小説を読み進めるうちに、彼女の何かがテンの心の柔らかい部分に触れた。おそらく、テンが生きている中で一番欲していたものだろう。

背中を押すもの2

　テンはジーナから目を逸らし、何も言わずに俯いている。ジーナはそばにいるはずの恋人を遠くに感じていた。テンが地上に行くまでは確かにあったはずの二人を包むオーラがない。

「とにかく、よく考えなさいね。私、用事を思い出したから行くね！」

「ああ」

　テンは顔を上げることなく淡々と答えた。

「引き止めないの？」

「だって、用事があるんでしょ？」

「嘘だってわかってるくせに」

　ジーナは怒りとも悲しみともつかない低い声で言った。

　ジーナの本音と嘘を、テンは見破るのが得意だった。ジーナにはそれが心地良かった。過去に付き合った男達すべてが理解出来なかったジーナの本質を、テンだけは的確に言い当てた。ところが、

「嘘だったんだ？　こんな時に嘘つかれるの、アタシ嫌だな」

　と、テンが言った。テンはかつて一度もジーナの甘えを非難することがなかった。

「ラミエル……どうしちゃったの？　今日のあなた、変だよ？」

「アタシは変じゃないよ。何か話そうとするとジーナが遮ってるんだよ。人の話を聞こうとしない人を引き止めたって仕方ないじゃない」

　テンは冷たく突き放した。

「だって！　ラミエルが言おうとしてることがわかるもの。言って欲しくないこと遮って何が悪いのよ！」

「わかってるんならいいじゃない」

「人間になんかなったら、持ってる力すべて失うのよ？　自分じゃ何もコントロール出来なくて、つまんない事で悩み苦しんで……そんな馬鹿みたいな生き物になっちゃうのよ？」

「アタシは……馬鹿みたいだとは思わないけど」

「ラミエル……」

「悩んで苦しんで、そこからどうやって抜け出そうかって必死になって、特別な力なんかなくたって乗り越えていけるのが人間なのよ。それのどこが馬鹿みたいなのよ」

「ラミエル、目を覚まして！　涼子って子に振り回されてるだけってわからないの？」

「涼子は関係ないわ。アタシが考えている事なんだから」

　ジーナが何か言えば言うほどテンは自分の気持ちを強固なものにしていった。唇を噛み締めながら、ジーナが自分に鋭い視線を送っている。そこには自分への愛と、たくさんの哀しみが詰まっていることにテンも気付いていた。それでもテンは動じることはなかった。

「私……ラミエルのこと、誰にも渡さない」

　そう言い放ちながら、ジーナもまた、愛する人のありのままを受け入れることのできないジレンマを抱えていた。

背中を押すもの3

　テンは去っていくジーナを見送ることなく、前方に視線を落としていた。

　彼女が先程までいた場所を何気なしに見る。罪悪感はあるものの、これまでのような愛しさを感じない。とはいえ、ジーナのことを嫌いになったわけではない。ただ、ジーナといた時には感じなかった、自分を突き動かす熱い何かが、涼子によって目覚めさせられていた。

　それを押し殺してはいけない、自分を誤魔化してはいけない、テンはそう思っていた。涼子の小説を読んでからはいっそう強く、そう思った。

　テンはゆっくりと立ち上がると、昇格試験の判定を行う長老の元へ足を運んだ。

　光を通す透明に近い真っ白な建物。テンはその扉を開け、まっすぐに伸びる廊下の奥へ奥へと進む。雑念が消えるまで歩みを進めると、目を覆うほどに眩しい光が現れる。テンは目を閉じて、光の中を潜り抜けた。

　長老は、樹齢何千年とも言われる大木で作られた机を前に、背もたれが一．五メートル程の丈もある椅子に腰掛けていた。テンはその長老の前にひざまずき、頭を下げた。

「ラミエル」

　静寂の中で、長老の低い声は神々しく響き渡る。

「人間の心を開き、真の天使として人間の支えになってきたか」

「は、はい。いえ、あの……」

　テンは歯切れの悪い返事をした。それに構わず長老は判定を始めた。

「愛に迷う人間を、愛に関する願いに導かなかったこと、評価すべきことと思っている」

「は？」

　テンは涼子が道之と結婚したがっていると思い、プロポーズさせるように仕向けた。それが愛に関する願いに当てはまらないというのか。自分がしてきた事と真逆の事を言う長老の言葉に、

テンは混乱した。

「これからの身の振り方を決めねばならぬのだが」

　判定を続けようとする長老に、テンは戸惑ったまま口を挟んだ。

「実は……悩んでいます」

「悩んでいる？　おまえは天使としての格を上げ、この世に存在するすべてのものに完全なる光を与えたいのではないのか」

　長老は微かに首を傾げた。

「そうなのですが……人間と接してみて、考えさせられることがあって……自分がどうするべきなのかわからなくなりました」

　テンは、子育てや恋に悩みながらも自分の夢に正面から向かい合っている涼子に触発されていた。

「自分が自分らしくやるべきことを成すには、どうしたらいいのかわからないのです」

　そう言うテンを長老はじっと見据えながら、「おまえは今回関わった特定の人間に拘っておるのか」と、訊いた。

「はい……。もう少し、リョコの力になりたいと思っています」

「ただ、その方法を考えあぐねているというのだな」

「人間になってリョコのそばにいられたとしても、自分に何が出来るかわからないのです。天使のままなら天使の力で助けてやれる。でも、それでは本当にリョコの為になる事をやっているのか疑問にも思うのです」

　テンは心に思うことをもう一つ隠していた。それすらクリアになれば悩むことなどないのにと、思っていた。

背中を押すもの4

　それを長老は見透かしていた。意識が別のところにある時、その人物の声に僅かながら張りがなくなる。テンからそれを感じ取った長老はゆっくりと目を閉じ、深く呼吸をした後、するどい眼光をテンに向けた。

「何をしてやれるのか分かれば、おまえは人間となる道を選ぶのか。分からないままなら人間になる決意が揺らぐのか」

「それは……」

「条件を掲げているうちは、純粋に他者を助けることなど出来まい。生半可な気持ちでいるのなら、このまま天界にいるがよい。人間にも迷惑だ」

　長老はテンに厳しく諭す。テンは唇を噛み締めた。

「おまえはおまえの思うままに動くがよい。それが良い結果を生む。決して迷うな。決して逃げるな。何事が起きても立ち向かえ」

「長老……」

　涼子にはもう、彼女を守る相手がいるのです……。

　テンは喉まで出掛った言葉を飲み込んだ。

「ラミエル、次の満月まで時間をやろう。それまでに心を決めるのだ」

　長老は結論をテンに委ねた。

　テンは、迷いを残したまま深く頭を下げると、長老の部屋を後にした。

　長老はじっと前を見据えた。テンが元来た光の中に、立ち去った後の大きな影だけが残る。迷いのある天使が残していくオーラの残像だ。それを眺めながら、長老はテンに黙っているある事を思い返していた。

　涼子の本当の願いは作家になることで、最終的に彼女はテンにそう宣言していた。執筆に正面から向き合うと涼子は決意し、そう仕向けようとしていたテンの試みはうまくいっていた。テンの感情が乱れていた為、想定していたものとは違った形での後押しとなったが、夢を叶える手伝い

をし、試験には合格していたのだ。

　だが、長老はテンが人間となって涼子の支えになりたいと思い始めたことも悟っていた。テンの使命、テンの幸せとは何かと考えた時に、天に留まることが彼の望むことではないと見越していた。だから、あえて合格していることを伏せ、テンの志しを貫くように促したのだ。

　草原の中を緩やかなカーブを描きながら流れる川。その穏やかな流れをテンは一人、膝を抱えて見つめていた。長老のところに行ってから十日が過ぎた。テンは毎日ここで過ごしている。昔から、何かあると訪れたくなる場所だ。満月まであと数時間。テンはまだ答えを出せずにいた。

「隣、いいかな」

　いつもなら相手の意向もお構いなしに行動するジーナが、珍しく遠慮がちに声を掛けた。この間のこともあり、拒絶されると思っていた。

背中を押すもの5

「あら、久しぶりね。いいよ」

　テンは顔を上げて軽く微笑んだ。過ぎたことは引きずらない。ジーナとの事を考える余裕がなかったというのもある。

　拒まれると思っていたジーナは「ありがと」と小さくお礼を言い、テンからほんの少し距離を開けて腰掛けた。

「川っていいね。なんか、落ち着く」

　ジーナが両手を上げて、伸びをしながら言った。

「淀んだ気を浄化してくれるからね」

　テンが静かな声で答えると、ジーナは「私も浄化しないとなぁ」と言ってフフっと笑った。

「ジーナが浄化？　どうしたのよ、急に。しおらしくなっちゃって」

「だって」

　あなたを繋ぎとめておきたいからだよ……。

　ジーナは心の中で力なく呟いた。願いを飲み込んだせいで、適当に誤魔化す言葉が出てこない。

　太陽の光に照らされて、川面がキラキラと光っている。眩し過ぎる光は、ジーナの心に矢のように突き刺さる。

　恋人と二人でいるのにジーナは孤独だった。どんなに我が儘を言っても、笑い飛ばしてくれたかつての恋人はもうここにはいない。ここに来る直前までの心の葛藤は、自分に向けられることのないテンの気を感じた途端に打ち砕かれた。

　ジーナは何度も何度も、テンに気づかれないように深呼吸を繰り返した後、決意を込めて飛び切りの笑顔を作った。

「ラミエル」

「ん？」

　テンの気のない返事に萎えそうになる心を、ジーナは必死で奮い立たせた。

「サミルって男の子、いたの覚えてる？」

　ジーナが声のトーンを上げて問う。

「覚えてるよ」

「あの子も人間になったんだよね。人間の女の子に恋して、地上で生きる事を選択したの」

「元気にしてるのかな」

「してるみたいよ。当初の予定とは随分道を逸れちゃったみたいだけど」

「どういうこと？」

　テンが意外そうに訊いた。

「彼女を追いかけて接近したまではいいけど、結局彼女の邪魔しか出来なかったみたい。闇雲に近づいて、うっとうしがられて失恋」

「ありゃま」

「でも、どうしても彼女の事を諦め切れなくて、彼女を支えるために何が必要かって模索してるらしいよ」

「一途だよね。天使って一度ターゲットを定めたら、他に目を向けないから」

「他にパートナーを見つけられてもターゲットを見守り続けてしまう……悲劇だよ」

　ジーナは暗に忠告する。

背中を押すもの6

「ターゲットが幸せになる事が、アタシ達の最大の喜びだからね」

　テンは暗に「悲劇ではない」と反論する。

「うん……」

　ジーナはテンの強固な意志を感じ、複雑な想いにかられながら頷いた。そして、ぽつりと言った。

「私はラミエルのターゲットに成り得なかったね」

　ジーナは話題を自分に向けた。

「え？」

「だってラミエルは、ターゲットを変えないはずの天使なんだよ？　恋人って存在は見守るべきターゲットなんじゃないの？」

「あ……」

「それなのに、ラミエルはターゲットを涼子にしてる。ってことは、私は最初からその対象じゃなかったってことだよね」

　何も言えないでいるテンにジーナは、「ラミエルは心変わりするような酷い天使じゃないと思ってるから」と付け足した。

「ごめん……」

　テンはうなだれた。

「責めてるんじゃないんだよ。ラミエルのターゲットは涼子だったってはっきりしたんだから、もう迷わないでって言ってるの」

「ジーナ……」

「それに、涼子を支える方法なんてラミエルならすぐに見つけられるはずだよ。涼子の夢がわか

ってるんだから」

「夢がわかってても、どうしたらいいか……」

「ラミエルは感受性豊かなんだから、涼子の作品を読んで思った事をアドバイスしてあげればいいんじゃない」

「でも、リョコはアタシのことを忘れるんだよ？　アタシはリョコの作品を読んでいないことになるの。アタシが原稿を受け取るところからしないといけないのよ。どうやってリョコが見ず知らずのアタシに原稿を読ませるの？」

「そこは頭を使わなきゃ。彼女の作品を当たり前のように読んで評価するためには、ラミエルの行くべき場所が自ずとわかってくると思うんだけど」

「あ……そっか」

「ね？」

　一から十まで導かなくてもテンには通じる。ジーナは、察しのいい『元恋人』に微笑んだ。好きなものに対しては、自分が犠牲になることを厭わない。ジーナはラミエルのそんなところが大好きで、ちょっぴり嫌いだった。でも、ずっとずっと愛していた。

「ラミエル、私はあなたの幸せをずっと祈ってるよ」

　私はあなたがターゲットだから……。

「最初から失恋してるけどね」

　テンはまた、後ろ向きの発言をした。そのテンにジーナは一喝した。

背中を押すもの7

「好きな相手がどこを向いていようが貫くのが愛だよ。こっちを向いててくれるから愛するっていうのはただのエゴ。そう思わない？」

　ジーナは勢い良く捲し立てた。感情の高ぶりと共に、抑えていたものが目から溢れる。

　テンはようやくジーナが強がっていたことに気づき、反射的に彼女を抱き締めた。しかし、ジーナはその手を毅然と振り解いた。

「安っぽい同情なんかいらない。優しさが相手を傷つけることだってあるんだよ。天使の癖に知らないの？　早く涼子のところへ行きなさいよ。振る相手には自分を大っ嫌いにさせるくらい冷たくするのよ。それが思い遣りってもんでしょ？　女の子の心理、もっと勉強しなさ……」

　テンはポロポロと涙を零すジーナの手を掴み、強引に自分の胸へ引き寄せた。また振り払おうとするジーナを、今度は離してはいけない気がした。テンは、腕の中でもがくジーナを、背中の翼でふんわりと包み込む。傷つけてしまった元恋人にこれまでの感謝の気持ちを込めて。

「優しくしないでって言ってるのに……」

　テンの翼は相変わらず柔らかくて温かい。本当は、一人で立っていることが出来ないくらい憔悴していたジーナは、全身の力を抜いてテンに体を委ねた。でも、そうしている間中、テンは自分を突き放さない。テンから去ろうとすることはない。

　ずるい……。

　ほんの少しだけテンを憎む気持ちが沸き起こった時、ジーナはこのままでいたい自分を切り捨てるように、ゆっくりと腕を伸ばしてテンから体を離した。テンは静かに翼を閉じた。

　涙でぐしゃぐしゃのジーナの頬を、テンは指でそっと撫でる。

　ジーナは鼻を啜りながら、少しだけ笑う。

「……じゃあね」

　立ち去り際、ジーナはそれだけ告げるのが精一杯だった。

夢への階段１

　テンが涼子の前からいなくなってから四年が過ぎようとしていた。

　小学三年生だった七海は中学一年生になった。二学期が終わる頃には中学の生活にすっかり馴染み、部活に友達付き合いにと自分の世界で忙しい毎日を送っている。

　それ故、涼子に自分の時間が出来た。一日一、二時間程度だったが、家事を終えた就寝前パソコンに向かう。仕事が忙しかった日は数行書くだけで眠気に襲われたが、体力のある日は徹底的に作品と向き合った。

　ひとたび物語の中に入り込むと、涼子の周りから音と景色が消える。静寂と闇の中で、登場人物達が様々な感情を絡み合わせ、悩み、怒り、喜び、涙を流す。涼子はすべての人物になり切って言葉を紡いだ。そうして最後まで書き上げては最初に戻り、何度も修正を加えた末に作品を完成させる。

　随時、原稿を受け付けている出版社に作品を応募し、それをすっかり忘れていた日のことだった。

　涼子の携帯に電話が掛かってきた。七海と炬燵で食事をしていた涼子は、ディスプレイに表示された見慣れない番号を三コール分見入った。

「お母さん、電話出ないの？」

　電話に出るのを躊躇する事など考えられない七海が言った。

　涼子はいつも、知らない番号には出ない。家の固定電話でさえ、セールスの可能性が高い時間帯には居留守を使う。携帯でも知らない番号の主は間違い電話と決め込む。必要な用事なら再び掛かってくるはずと思っているからだ。

　しかし、今回は妙な胸騒ぎがした。第六感が働いたともいうべきか。

「もしもし」

　涼子は四回目のコールの途中で電話に出た。

『樋口涼子さんですか？』

　滑舌の良い男性の声がした。

「はい、そうですけど」

　涼子は警戒しつつ身構えた。

『秋空社の天堂というものですが、樋口さんがご応募してくださった作品のことでお電話差し上げました』

　秋空社とは涼子が原稿を送った出版社だ。涼子の携帯を持つ手から全身に緊張が走る。

「あ、お世話になっております」

『こちらこそ、この度は原稿をありがとうございました』

　天堂は丁寧に答える。

『今回送っていただいた作品を拝読させていただいたのですが、女性らしく繊細な表現や視点の捉え方、ロマンティックでありながら力強いものを感じさせるところが、多くの読者の共感を得るものであると思いまして、出版化の方向で話を進めていきたいと検討中なんです』

「え？」

　涼子は、出版化という言葉がしっかり耳に入っていながらも聞き直した。

『出版化です。樋口さんもそれをお望みですよね』

「ええ、もちろん」

『しかしですね、少々問題がありまして、まだ決定ではないのですよ。そこでご相談したい事があるのですが……』

　涼子は、もったいつけた天堂の話に猜疑心が過り、頭に思い浮かんだ事を口にした。

「あの……」

『はい』

「私、お金持ってませんよ？」

『は？』

「自費出版とか共同出版とか言われても、お金ないですから」

　涼子は過去に一度、自費出版を主とする出版社に原稿を送ったことがあった。優秀な作品は企画として取り上げるということだったので、他の新人賞と同様のつもりで応募したのだ。

　すると、その出版社から電話が掛かってきた。「新人賞には届かなかったが、とても素晴らしい作品なので、少し直して世に出したい」というものだ。出版社の人間と初めて接点を持った涼子は舞い上がり、契約の一歩手前まで話を進めてしまった。だが、よくよく話を聞くうちに多額のお金が掛かるとわかり、危うく難を逃れたのだ。

　天堂は涼子の話を聞き、一瞬沈黙した後、声を上げて笑った。

『そんなんじゃないですよ。心配なさらないでください。企画出版でのお話です』

「ああ、そうなんですね」

　涼子は胸を撫で下ろした。

『ところがですね』

　涼子が安堵したのも束の間、天堂が急に声を潜め、また不安を煽った。

『私はこの作品を強く推しているのですが、他にもう一作品優秀作がございまして、選考委員の意見が割れてしまっているんですよ』

「はあ……」

　涼子は曖昧な相槌を打つ。

『樋口さん、明日、秋空社に来ていただくことが出来ますか？』

　秋空社は涼子の家から電車で三十分程の所にある。明日は偶然にも仕事が休みだ。

「伺うことは出来ますが、私が行ってどうなるんですか？　応募した人間がどうこう出来る問題じゃないんじゃないですか？」

　涼子は天堂に率直な疑問をぶつけた。

『ごめんなさい、これ以上はお話出来ないんですよ。秘策があるのですが、周りが聞き耳を立てているので……』

涼子は、出版に関して周囲に聞かれてはいけない話などあるのかと訝しく思った。天堂は『怪しい話じゃないですから。安心してください』と、涼子が何も言わないうちに先を読んだ。

怪しい奴ほど怪しくないっていうのよね……。

涼子はそう思いつつ、出版社内部の事情を知るチャンスだと思った。

出版化が空振りしても、何かネタになるような体験が出来るかもしれない。それに、鼻先にぶらさげられたにんじんが、本物か偽物か確かめないでいるのも気持ちが悪い。

涼子はとりあえず、好奇心を満たすだけでも十分価値があると、天堂との約束を取り交わした。

翌日、涼子は高くそびえ立つビルの前にいた。涼子は首を九十度後ろに倒し、真下からビルを見上げる。ビル正面には大きく『秋空社』の文字が掲げられていた。

涼子は辺りを見回した。天堂らしき男性はいない。慣れない状況では人一倍緊張する涼子は、胸に手を当て、鼻から大きく息を吸った。が、心臓の鼓動は落ち着く様子を見せない。何度も冷たい空気を肺に送り込む。数度目に、涼子は天堂の言葉を思い出した。

『ビルの前に着いたら連絡をください。玄関まで迎えに行きますから』

外で待ってるわけじゃないんだった……。

涼子は慌てて携帯を開いた。あらかじめ登録しておいた天堂の携帯番号を出し、発信ボタンを押す。すると、ワンコールで応答があった。

夢への階段３

『はい』

「もしもし、天堂さんですか？」

　涼子は一応、確認する。

『こんにちは。お待ちしておりました。今、降りていきますね』

　天堂も涼子の番号を登録してあったのか、名前を尋ねることなく用件だけ言った。

　声を出すことで涼子の緊張が少しほぐれた。だが、電話を切ってから五分が経過しても天堂は降りてこない。緊張の糸が再びピンと張り詰める。涼子は気を逸らせる為、ビルに背中を向け、通りを歩く人の流れを目で追いながら何度も深呼吸をした。

「樋口さん」

　出版社に来ていたことなど忘れ、人間観察にすっかり夢中になった頃、涼子の背後から声がした。振り向くと、見上げるほどの大男が立っている。涼子は大男の顔を凝視した。

　見覚えがあるような……。

「どうかなさいましたか？」

　大男が涼子に訊ねた。涼子は質問には答えず、一言呟いた。

「テンちゃん？」

　天界に戻ったテンに瓜二つだ、と涼子は思った。

　驚いたのは天堂の方だった。天堂は涼子の察した通り、人間に姿を変えたテンだ。しかし、人間になると同時に涼子の記憶から消されたはずの自分を彼女は覚えている。なぜだ、と天堂は疑問を抱いた。そして、四年前に遡り、記憶を紐解いた。

　人間になって天界を離れる時、テンは長老に、『特別な計らいをする』と告げられていた。テンは何の事だかわからず、でも、聞き返す余裕のないまま地上に降りてきた。

　人間としての生活を始めてからも、特別に変わったことが起こる様子もない。出版社に入社し、天使としての能力がなくなった状態に慣れることに必死で、長老の言葉を振り返る余裕もなかった。

　そのうち、天使だった自分を忘れるようにもなった。そんな時に、涼子の原稿と再会した。ようやく人間として、涼子の役に立てる時が来た。そして今日。特別な計らいの意味するところがわかった。涼子の記憶から自分を消さないということだったのだ。

　しかし、天堂は人間として涼子を助けたい一心でここへ来た。涼子に「自分はテンだ」と白状すると、目的を達成する事が出来ない気がした。本当は正体をばらして、強引な自分をさらけ出し、抱き締めたいとも思っていた。

「テンちゃんってお知り合いですか？」

　天堂は平静を装い、知らぬ振りをした。

「ごめんなさい、初対面の方に失礼なこと言っちゃいました。背の高さとか整ったお顔立ちとか知り合いにそっくりだったもので」

「私も整ってますか？　顔」

「ええ、かなり」

　お世辞は言わない涼子は率直に答え、「もう、ずいぶん会っていないんですけど」と、昔を懐かしむように小さく微笑んだ。天堂はそんな涼子を愛しく思いながら、四年振りだねと心の中で呟いた。

夢への階段４

「とりあえず、ここは寒いので中に入りましょう」

　天堂はビルの中を指差した後、歩き始めた。涼子が付いてくるのを確認しながら、「今日はわざわざお越しいただきましてありがとうございました」と言った。

「いえ、こちらこそ、連絡いただけて嬉しく思ってるんですよ」

　涼子は歩きながら、少しぎこちなく深々と頭を下げた。

「あちらの喫茶室でお話しましょう」

　ビルの入り口から向かって右奥に喫茶室はある。

「はい」

　涼子は斜め右上に見える天堂の笑顔に返事をした。

　天堂が喫茶室のガラス扉を押して、涼子を中に導いた。天堂は窓側のテーブルに涼子を誘導する。対面に座ると、天堂は涼子にメニューを渡しながら質問した。

「そのテンちゃんっていう方、どんな方だったんですか？」

　涼子は「そうですね……」と考えた後、きっぱりと答えた。

「私の願いを叶えに来た天使です。なんて言ったら頭が変だって思われちゃいますね」

　変だと思われようと、こう答える以外にないし、こう答えたいと涼子は思った。

「そんなことないですよ。私も天使の存在、信じてますから」

　当然の事のように天堂が言った。

「そうなんですか？　男の人なのに珍しいですね」

「同じ数字の組み合わせを何度も見たりするのって、天使からのメッセージだっていうじゃありませんか」

「あ、それ、聞いたことあります。『１１１』は、思考が物凄い速さで具体的な形になるとかって」

「そうそう！　だから、『１１１』を見た時、現実化したいことを咄嗟に唱えちゃう」

「私も！」

　天使の話題で二人は意気投合し、顔を見合わせて笑った。

「テンちゃんのことなんですけど……私の願い事は付き合っている彼からプロポーズだって誤解してたみたいなんです」

　涼子がテンの話に戻した。

「誤解……ですか？」

　天堂にとっては寝耳に水だった。

夢への階段５

「彼にプロポーズされることが私の願いだって勘違いしてたみたいなんです。もちろん、願い事の一つではあったんですけど」

「けど？」

「私の一番叶えたい願いは、彼に一目置かれる人間になることなんです。彼が仕事のパートナーを『すごく出来る奴』だって褒める度、自分は彼に認められるようなものを何も持ってないって卑屈になって」

「ほう……」

「そんな時にテンちゃんが現れて、中断していた執筆を再開しなって言ったんです。書きかけの小説があるでしょって。最初は、そんな時間はないって突っぱねてたんですけど、志してることがあるのに努力もしないでぬくぬくと再婚なんてしたら、後々悔やむことになるかもなって思ったんです。道之にプロポーズされた途端、自分には何もないのに今の自分のままでいいの？　って目が覚めたんです」

「結婚しても書けるんじゃありません？」

「うーん……結婚となったら、やっぱり旦那様にいろいろしてあげたいとも思っちゃうじゃないですか」

「本来、家庭的な人なんでしょうね、樋口さん」

「それはどうだか……。だから彼には、五年待ってって言ったんです。五年、夢にかけるチャンスをくださいって」

「そんなこと言ってたら、他の女性に取られちゃうかもしれませんよ？」

「そうしたら彼とは縁がなかったんです。そういう人と一緒になってもうまくいきませんよ」

「彼を信じてるんですね」

「ええ。それに、天使の力を借りたプロポーズだったから、そうじゃなくて、自分の魅力でされたいじゃないですか」

「確かに」

「どんな願いでも、何か特別な力を借りて叶えたところできっとすぐにボロが出るでしょう？
でも、自分の力で夢を叶えることが出来たら、次に何かあったとしても自分で自分を支える事が出来るじゃないですか。乗り越えられる自分を知っているから」

　涼子がそう言った時、天堂は再び天界での出来事を思い出した。長老が、『愛に迷う人間を、愛に関する願いに導かなかったことは評価する』と言ったのはこの事だったのだ。

　でも、導かなかったというのは嘘だ。自分は沙耶に道之の携帯を覗かせ、沙耶を使って道之を涼子の元へ行かせた。それがきっかけとなって道之は涼子にプロポーズした。しかし、涼子はそれを断った。半分だけ涼子の願いを叶えたつもりが、涼子によって阻止された。導かなかったのではない、導けなかったのだ。もっとも、涼子の本当の願いではなかったのだが。

　天堂は、物事を安易に考えていたあの時の自分と、自立しようとプロポーズさえも振り切った涼子を比べ、しみじみ呟いた。

「強いですね」

「可愛げないですよね」

「いや、そういう涼子さんだったら、彼は五年も待ちきれなくてプロポーズしてくるかもしれませんよ」

「作家として軌道に乗ってたら……」

「受けますか？　プロポーズ」

　涼子はその質問には答えず、ふふっと小さく笑った。

　オーダーもせず、話に夢中になっている二人の前に「ご注文はお決まりですか？」と、ウエイトレスがやってきた。

夢への階段６

「涼子さん、何をお飲みになりますか？」

「えっと……」

　涼子が手渡されたままのメニューを覗き込むと、天堂がぼそっと言った。

「スイーツでも構いませんよ。コーヒーゼリーとかバナナパフェとか」

　涼子は一瞬動きを止めた。どこかで聞いた事のあるようなフレーズだと思いながら、涼子は顔を上げて天堂を見た。

「ごめんなさい、大人の女性が初対面の男と食べるものじゃないですよね」

　涼子が機嫌を損ねたと思った天堂はそう言い訳をした。

　涼子は一回呼吸をする間、天堂を見つめた。そして、「天堂さん、本当はテンちゃんなんじゃ……」と呟いた。

　天堂は頷きたい衝動を必死で抑える。

「そんなことあるわけないじゃないですか。私が天使だったら、涼子さんの作品、いくらでも本にしちゃいますよ」

「そう……ですよね」

　何か引っ掛かるものを拭えぬまま、涼子は口角を上げた。

　結局、この店のオリジナルコーヒーを二人で注文し、天堂が本題に入った。

「優勝者を決めるにあたり、その作家さんの将来性を見ようということになったんです」

「将来性といいますと？」

「うちとしましては、一冊本が出せればいいというのではなく、その先もずっと続けて活躍していただける人材を探しているんです」

「私は何をすればいいんですか？」

「次回作を考えていただきたいんです。この一週間で」

「一週間で……ですか？」

「ただ全編書いてくださいとは言いません」

「ああ、良かった。びっくりしました」

「プロットだけ考えていただきたいのですよ。それを参考にして審査をするんです。アイデアだけなら、そのくらいで書けませんか？」

「はい……でも、大まかなプロットはすぐに書けても、お話をひねったり、どんでん返しさせたりするのに、私、わりと時間掛けちゃうんですよ」

「一人で作業なさってるからでしょ？」

「ええ、まあ」

「今回は私がサポートします」

「サポート？」

「一通り筋書きを考えてくださったら読ませてください。アドバイスしますから」

「天堂さんが手伝っちゃっていいんですか？」

「大元は樋口さんの作だから大丈夫です。アドバイス後に書き足していくのは樋口さんなんだし」

「そっか……そうですよね！　わかりました。頑張ります！」

　涼子は天堂に背中をそっと押されながら、夢への階段を一歩一歩昇り始めた。

　天堂は、涼子のそばで力になれることを確信する。

涼子、三十二才のバースデイ・イヴのことだった。

バースデイ・イヴ　～天使はキミを利用し、そして愛した～　完